

大木のつと



其の貳

じろちょう 著

タビのキ

其の貳

じろちょう 著



タビのキ

良かった
楽しかった
と思える旅は
何がある旅なんだろう

人と物
両方に支えられて
旅は動き出す
記録と記憶
両方に支えられて
僕らは感じる

旅……

はじめに／3

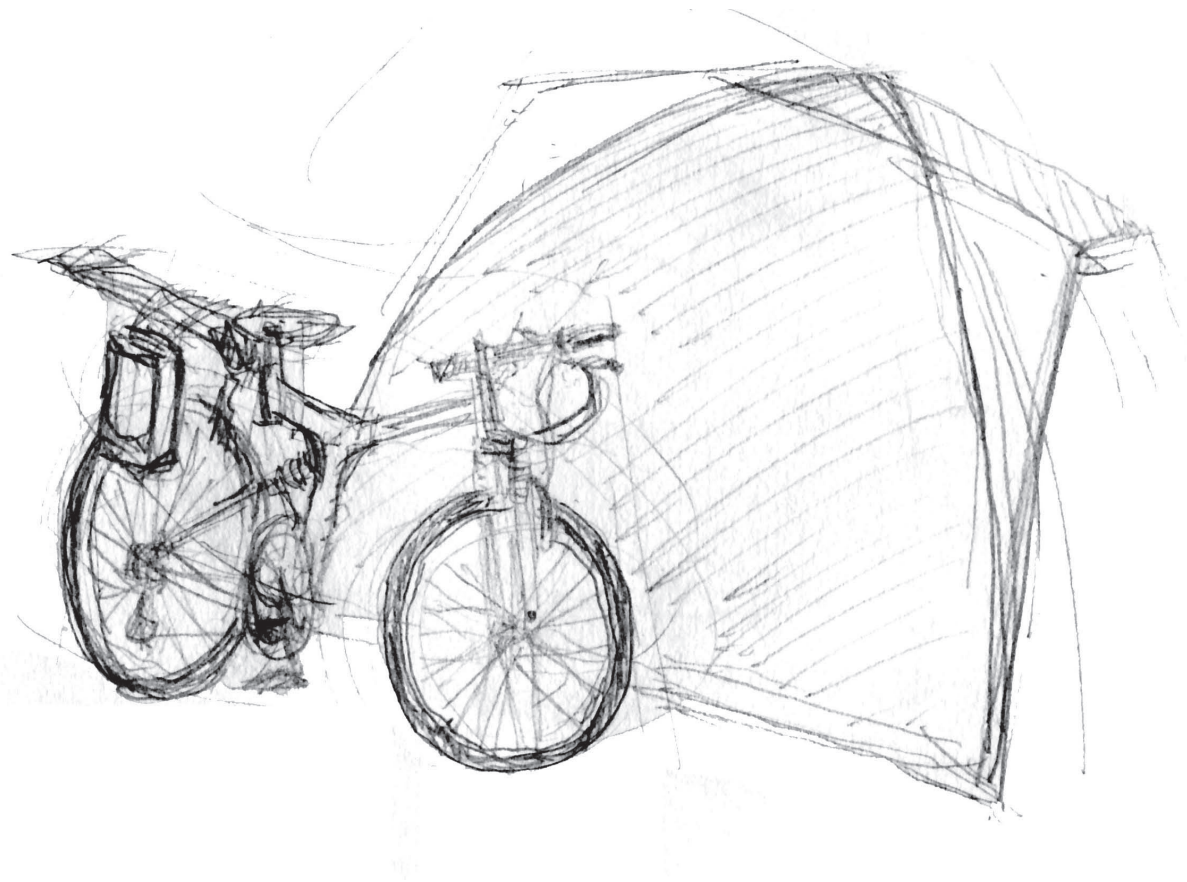
北海道編・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
5

屋久島編・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
53

ペルー編・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
157

あとがき／245

北海道編





すべての道の始まりは江戸・日本橋……昔からそうなっています。旅はそこから始まるんです。もちろん、僕は橋の下に住んでるわけじゃないけど、スタート地点として日本橋はいい感じでした。

春過ぎて、僕の足とし動くのは、赤い色した鉄の馬なり……、バイクが僕の物になったとき、そりゃ、乗らなきゃいけないと思っただんです。お金を出して購入した物としては初めてのバイクです。しかも、排気量も大きいヤツで、とにかく遠くまで乗りたいという気分にさせてくれるヤツなんです。

そのバイクをゲットするまでは、僕の頭の中に長期ライダー計画は全然ありませんでした。でも、それができる環境が整ってしまっただけ、僕の思考回路はバチバチと反応してしまっただけです。……「北海道」……「輪車乗りの聖地」です。

環境ってのはすごい力を持っています。そいつが少し変わると、僕らも少しずつ変わっていきます。そして、少しずつ変わっている自分に気づいたとき、今度は大きな変化が自分にやってくることもあります。チャンスは逃すモンじゃありません。チャンスを生かしてスタートダッシュです。スタート地点について自分、あとは走り出すだけ……前へ、前へ……。

スタート地点まで、かなりの時間がかかりましたけどね……。



おっちゃん、よろしく！

ボコボコボコオ……と、後ろの方から何かが聞こえてきました。「むむつ、暴走族か？」とバックミラーをのぞき込んでみても普通の風景です。何かおかしいと思いながらも東京の街を走り続けます。やつぱりボコボコボコオ……と、何かが追いかけてくるんです。むう……、何でしょう。

ちよつと曲がったときにグリン、とバランスが崩れました。そこで、やつと気づいたんです。パンクでした。

スタート地点として設定した日本橋から、まだ何キロも走っていません。江戸を出てもいないのに、足止めをくらいました。バイク屋さんを探してもなかなか見つからず、泣きそうでした。やつと見つけて、そのおっちゃんにお願いをしました。「タイヤをはめる機械がないから傷がつくかもしれない」などと言われたけど、直してもらより他にありません。泣きそうでした。

職人さんはすごい……、僕はそう思います。この時のおっちゃんもやつぱりすごいと思いました。なんやかんや言いながらも直していきます。その経験とか技術とかいうものは教えてもらってできるものとは違います。体で学んだすごさです。

でもね……、時間はどんどん過ぎるんです。パンク修理をしているうちに夕方が近づき、後ろからは台風が近づいてきていました……。



埼玉県で腐海に出会いました。……といっても、埼玉県全体が悪いわけでも何でもありません。埼玉県のごく一部、僕の弟の部屋さらにその中の炊飯器……、そこに、存在してはいけない世界があつたんです。すでに「米」の域から遠く離れていました。

自炊という言葉がありますが、それがビシッと出来る場合と、そうでない場合があります。それに向いた人と向かない人がいるんです。僕の弟は間違いなく向かない人だったと考えられます。運転免許を取るときに適性検査なんてモノをやるけど、もし、自炊するときに適性検査があつたら……、彼は最低ランクでしょう。

パンクというアクシデントで大幅にタイムロスをしてしまった僕は、台風の夜空にテントを張るだけの勇氣もなく、埼玉県を目指しました。そこにはしばらく前から、僕の弟が一匹生息していたんです。なんでか分からないけど、埼玉県で就職し、一人暮らしをしている状態だったんです。いきなり電話をして、いきなり泊めてくれとお願いしました。何しろアクシデントですから……。

ありがたいモンです。普段、別にそんなに仲がいいというほどの兄弟じゃありません。でも、困って泣きついた兄を助けてくれる弟なわけです。立場が逆転しているのがちよつと気になるけど、兄弟の助け合いは美しいんです。

しかし、弟の部屋で、食事をすることは不可能でした……。



僕の愛車はすごいヤツ……、主人がどれだけ運転が下手くそで、転んで傷をつけても文句の一つも言わずにひたすら走ってくれる、そいつの名前は赤龍丸です。僕はヤツのことを大好きだし、感謝もしています。ホント僕にはもったいない相棒です。

ところが、その赤龍丸の困ったところが……、ヤツはどうやら台風が大好きらしいということです。

北海道を指すと決めました。たっぷりの時間があるわけじゃないありません。周囲の人たちに多大なる迷惑をかけ、なんとかギリの時間を絞り出して旅に出ることにしました。何が何でもその期日で決行です。雨が降ろうと槍が降ろうと……です。

幸いなことに槍は降ってきませんでした。でも、台風が迫ってきていました。弟に助けを請い、台風直下の野宿は回避したものの、次の日はまさに台風、絶好の倍苦日和です。見事に台風と一緒に北海道を目指します。僕が北上するそのスピードに合わせるかの如くです。いっそのこと僕を追い越してくれたら、台風一過で、晴れた空の下で旅ができるのに……、などと思いつつ北へと突き進むときに、ふと、思ったんです。「赤龍丸が台風を呼んでいる」と……。

ふと目にした台風情報……、やっぱり僕らは台風と共に走っていました。ものすごく実感できる情報でした。



全身がずぶぬれになっていました。そして、全財産もずぶぬれになっていました。なので、乾くまでヒラヒラしていてももらいました。爽快なモンです。

旅のお供としてはあまりうれしくないけど、それでも、一緒に過ごした台風のおかげでいろんな物がぬれてしまいました。ふと、財布を見たときにチャラリッンと思ったのがお札です。みんなそろってシナシナと身を寄せ合っていました。一枚ずつペロペロンと丁寧に剥がさなきゃいけません。

一日中、土砂降りの高速道路をぶっ飛ばし、青森県へ到達していました。そこには僕の怪しげな友人が生息していたんです。北海道を目の前にして、金のかからない屋根付きの宿があるというのはとても便利です。いや、相手にとっては迷惑なのかもしれないけど、僕にとっては便利だからそれでよし……にして下さい。

部屋に着いて、ふと顔を上げると、そこには洗濯ばさみたちが待っていました。これです！僕にとって必要なのはこれなんです。普段だったら絶対に起こらないことだと思えます。でも、発想を変えたらこんなに便利な道具はないんです。いかに頭を回転させるか、クルクルとキレのある頭を目指します。

それにしても、何も知らずに部屋に入ったら、かなり異様な光景に見えるでしょうね。



足下にナニかが転がっています。「何」と、はっきり分からないのがポイントです。得体の知れない世界なんです。

泊めてもらう立場でなんですが……、汚い部屋でした。でも、僕にとってはなじみ深い感じの部屋でした。……つまり自分の部屋も汚いということ……、まあ、同じような種類の人間なんです。北海道の手前に位置する青森県というロケーションのため、僕は何回か彼の部屋に足を踏み入れています。その度に、なぜか懐かしさを感じてしまうんです。

ひと口に汚いって表現するけど、本人にとっては大きな意味を持つ汚さなんです。あの辺りに〇〇があつて、この辺りに△△があつて……と、大体の位置は把握しています、大体は……。そして、たとえば、ただの棒に見える角材がこたつの上に転がっていても、そいつにはテレビのチャンネルを変えたりする大切な役割があるんです。

分かっています。ホントは整頓されてた方がいいに決まっています。誰でも分かります。分かっているてもできないことって、やっぱりあるんです。でもね、片付けをするよりも先に、もっともっと思いを込めてやりたいことだってあります。小さなことかもしれないけど、思い入れが深いことを優先的にやりたいんです。

うん、見事な言い訳です……。



どう見たってゴミだろ……と考える物を捨てられないタイプの人間がいます。僕も、その手の人間です。いや、最近はそのから脱出しようとして、ポイポイいろんな物を廃棄するようにしています。慣れないから、必要な物まで消えていることがよくあるんですが、仕方のないことです。

物の価値を決めるのは、人それぞれ、自分がいいと思ったらいいし、必要だと思ったら必要なんです。ライダーの僕にはヘルメットは欠かせません。でも、そこにライトがなくなったら全然問題じゃないません。頭の上が光るライダーだったら、僕はイヤです。

ヘッドライトは便利です。両手を自由に使えるから、楽なんです。それがヘルメットに固定されていたとき、やっぱり便利だと感じる人がいるんです。洞窟に潜り込む人たちです。青森県の友人の部屋には、そのライト固定型ヘルメットが転がっていました。ヤツは穴を見たら入り込みたくなってしまう、そんな穴マニアなのかもしれません。……ちょっと変態的かもしれませんが……。茂みをかき分けて入り口を見つけ、そこに突っ込んでいくんです。中でゴソゴソ動き、自分のストレスを発散させます。出てきたときにはすっきり気分爽快です。

……とにかく、他人には分かり得ないような大切な物も存在するってことです。勝手にひとの物を捨てないで下さいね……。



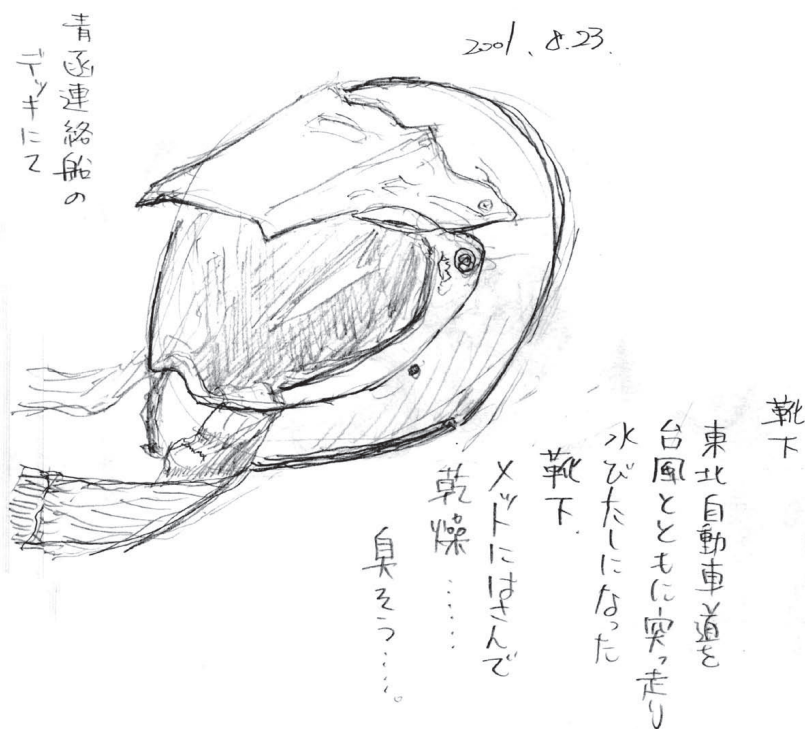
「ようこそ青森へ」と迎えてくれています。……ホントは今から青森を離れていこうとしているところです。行くか帰るか、そりゃ、どっちかに決まっています。ま、どっちにしても、ちよっとドラマチックに、感傷的な気分になることができます。それが船という乗り物の魔力です。

僕は、乗り物酔いをしやすい人間で、船なんかフワフワ揺れるから、かなり危険な乗り物だといえます。実際に船酔いをしてゲロゲロになったりもします。でも、船は大好きなんです。あのスピード感はたまりません。決して速くないけど着実に前へと進んでいるのがすごくよく分かります。波間を切り裂いている舳先なんてメチャクチャカッコいいんです。

そんな船が陸から離れる時……、だんだんに陸から遠ざかっていく時……、いよいよ出発、という感じがして、船に酔うよりも、旅人である自分に酔うような時間を味わうことができます。逆に、着岸する時、ついに到着、という心地よい緊張感が体中に湧いてきます。何かが起こる、新天地です。

看板は旅人を迎え入れるセリフを示していました。一期一会の旅人にとっては裏と表、そこを離れる者もいるんです。人との出会い、土地との出会い、そして新たな一歩、信じた道をひたすらに、前へ前へと進んでいきます。

靴下乾燥中



上から下までずぶぬれでした。だから、上から下まで乾かさなければならぬんです。ぬれた靴下をどうやって乾かしたらいいのか……、フェリーの上でそれを実行するには工夫が必要です。客席に干してしまつたら、香しいにおいがそこら辺すべてに充満することになり、僕の居場所は消滅しそうです。

てくてく……と僕は甲板へと上がっていきます。そこにはさわやかな風が吹き、広々とした空間が僕を待っていました。場所は決めます。んで、靴下はどうすればいいんでしょう。物干し竿や洗濯ばさみが完備されてたら問題ないけど、それは無理な相談です。僕はフェリーの上に住み着くわけじゃないですから……。

簡易洗濯乾し場登場！……見事に乾かすことができるスーパーアイテムです。頭は使いよう、ってことです。頭……を守るためのヘルメットも使いよう、ってことです。最初はためらいました。風よけのシールド部分は、ちょうど鼻先にくる部分です。強烈な臭いがそこに染みつきそうな予感もしました。でも、そこにしか靴下が復帰する可能性を見出せなかつたんです。まだ、フェリーを降りてから、しばらく走らなければいけません。そしたら、靴下がぬれているのか乾いているのか、その差は大きいんです。何とかして乾いてもらいたいです。

えい！……ぬれた靴下はヘルメットに装着されました。

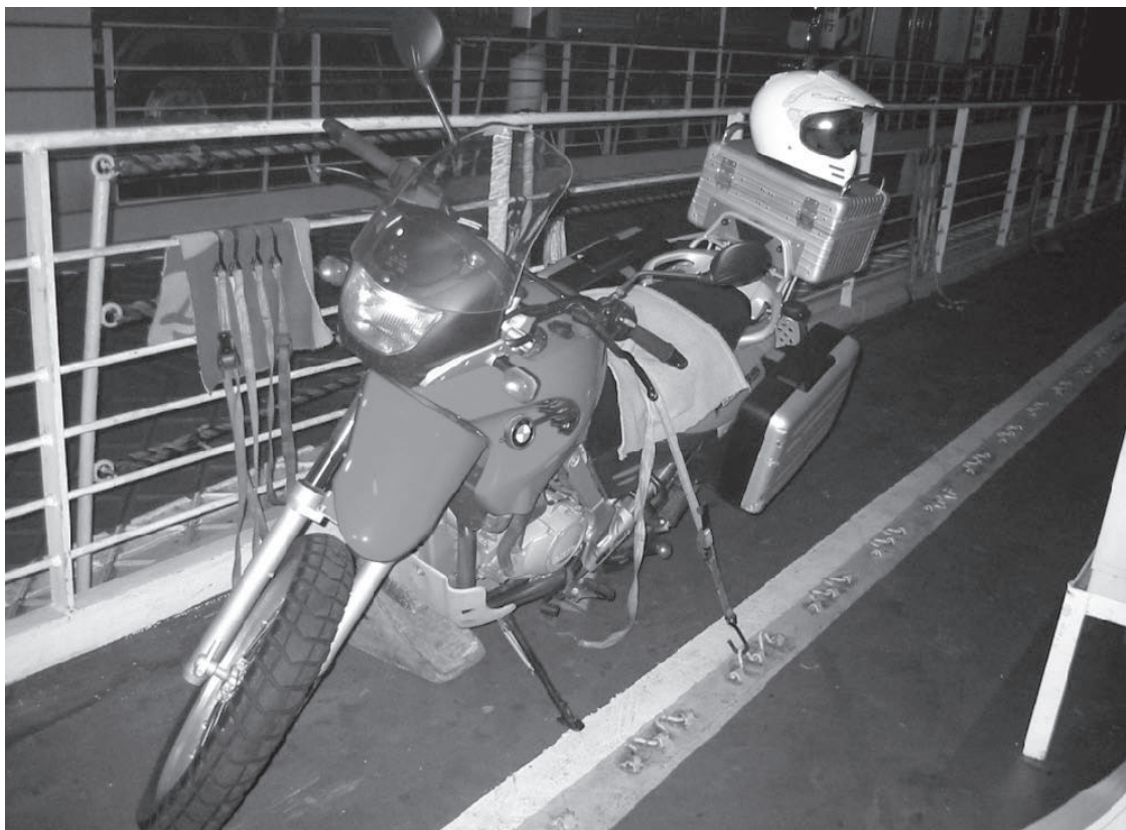


上から下までずぶぬれでした。だから、上から下まで乾かさなければならぬんです。ぬれた靴下をどうやって乾かしたらいいのか……、それは超機能的簡易洗濯乾し場によって解決しました。次の課題は……名実ともに上から下までです。

てくてく……と僕は甲板をうろつきます。そこにはポカポカと日の当たる、魅力的な空間が僕を待っていました。場所は決定です。んで、ずぶぬれ状態をどうすればいいんでしょう。着替えも完全装備で持っていたら問題ないけど、それは無理な相談です。バイクにたんすをくくりつけるわけにはいきませんから……。

ゴロン……単純な発想ですぐに実行、スーパークラクションです。体は使しよう、ってことです。体……を覆っている衣服もやり方次第、ってことです。最初からそれ以外に考えられませんでした。「着乾し」と呼ばれる大技で、要するに体温を最大限に活用した乾燥法です。ぬれたままでバイクに乗っていると、それこそ凍りつくくらいの寒さに襲われます。でも、風をしのげて日が照っていればそんなに問題じゃありません。時々、向きを変えて表から裏までこんがり太陽に当ててあげればいいだけです。ただ、フェリーの上だと、煙突から黒いススが飛んでくることであって、汚れる覚悟はしておかなければいけないんですけど……。

えい！……ぬれた体は甲板に横たわりました。



出番待ち

惚れ惚れします。我が愛車ながら、その姿は堂々として迫力があります。まとめられた荷物がケースに収められ、完全装備の勇姿です。これから北海道の地を踏むんです。

フェリーの車庫にはいろんなモノたちが息を潜めています。荷物輸送の大型トラックもいるし、観光旅行の普通乗用車もあります。チャリダーの相棒がいることだってあるし、鉄の馬が群れていることもあります。それぞれ前の世界が広がることを心待ちにしてじっと息を潜めているんです。不思議な緊張感です。

僕自身はこの時までには、北海道へは上陸したことがあります。その時はチャリダーでした。自分のエネルギーをチャリンコに伝え、共に走る旅です。ところが、今回はエンジン付きです。僕は相棒の背に乗り、スピードにのって北海道の大地を駆けめぐらせてもらいます。一番がんばるのは僕の相棒である赤龍丸なんです。「よろしくお願いします」って、あらためてあいさつする場面でした。

彼は無言でした。でも、僕には聞こえたような気がします。一緒に北の大地を楽しもうとする意気込みです。信頼できる顔に見えました。今まさに走り出そうとする相棒を見て、しみじみと、これから始まる北海道での旅への思いが深まる時でした。

さあ、世界が開きます。



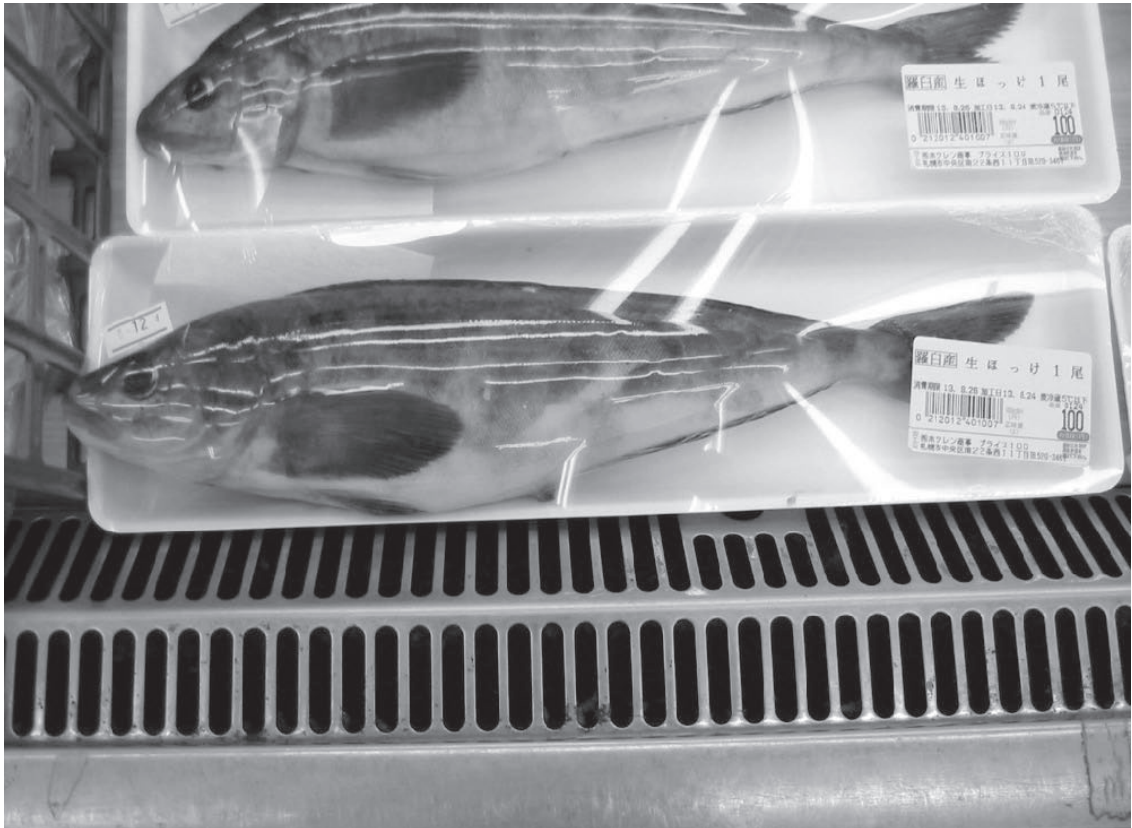
北海道はでっかいどお、なんていうセリフがあるみたいです。そうです。北海道という所は本州に生きる者にとってはスケールが違う、すごい世界なんです。だから、いろんな所に衝撃的な事実が待っているんです。

札幌市内を走っていました。ドン！と何かが転がっています。どうやら大きな木材のようです。枕木か何かだと思えます。さすが……、と恐れ入ってしまいました。僕が今まで見た落とし物の中でも、かなりデカイ物の部類に入ります。そうそうこんなモンを落とすことはありません。

世の中は、落とし物であふれてるような気がします。そりゃ、枕木みたいな大きなモノばかりじゃありません。小さなモノは結構落ちています。ハンカチやカサなんてものから、輪ゴムやペンにエロ本まで、落とし物だらけです。

それで同じ落とし物でも、落としても大丈夫なモノと絶対に落としちゃいけないモノがあるんじゃないかと考えてみました。いわゆる「物」は、たとえ落としても何とかなることが多いけど、何かわからない「モノ」の中には、絶対落としちゃいけないこともあると思うんです。僕が一番落としたくないし、なくしたくないのは「心」です。……なんかね……、落としてしまいそうで、怖いんですけどね……。

初めまして……



飲み屋にて、魚の開きが目の前に出てくると妙にうれしくなり、また、その姿がなくなるまで食べ尽くしたくなるものであります。骨の所についた、ビミョ〜な部分などのおいしさは紹介するまでもないことだと思われます。肉厚で、アツアツでなヤツを、ハフハフしながら食べるのです。……ホッケ……。

よく考えたら、小さい頃、僕はアジという魚の姿を知りませんでした。アジというのは平べったい魚で、間延びした顔をしたモンだと思っていました。何の拍子か、僕はアジという魚を折り曲げてみたくです。あれ？魚の形になるじゃありませんか。その後、食卓にアジの姿を見るたびに確認作業を続けました。やっぱり魚です。普通の魚です。

僕は北海道で百円シヨップへ入りました。いろんなモノを百円均一で売っています。そこで、初めての出会いをしてしまったんです。まさか、そんな所で出会うとは夢にも思っていませんでした。ホント、予想だにしていなかった衝撃の出会いです。白いトレイに身を横たえ、ラッピングされた姿ではあったものの、その目はキラリと僕を見つけていました。……ホッケ……。

飲み屋にて、魚の開きが目の前に出てくると、そいつが泳いでいる姿が見えてくる……、そんな眼はいらないけど、モノの本質を見極める眼に気付かせてくれました。……ホッケ……。



肉はうまい……と、僕は思います。何の肉がうまいか……、僕は豚の肉が好きです。他に牛、鶏などがメジャーになってくるんでしょうか。それぞれ、おいしくいただきます。

羊の肉は……やっぱり、うまい……、と僕は思いました。マトンだとかラムだとか、なんか種類があるようです。焼き肉屋さんのメニューはとても魅力的な光を放っていました。そもそも、マトンだのラムだの、何のこっちゃ、分かりません。いいんです。うまいんだから……。

ジンギスカン……つて、言葉も……何ですか、そりゃ……。ま、北海道へ行ったらジンギスカンを食わなきゃいけないんだそうです。どうやら羊の肉を焼いて食ったらジンギスカンと言みたいんです。焼き肉の鉄板が兜の頭みたいで……。もしかしたら、それでジンギスカンっていうの？……なんて思ってみたりして……。

北海道に移住した友達に連れて行ってもらいました。京都で出会った人たちだけど、もう、完全に北海道人になっていました。パパッと焼き肉のメニューを見て、パパッと注文していきま。郷に入りては郷に従え、とは、よく言ったものです。たぶん、冬なんか、ものすごく寒いんでしょう。そんな中でジンギスカンをバクバク食べる……。土地のものはその土地で食べる……。それがうまいんです。幸せになれる方法だと思います。



スピード違反はいけません。一旦停止も無視しちゃダメです。そこらへんのことは標識が分かりやすく教えてくれます。だから、もし、字がバッチリバリバリに読めなかったとしても、何となくは理解したふりをして交通ルールを守るようにしましょう。

だいたい黄色い標識があったら、それは何か「注意」を促すモノのようです。そのまんまだけど、びっくりマークがついているヤツもあります。じゃ、そこに熊が描いてあったら……、熊に注意するんですね、やっぱ……。

さて、熊に注意っていうけど、それは熊のためなんでしょうか。それとも、人間のためなんでしょうか。たぶん、熊は標識を読むことができないと思います。人間がよぶんな物を山の中に立てたことに腹をたてるくらいのモンじゃないでしょうか。熊にしてみりゃ、向こうから鉄の塊がものすごい勢いで走ってくるんだから、そんなに迷惑なことはないと思うんですけどね。

標識は人間のためのモノなんでしょう。熊が飛び出してくる危険があるので、神経をつかえ……、と言いたいんでしょう。熊じゃなくても鹿なんか車がぶつかって自殺をして、車のほうはフロントガラス破損……なんて話も聞いたことがあります。

山中、道を切り開いて……、もともと、その権利を主張するのは誰なのかな……、などと考えてしまいました。



どちらかというと「先端」といった方が僕の趣味に近い感じがします。〇〇岬とか呼ばれる場所に自分がいる、というだけで幸せになれてしまうような気がするんですよ。これはライダーとかチャリダーの習性みたいなモンかもしれませんが、気分がいいんです。そこに行ったら何かがあるのか……、いや、何にもないんです。それでもうれしいんです。アホです。

じゃ、真ん中とかいう場所はどんなだろう……、となるわけです。それはそれで魅力的かもしれません。今までそんなに行くチャンスがなかっただけなのかと思いました。とりあえず、海岸線を攻めていったら真ん中へたどり着くわけがありません。それに日本列島の真ん中っていったら普通に山の中です。行くのが大変ですよ。「真ん中」に縁がないわけです。

その点、北海道の真ん中だったら、まあ平べったい感じがします。行きやすいです。楽です。そこに着いたら踊っている変なヤツがいたので、一緒にポーズをとってみました。真ん中へ到着した証明写真です。

真ん中とか先端という場所にたどり着いた時、そこには征服した喜び、達成感があります。誰が認めてくれるのか、それは分からないけど、ひとまず自分が納得できる成果があげられるんです。ささやかな喜び、ささやかな自己アピールです。



北海道の夏……といえば、SAFETY SUMMER HOKKAIDO です。安全な夏の北海道です。みんなが旗をヒラヒラさせて走っていくんです。いつの頃からやっているのか、そんなことは知りません。でも、結構前からやっているような気がします。そして、いつまで続くのかも分かりません。

この旗をどこにつけようかと悩みました。向こうから来るライダーさんたちは、座席後部の荷物ネットにつけていることが多いようです。でもね、我が愛車、赤龍丸にはネットがついていないんです。おう、では如何いたしましょう。ハンドル周りが一番よさそうです。風よけシールドの隙間にはさむことにしました。なかなかグッドです。目線より前にあればヒラヒラしている様子を自分でも見ることができます。後ろだったら見られませんからね。

旅が終わる頃、この旗は先っぽがボロボロになります。風にはためく日々を過ごした後、気がつくとなっているんです。北海道だけだったらボロボロ具合はそんなにひどくありません。でも、この旗を掲げて日本列島を走り回ったら……、ホントにボロボロになるだろうと思います。そんなボロボロの旗……、カッコいいです。いつか、僕も、ボロボロの旗をヒラヒラさせながら、日本のあちこちを走り回れたらうれしいなあ、と思います。輝く光をボロボロの姿の内側に秘めて……。



かつて、僕が子どもの頃、弟とけんかをしたりします。その時、相手を困らせるためにいろんな技を使いました。そのうちの一つに超極詳細に質問をするというモノがあります。「お兄ちゃんがなぐったあ」と言われたとすれば、「何年何月何日何時何分何秒、地球が何回まわった時だあ」と切り返します。ざまあみろ、です。

何月何日というように具体的にはつきりと事例を挙げられたら、ものすごく説得させられたような気になります。あの数字というものの強さだと思います。特に僕のような数字アレルギー人間にしてみれば、簡単な数字で「これでもか!」というふうにスッパリ斬られると、もう降参です。どんな理不尽なことにもでも首を縦に振ってしまいそうです。恐るべし数字の力です。

熊は出るんです……たぶん。僕が自分の目で見たわけじゃないから、それこそ説得力はないけど、でも、看板に日付が書いてあったから間違いないんです……たぶん。周りに山が迫っているような場所でもない、こんな普通っぽい平べったい場所にも熊が出るなんて、さすがは北海道です。野宿するようなライダーには充分注意が必要になります。

さて、かつて兄弟げんかにて鋭く切り返した僕は「〇年〇月〇日〇時〇分〇秒、地球が〇回まわった時だ!」と、適当な返り討ちに会い、あえなく口づもってしまいました。



幸せですか……と聞かれたとして、堂々と「俺は幸せだぜ〜っ」と言えるのは結婚式の時……それは間違いないでしょう。今現在の僕としては、想像の域でしかありませんが……。じゃ、他の時で「俺は幸せだぜ〜っ」と言えるのはどんな時か考えてみると、そんなにメチャクチャ多くはないような気がします。

その時、「俺は幸せだぜ〜っ」と思いました。僕の表情から幸せ気分が読み取れるかどうかは別です。分からないかもしれませんが、でも、僕の内部では、幸せハッピーフレンドたちが毛細血管の先っぽまで行きわたっていました。そりゃ、駅の名前から幸せなんだから、僕が幸せじゃないなんて……、ありえないんです。ほとんど、自分を言い聞かせるように幸せを強調していますが、それはそれで良しとしましょう。

北海道の有名な駅です。その駅舎には紙切れがやたらはりつけてありました。たぶん、最初はそこまでやって来た記念に切符なんかをはっていたんじゃないかと思えます。それが、だんだんに自分の思いを込めた「何か」をはるようになったんじゃないかと思うんです。自分の思いが込められた「何か」を幸福駅に残せば、自分自身が幸福になれるような気がします。なんか、切ない人間の思いが感じられます。

そこで、僕が感じた幸せは……どうやらうつすべらみたいです。

今は、もう、動かない……



実家の近所に「汽車公園」と呼ばれる所があります。正式名称はきつと何かあるんだろうと思うんだけど、僕らはずっと「汽車公園」と呼んでいました。そこには使われなくなった蒸気機関車があります。子どもの頃の僕の目に、黒々と重みのある体は、とても魅力的な光を放って飛び込んできました。あの重厚感は何にも代え難い力強さに満ちていたように思います。

さて、北海道は幸福駅……、そこにも今では動かなくなった列車がたたずんでいました。幸福駅は今、もう鉄道の駅としての役割を終えています。だから、そこにいる列車も鉄道としての働きをすることはありません。列車の足下にあるレールはほんの少しだけの長さしかなく、自分の足で他の場所に走っていくことはできません。なんか、寂しさが湧き上がってきてしまします。

高価なお血を床の間に飾っていたりすることがあります。もちろん、それは大切なモノなんだから上座に鎮座しているんだろうけど、お血はそれでうれしいのかと疑問を感じてしまします。お血は使ってもらってこそ、その本来の力を発揮するはずです。列車も、本当だったら北海道の大地を走り続けたいんじゃないかな、と思ったりします。ただ、いろんな理由があって鉄道が止まってしまったとき、「汽車公園」だったり、幸福駅だったりして、愛してあげたら、彼らも少しはうれしいんだと僕は信じています。



熊が出没するよりは怖さが少ない感じがします。それにしても牛が横断するような怖さも少なからず僕の脳裏に冷や汗をかかせるだけの威力があります。自分が進む前に牛がドヤドヤと現れたら、熊とは違う意味での怖さが感じられると思うんです。

かつて僕がどこかの島でチャリダーに変身していた頃、前の方からモーモー言いながら牛たちが寄ってきました。狭い道の行く手をを阻まれジリジリ後退する僕に、彼らはやっぱりジリジリ寄ってきました。あの威圧感というのか圧力というのか、とにかくジリジリという言葉がぴったりでした。

じゃ、アスファルトの道を牛が横断していったら……、街中だったら、そりゃ、大問題になります。カルガモの親子が行列を作っていただけでもニュースになるくらいだから、牛なんか歩いてたら、えらいことです。それが問題にならないのはインドの野良牛と北海道の牧牛くらいのモンでしょう。北海道のおおらかな大地は牛優先道路として機能しているみたいです。「牛さん、ありがとう。君たちのおかげでおいしい牛乳が飲めます」……感謝です。牛たちと付き合う時間が長ければ長いほど、彼らに対する愛着は深まるんですね。

人間だって同じです。愛着が深まるような、やさしくて温かい、密度の濃い時間をたくさんもてる人間を目指します。



直線道路が続きます。信号機也没有。道は広いし、対向車両也没有。そりゃ、スピードだつて出してしまうことがあります。自動取り締まり機が赤くピカッと光ることもあるし、おまわりさんに呼び止められることもあります。「牛横断注意」の標識が出てくるのも当たり前のことです。「鹿横断注意」なんて標識があつたつて不思議じゃありません。

僕が気分よくライダー変身していた時、ふと見ると道ばたに屍が横たわっていました。何となく乾いたような中途半端な血液がその辺りに浸み出しています。少し心に波が立ち、それが逆に異常なほどに静かになり、僕はバイクを降りました。もしも、タイミングが違っていたら、自分がこの鹿さんと突然のように出会い、僕が鹿さんとぶつかっていたのかもしれない。

北海道の人たち曰く、鹿に車がぶつかつて車の方もクシャクシャにつぶれてしまうことも多い、とのこと。お互いにとって全然幸福な出会いじゃないから、なんかつらくなります。

お互いに幸せになるような出会いって、どこかに転がっていないでしょうか。ラブストーリーは突然にやってくるなんて、やっぱりドラマだけの出来事なんでしょうか。地球上には多くの人がいるんだから少しは可能性があるんだと信じたいです。

悲しい出会いは……、好きじゃありません。



バスガイドさんだったらこう言うはずです。

「右手に見えますのが……海です。」

「左手に見えますのが……海です。」

何だよ、と思わないでください。僕がバスガイドにならないことを祈りましょう。

このあたりにメチャクチャうまいエビがいる、という噂を聞いたことがあります。だからなのか、僕はこの海に突き出た細い細い半島のことを覚えていました。別に何ということはありません。ただただ細長く一直線に伸びている半島でした。こんな所にアスファルトで固めた道路が必要なのかどうかも分かりません。何かしらきつと必要なんだろうと思います。

よくもこれだけ細長い半島が海の中に飲み込まれずに生き残っているモンです。右を見ても左を見ても海……、しかもその真ん中には道が一本走っているだけなんです。すごい存在感のある半島だともいえます。幅にしたら何メートルとかいう単位で済んでしまいそうなのに、それでも堂々と自分を肯定しています。なかなかできないことです。

自己肯定感をどうしても失いがちです。「ああ、なんて僕はダメなんだ」と感じることもいっぱいあります。だけど、自分は自分ではないはずなんですよね。……さ、しぶとく生き抜こう……。

お品書き



熊鍋、いくら丼、トド焼定食（汁付）、海のギャングトド焼き、馬鹿刺、海馬刺、鹿刺、カニ鉄ぼう汁……。何のお店なんだろう、と怪しく思えてしまいます。といっても、ちゃんと人間相手のお店だから大丈夫、おいしい食事をする事ができます。

北海道といえど……、何回でも出てくるけど、やっぱり熊です。「熊出没注意」の熊です。そして、鮭の子ども、いくらちゃんも名物です。トド……は、あんまりポピュラーじゃないような気がするけど、いるみたいです。馬鹿……は、どこにでもいるけどこの場合は馬と鹿が盛り合わせてあるんだと思います。カニも有名ですね。カニ鉄ぼう……それが何か、僕には分かりません。カニの足が鉄の鎧に覆われて現れるんでしょうか。

これだけバリエーションが豊かだと、何を注文しようか悩んでしまいます。どれを頼んでも、「北海道で〇〇を食ったあ」と自慢できそうです。あとは、おなかと財布と相談して吟味しなければいけません。他の場所では絶対に食べられないモノを頼もうと、頭はフル回転です。

普段はどれだけ貧乏生活をしていても、旅に出たら……、少なくとも食事には金をかけようと思います。味というものは口に入れば分かれます。さあ、北海道の味……、正々堂々と勝負です。



海馬です。……こりゃ、何て読むんですか。海の馬……足が速そうです。スラッとしなやかに伸びている足を想像します。ついでに顔も長そうですね。北海道には海にも馬がいるんですね。

さて、この海の馬が定食になっていました。食べてみたいと思いますよね。いろいろなメニューが並ぶ中、考えに考え抜いた末に選んだ逸品です。ドキドキして自分の席で料理が出てくるのを待ちました。

ジャジャジャーン……と、登場です。カセットコンロに乗ったお肉が湯気を立てます。ほわわ……と、香りが鼻を刺激します。でれでれ……と、よだれが口の中からあふれ出しそうです。

さて、なかなか読みにくい漢字というものが存在するけど、そんなモンどうすれば読めるようになるんでしょうか。特に熟語になってしまったら、もとの漢字とは全然違った読み方をすることもあります。それなりに意味を踏まえて読みをつけているんだらうけど、難しいです。雨の関係にもいろんな熟語があるし、いろんな読み方があります。日本人の繊細な感性を漢字に当てはめるのは大変だったのかもしれない。

わりと獣チックな味が口の中に広がります。

トト……、海の馬……、難しすぎます。



ライダーは長袖長ズボンを身に付けるというのが鉄則です。Tシャツ短パンなんて言語道断です。……と、僕は勝手に思っています。だって、転んでしまったらズル剥けになって痛いじゃないですか……。我慢できません。はい、運転が下手なんです……。

あとは手袋も欠かせません。やっぱり転んだときに怖いし、ハンドルを持ったときに滑りにくいから多少なりとも運転が楽になります。雨の日は、ぐちゅぐちゅで気持ち悪いですが……。

それから……、忘れてはいけません。ヘルメットです。これがなかったら警察の人に声をかけられてしまうし、そのまま白黒の車へ乗せられてしまいます。そう、ヘルメットは絶対に、絶対に、肌身離さずにいなければなりません。たとえば、お風呂に入るときも……です。

そこは露天風呂でした。道端にありました。無料でした。いつの間にか僕が入っていました。海岸にちよつとした水たまりがあります。ま、水たまりというには少し大きすぎるかもしれないけど、海岸にお湯がたまっているんです。タイミングによつては海に沈むんじゃないかと思えます。そこに我が身を沈めていくんです。なんかステキですよ。

何人かのライダーがお湯に浸かっていて、写真を撮ってもらいました。湯船で、彼らはヘルメットを外していました……。



宿泊費はかけたくありません。どこだって眠れます。大丈夫、どうにかなるモンです。常にそんな気持ちで旅をしているからどれだけ気楽なことか……。なんといっても僕にはテントという強い味方がついています。大丈夫です。

僕の好みの場所は橋の下です。これは以前からずっと同じで、あんまり変わっていません。お金はかからないし、過ごしやすい、極楽です。そこにテントを張れば言うことなしです。上に屋根状態のものがあるってことが、こんなに安心できるなんて日常生活の中では意識しないで行くことだと思います。

だからというわけじゃないけど、僕はキャンプ場ってのがあんまり好きじゃありませんでした。かまどやら水道やら、いろいろ設備が整っていても、僕は使いません。だっ広い芝生のテントサイトがあつたって夜露で濡れるし、それで使用料がかかるなんて……。僕にとつてのメリットは全くありません。

ん……。このキャンプ場は無料なのね。ステキです。屋根はないから多少テントも濡れてしまふけど、ま、大目に見ましよう。宿泊地決定です。

必要なのか不必要なのか、それは個々によって全然その価値が違います。考え方だって全然違います。ついつい自分の価値観だけで突っ走ってしまうから……。少しは気をつけます。

大黒柱がほしい……



無料のキャンプ場です。そして、僕にはテントという強い味方がついているんです。怖いモノなどありません。……と、余裕の顔でいたんだけど、チャラリッソ……、テントが建てられないことに気づきました。……えっ？

自立していくことの大切さを中学生の頃に諭されたことがあります。そういえば中学三年生の時の学級目標は「自立」でした。自ら立つ……それができたとき、僕らはすぐ立派な人になっているんじゃないかと思えます。なかなか簡単にできることじゃありません。経済的自立、社会的自立……それが具体的にどんな内容なのか、人それぞれなのかもしれません。

自立すること……、テントにとっても大きな課題です。ちよつと前は三角テントに親綱を張って、一生懸命に設営をしていたようです。僕はそんなテントは持っていませんけど……。自立式テントの登場は画期的です。なまけ者の僕にはぴったりで。こんなに便利な物はないと思います。

でもね……、ポールを忘れちゃいけません。全然自立しませんでした。

何とか工夫をして居住空間を作り出します。ロープで木につるせば大丈夫でした。さすがは自立式のテントです……。すこしくらいの逆境には負けない、強い味方でした……。



溪流釣りに連れて行ってもらったことがあります。そこには大きな岩があり、お魚さんが隠れていたりします。腰まであるくらい、の長靴をはいてお魚さんとの知恵比べをしながら上流へと向かっていきます。山ん中の川ん中だから、水の冷たさが足をおそってきます。それでお魚さんとの知恵比べにも負け、心の底から寒さに打ちひしがれる結果になったりしていました。

北海道の溪流を上ります。いくら夏だからといっても、そこは北海道です。知床半島です。ものすごく冷たい水が僕を襲ってくる……のかと思いきや、ぬるいんです。温かいんです。かなり衝撃的な感覚でした。カムイフツカの滝という名前も神秘的で、ずつと行ってみたいと思っていた所です。

登り口にはレンタル藁草履屋さんがいたりして、興ざめもしてしまうけど、全体としては神が宿るんじゃないかと思うような不思議な場所でした。青々とした山の緑、揺らぐことのない山の岩肌、絶え間ない流れ……。まさに溪流です。でも、その流れが温かいという違和感……。頭では理解できるんです。そこには温泉が湧き出し、流れているという事実。それが、自分の足が感じる温かさに結びつかないんです。やっぱり僕は目から入ってくる情報に惑わされているんだと思います。その物のあるがままの姿をとらえる眼は、まだ修行中です。



肩が凝るという経験を僕はしたことはありません。何の苦勞もしていないのが、といえはそんなことはないし、悩みが無いのか、といってもそんなことはありません。僕だって人並みに苦勞もするし悩みもします。でも、肩が凝るということはないんです。もちろん、苦勞や悩みがなくても肩が凝る人もいると思うので、そんな人たちに対しては、まあ、「つらいだろうね」と声をかけるくらいのは気持ちはもっています。

温泉に入ると、湯船からボコボコ泡が出ていたり電気が流れていたり、いろんな趣向をこらした所もあります。上の方からお湯が落ちてきて、その下で体を左右にずらしながら「おお」なんてやってることもあります。肩が凝っていたら最高の喜びを味わっているんだと思います。

天然自然の滝壺です。後から後からお湯が流れてきます。こんなにぜいたくな話はありません。そこに一人、プカプカ浮いているなんて、ホント最高です。人間が作ったものじゃない、母なる大地が生み出した滝壺湯船です。何千年も何万年もかかって地球は水に温かさを与え、岩をけずり、僕らに安らぎをくれます。恩寵の豊かな大地を讃えましょう。すばらしきかな、北海道の天然温泉です。

ただ一つ、気を抜くと溺れそうなのが玉に瑕です……。



記念撮影をします。だいたいどこへ行っただとしても、その証拠写真として何かをカメラで残そうと努力をします。芸術的な写真である必要は全くありません。とにかくそこを訪れたという記録がほしいんです。そういうとき、その場に居合わせた人に「シャッターお願いします」なんて声かけをしたりします。これが何かの縁になり、すてきなお付き合いができたりしたら最高です。フクフクです。

滝壺でも、もちろん声をかけます。「シャッターお願いします」……快く引き受けてくれました。「はい、ポーズ」……どつぽん……。うまくいきません。再挑戦……。「一、二、三、」……どつぽん……。やっぱりいまいちです。再再挑戦……。「一、二、三……どつぽん……」。「これが精一杯でしょう」と、落ち着きました。僕が空中にいる瞬間を撮るようにリクエストしたんです。無理難題を吹っかけすぎでしょうか。

でも、僕のわがままに何回も付き合ってくださいました。ありがとうございます。すてきな出会いが僕に訪れたんですね。イヤな顔ひとつせず、むしろ、心配までしてくださるような温かい人でした。シャッターを頼んでよかったと思う人でした。

その人が、あと四十歳くらい若い女の人だったら、もっともつとすてきな出会いだったと豪語できたんですけどね……。



食べ物にはいろんな味があります。それは食べなければ分からないものです。

飲み物にもいろんな味があります。それも飲まなければ分からないものです。

さて「飲む森林浴」の味ってどんなモンでしょう。その味だって飲まなければ分かりません。飲んでみたら、きつと納得できる味わいがあるはずです。なんていったって森林浴です。浴びるんだから、ただ単にのどを通りすぎていくのとは違うような感覚があつてしかるべきです。すごい味を期待して購入しました。無色透明の液体が、ガラス瓶の中に入っています。なまじ色がついているよりも想像力をかき立てられるんです。

白樺樹液がどんな価値のあるモノか、当然僕が知っているわけがありません。でも、白樺といえば寒い所にいっぱい生えている木だという僕の思いこみがあります。僕は寒い所がきらいです。そんな寒い所でがんばって生きている木は、きつとすごい木です。そして、そこからしほり取られたエキスなんだから、きつとすごいヤツのはずです。「爪のあかを煎じて飲め」なんて言われたりするように、すごい存在からにじみ出てきたすごいヤツを飲んだら僕もすごいことになれそうです。

味は……、「青臭あゝい水」でした。



寒い冬にすきま風……この、すきま風ってヤツががものすごく冷たい空気を運んできます。いっそのこと外に出て、ビュービュー吹いている風の中に飛び込んだ方が気持ちよかったりもします。

新しい世界を求めて人々は大地を切り開きます。そして、ここに家を建て、生活を作り出していきます。厳しい自然の中で、家はだんだん疲れていくはずです。僕は小さい頃、自分の家の中にいて、すきまからポタポタと雨漏りをしてくる天井を見上げました。しばらくたったある日、天井を見てみたら、その部分にしみができていて「雨漏りしてしまいました……」と申し訳なさそうに告白しているようでした。

屋根の面積は八十パーセントくらいでしょうか。骨組みだらけの小屋を発見しました。きっと最初は家全体から開拓に向けてのオーラが漏れるほどだったと思います。でも、今となっては昔の話……、その存在を認めてくれる人すらいません。なんか寂しいすきま風が心に入り込みます。

木造建築だと、とにかく空気が動いていきます。それが良さなのかもしれません。高層ビルは窓を閉め、密封状態です。息が詰まります。心に安らぎを運んでくれるようなすきまをゆとりとして感じられたら……、身も心も幸せです。

親子？



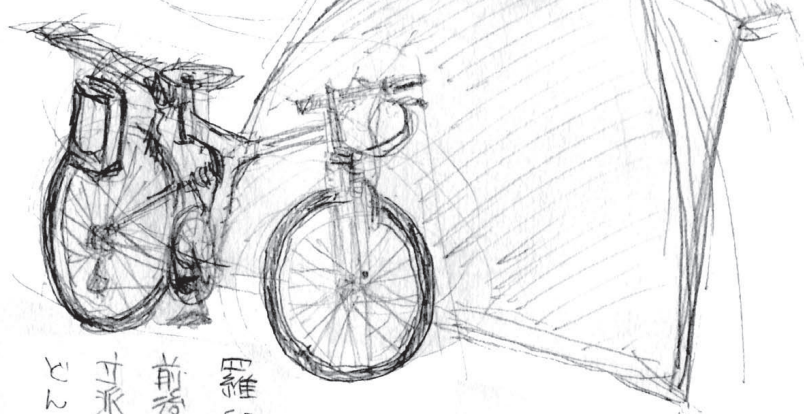
知床の峠をバイクで気分良く走っていました。グイングイン曲がる道をヒュンヒュンと……といったらかっこいいけど、所詮僕はへたくそなライダーです。曲がり道をタラタラと進んでいきます。

あれっ……、何かが動きました。鹿みたいです。写真を撮らなければいけない、と思ってバイクを止めます。しばらくすると、あれっ……、二頭になった……、写真を撮らなければいけません。じつくりとレンズを鹿の方へと向けました。

僕の家の方に鹿は住んでいません。……いや、そりゃ、もしかしたら人の目を盗んで地下生活をしている鹿がいるかもしれませんが。その確率がゼロパーセントかといえば、分かりません。超スーパージン進化を遂げた鹿たちが、地下で人間たちの様子をうかがっていることだってあるかもしれないですよねえ。でも、僕は普段、鹿さんたちと会うことなく日々の生活を送っています。だから、珍しいという思いで写真を撮りたくありません。

日頃、慣れてしまっていることに、人間は鈍感になっていると思います。僕が知床の峠に慣れていて、スピードをガンガン出して走っていたら、鹿に気づかずに通り過ぎていたかもしれません。日々、時間は流れていきます。少しずつの変化で世は移り変わります。慣れ過ぎることなく鋭い眼を鍛えたいです。

2004.8.27



羅臼温泉国設キャンプ場
前後サスツラの
す派な自転車
どんな人が乗っているのか
かっこいい
年輩の方だった
いくつになっても
乗れるんだ
俺も、かっこよく

何度も何度も思ったこと……なんで始めちゃったんだろう、ということ……それがチャリダーとしての本音でした。何といっても軟弱者ですから……。だって、ケツは痛いし、疲れるし、体全体がドロドロに汚くなるし、臭くなるし、雨にはぬれるし、向かい風では進まないし、いいことなんて何にもないような気がしてしまっんです。

で、僕はライダーに変身していたりもするんだけど、周りにチャリダーが現れると、心が揺れてしまいます。道で発見した時には「がんばれ〜」と声をかけてしまっし、お話をする機会があったら敬語でしゃべったりもします。心の底に「僕もチャリダーなんだ」という気持ちブリブリうごめいているのかもしれない。

キャンプ場にチャリンコが止められていました。かっこいいなあ、と思うわけです。そして、その主は年輩の人でした。かっこいいと思いました。外見じゃないんです。その空気がかっこよかったんです。街ではチャリンコに乗ってる人が山ほどいます。老若男女を問わず、多くの人々です。僕も、まだまだ乗れるんだ、急がなくてもいい、ゆっくりゆっくり旅ができる頃に、また、チャリダーに変身しよう……と思えました。

なんで始めちゃったんだろうと、また思うかもしれないけど。

この熊、実は……

道路工事中

平成12~13年度施工
一般国道334号 羅臼町 知床峠改良工事
区間 SP15,769.9~16,077.8
L=308m
期間 平成13年3月23日~平成13年12月7日



施工 日特・辻谷・松谷経常建設共同企業体
TEL01538-7-5510
開発局釧路開発建設部
羅臼道路建設事業所
TEL01538-7-2414

警察署
しよを
皆様へ
め御迷惑
すがよろ
います。
の点は、
出下さい。
ン税
で行ってます。
開発建設部
建設事業所
7-2414

ウソはきらいです。だって……、イヤじゃないですか。すごく気分悪いです。冗談なら大歓迎です。だって、おもしろいじゃないですか。幸せになれます。

世の中には言っていることと、悪いことがあるわけです。多少、事実と違って、アハハで済むことなら冗談と呼ばれ、ムカムカつとくることだとウソと呼ばれます。どうしてもウソをつかなければいけない場面も、もしかしたらあるかもしれません。でも、できるだけウソはつきたくないモンです。

道路工事中の看板が立てかけられていました。何気なくフーンと見ていたんだけど、ふとそこに描かれていた熊の絵が僕に向かって声をかけてきました。「道路工事中……だぜ……フッフ」、何とも不敵な印象でした。表情も明るく、楽しく鮭を手にした熊さんでしたが、その柔らかな笑顔の裏に何かを感じたんです。それは……、二枚舌だったんです……。舌が真ん中で分かれていたんです……。きつと別の所では「工事は終わったぜ……」と誰かに声をかけているはずですよ。恐るべし熊……。笑顔に騙されてはいけません。

こんなウソ話を頭の中で考えてる方が、よっぽどおかしい感じもします。いやいや、僕の話は二分の三くらいウソですから……。もはや、支離滅裂、何が何だか分かりません。



山登りは好きじゃありません。だって……、疲れるから……。山のとっぺんにたどり着いて「征服感」を味わうのが山登りの醍醐味でもあるらしいです。ま、とにかく「そこに山がある」から山に登るんですね。ところが、その感覚、僕には全く分からないんです。

霧の合間から山のとっぺんが見えました。ちょっと幻想的です。あそこに登ったらどんな景色なのかと思いますが、結局、霧でいっぱいの世界なんだろうと思っています。この霧の世界がむやみやたらに美しく感じることもあります。山の下からだともりが全部霧だらけになって、全然面白くありません。それが、とっぺんまで登り詰めたとき、霧の海を見渡す孤島にいるような感じがして、妙にうれしいと思うことがあるんです。

苦勞して山に登っているとき、つらいばかりです。周りのことなんてさっぱり分かりません。霧の中だったら余計に周りが見えません。苦勞している時間つてのは、そんなモンかもしれない。どれだけでも先が見えないんです。もがけばもがくほど、さらに苦しくなることだってあります。山のとっぺんに着いたとしても霧が晴れないかもしれないし、そのまま霧の中を下山しなけりゃいけないことだってあります……。

下界からとっぺんが見えたら……、それはそれで幸せです。



他のキャンプ場には泊まったことがないから、単純に分からな
いだけなのかもしれません。無料というのがいいんでしょうか。
とにかくバイクがいっぱい並んでいました。オフロードタイプも
あり、レーザーレプリカもあり、原付もあり……、もう何でもあ
ります。

僕は北海道を走り回ります。その走り方もいろいろです。道
なき道をどこまでも突き進むモノもあり、ひたすらスピードを出
してぶっ飛ばすモノもあり、トコトコと地を這うように動くモノ
もあります。……これもまた何でもありです。

同じバイクというモノにまたがっていながら、全然違うタイプ
の旅をしているんだからおもしろいモンです。

バイクには人が乗ります。大体は一台につき一人の人間が乗り
ます。バイク一台一台にそれぞれの旅が広がっていくんです。観
光バスに乗ってそろそろ動き回るような、団体行動の苦手な人々
のための乗り物かもしれません。自分勝手に自分の興味を追い求
めて走り続けます。

それが、キャンプ場に着いたとき、不思議な一体感を醸し出す
んです。全然違う旅人たちだけど、みんな同じバイク乗りだとい
う連帯感だと思います。同じだけど違う……、違うけど同じ……、
生き物の全てがそんな感じに見えてきました。



画用紙にトラックを描き、その荷台に家具を加え、人の生活を絵にしたことがあります。たぶん、小学生の頃だったと思います。何やら真剣に描いていました。

荷台には扉があり、窓があり、内側にはカーテンがかかっています。外側は銀色に輝き、そのかっこよさを際立たせています。実際にこんなにステキなトラックをこの目で見られて、僕はものすごく幸せでした。これだけの装備が整っていれば、どんな天候でも全く問題なく旅を続けることができそうです。住居がそのまま移動していくのと同じなんだから、こんなに快適な形態はないように思えます。大きなでんでん虫です。

僕のバイクにもちゃんとテントは積まれています。だから、どこにでも住み着くことができます。これもまたでんでん虫です。ただ、風に飛ばされそうになることもあるし、水没することもあります。揺れ動くでんでん虫です。

トラックみたいにすごいヤツを操るとなれば、かなりの覚悟が必要になります。テントの何百倍もお金がかかるはずですからね……。旅に限らず、どんな時だって「えいや！」と覚悟を決めなければいけない時つてのがあはずです。それはいつ、どんな風に現れるのか、はつきり分かりません。でも、それを見逃さないように眼をしつかり見開いていたいと思います。



びっくりするというのはその人が何も知らないときには、ホント、胃袋が口から出てくるほどにびっくりするし、心臓だつて止まってしまうようになります。予期せぬ出来事が目の前に現れたら、誰だつて同じ、僕だけじゃないと思います。

だんだんにびっくりしない人間になつていたような気がします。キャンプ場に鹿……ああ、いてもいいよね……、ぐらいに余裕をかましていました。そんなに驚くことじゃありません。……、さて……、よく考えたら、鹿なんてその辺をウロウロしているモンと違つのかも知れません。うん、家の周りに鹿なんていません。もつとびっくりしなきゃいけません！ああ、びっくりしたあ！

北海道の生き物たちは、とても優雅に時の流れを感じているようです。鹿であり、牛であり、木であり、花であり……、小さなことを気にせず、悠々とそして堂々と生きていました。小さな人間である僕は、北海道の生き物たちの中に入って、そのすごさを当たり前のように感じるようになっていました。これはいいことでもあり、悪いことでもあり、変なモンです。自然の一部になつて、抱かれたような当たり前さ、いつでも助けてくれそうなやさしさの部分です。

鹿さん、当たり前のようにキャンプ場に来るのはいいけど、食料は荒らさないでくださいね。



世のキャンプ場にはいろんな人が住み着いています。そう、住み着いている人たちがいます。何ヶ月とかいう単位で生活をつくり出しているんです。だから、このキャンプ場でもそんな人たちがいたかもしれません。そして、僕はてっきり洗濯物を干しているんだと思ってしまいました。

男の人たちが黒いストッキングを次から次へとロープへ引っかけていきます。何、危ない趣味をもった人たちかと、少しビクビクしてしまいました。でもなんか、様子が違います。じいっと見てみたら、どうやら黒いストッキングじゃなくて昆布のようです。どこから持ってきたのか知らないけど、何人かで昆布を運んできて、干しているようでした。

同じ場所で同じ時間を過ごしていると、だいたい同じような種類の人間が寄り集まるのがよくあります。キャンプ場でも当然、同じような人たちが引き寄せられていきます。最初は全然知らない人たちだったとしても、隣のテントの人とあいさつをし、一言二言と会話をするうちに仲良くなっていくなです。大体きつかけは、あいさつです。んで、どこから来たとか、どこへ行くとか、旅の共通会話をして、少しずつ仲間意識を高めていくんです。

残念ながら、僕は少し離れた所にいたので、あいさつをするチャンスもなく、昆布を干す機会にも恵まれませんでした。



一家団らんなんて言葉、いいですよ。一人暮らしなんかして
いて、夕食時に一人でモソモソ動き出し、まるでエサでも食べる
かのように黙って箸を運ぶなんて、悲しいことこの上ないです。
メシを食い終わったら、ちよつといやらしいことなんか考えたり
して……、男の一人暮らしなんて、ろくなモンじゃありません。

テント生活は、一人暮らしです。朝は太陽と同じくらいに起きて、
夜は暗いから寝てしまふ、そんなリズムがくり返されていきます。
それでも周りのテントが気になったりして……、何かの拍子に隣
のテントのライダーさんと話をしました。そしたら、そのまた隣
のライダーさんが話を始め、さらにその向こうのライダーさんと
も仲良くなることができました。

んで、「メシどうする?」となり、ライダーさんたちは五百円で
冷凍の鱒を手に入れました。わああ、素敵な夕食になりそう
です。切れ目に野菜を入れてちゃんちゃん焼きにして食べること
になりました。

はつきりいって、味は全然覚えていません。その人たちと仲良
くなれたことぐらいしか記憶にないんです。一人では絶対に食べ
ていなかったらう鱒を囲んで、下戸の僕は酒がないことにも寂
しさを感じることなく、仲間との団らんを楽しみました。

あ、僕が白玉団子を作って振る舞ったことを補足しておきます。



メチャクチャ熱いという噂を聞いていました。又シミたいな人がいるという噂も聞きました。どんな所なのか想像力をかき立てられる、そんな温泉です。

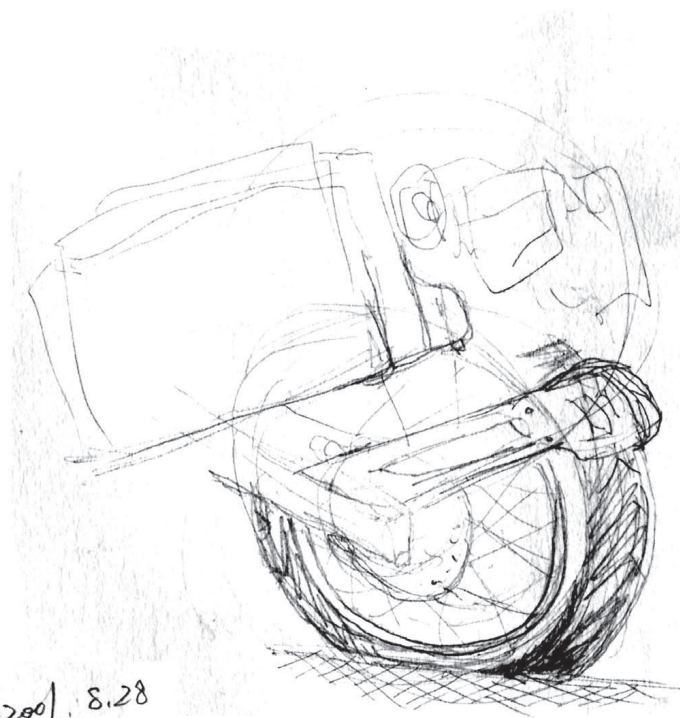
キャンプ場から道をはさんで向かい側にその温泉はありました。入浴料はゼロ円、ただです。無料のキャンプ場に暮らし、無料の温泉に入れるんだったら、そこに住み着いてもいいような感覚に陥ります。冬になったら完全に雪の下に埋もれてしまいそうですけど……。とにかくにも温泉へと向かいます。

同じ釜のメシを食うとか、裸の付き合いとか何とか言いながら、キャンプ場で知り合った人と一緒に温泉に浸かりました。夜の闇の中、裸の男同士が一緒にの湯船に向かう……。いや……。決して間違いは起こらないから大丈夫です。僕にはそんな趣味はありません。普通に世間話や旅での世界話をするぐらいのモンです。

和やかに話ができたのは温泉のおかげでしょうか。メチャクチャにお湯が熱いという苦痛も感じることなく、又シミたいな人に説教されることもなく、のんびりと温泉を楽しみました。身も心も温かくなる時間です。僕は体を酷使していても、まあ何とか動くけど、心をすり減らすと動けなくなります。繊細な心の持ち主なんです。いつでもどこでも温泉がほしい、いつでもどこでも心のゆとりがほしい……と思う繊細な僕なのであります。

バイク

悲しい現実だ。



2001.8.28

なぜ？

足取りが重くなることがあります。学校だったらイヤな授業があつたり、テストがあつたりしたら格段に足は重くなります。

バイクでも足取りが重く感じました。ボコベコバコ……聞き覚えのある音がどこからともなく聞こえてきました。前回その音を聞いたのは東京、何なのか分からないまましばらく走っていた時です。特にカーブにさしかかると車体そのもののバランスさえ崩れていきました。パンクです。

その夏まで、バイクでパンクした経験は全然ありませんでした。ところが、あつという間に二回ものパンクが降りかかってきました。僕は何か悪いことしたのかもしれませんが。大きな悪事ではでないせこい人間だけど、小さな悪さは度々しています……。あれが悪かったのか、それとも、あの時のことか……はあ……。

足取りが重いのはパンクのせいかな、いや、それだけじゃないですよ。いよいよ知床半島をあとにして、帰路につくライディングだったからです。僕にとって北海道は憧れの地、遠い遠い北の大地です。そんな簡単に訪ねられるような所じゃありません。それも神秘的知床半島からの折り返しです。キャンプ場には仲良くなったライダーもいます。できることなら帰りたくない……。愛車に僕の気持ちがり移ったのかもしれない。

ちよつとだけ、北海道にいる時間が長くなりました。



見つめる目があります。じっと見ています。その先には動かない赤龍丸がいます。我が愛車は二度目のパンクにつき、足を外して立ちすくんでいました。

目は「お前も大変だなあ」とでも言うような空気を投げかけていました。

動けることが当たり前に思える毎日を過ごしています。動ける間は余裕なんです。ところが、ひとたび動けなくなったとたんに排気量六五〇ccのエンジンのすごさを感じるんです。二百キロ弱の重さを時速百キロなどというスピードまでにぶっ飛ばせるエンジンのすごさです。

所詮、エンジンが動かなかったら鉄の塊です。自分で動くこともできなければ、動かしてもらうことさえ大変になってしまいます。その目は動けない赤龍丸を見つめて、それでも自分は優雅に動かないという選択をしていました。

動かないのと動けないのでは、えらい違いです。鈍くさい僕はいつも動くべき場面で動きを見せられず、より一層の鈍くさを露呈してしまいます。ここは動く時だ、と瞬時に見抜く眼が必要なんだと……頭では分かっているんです。でも、僕には難しいことなんです。

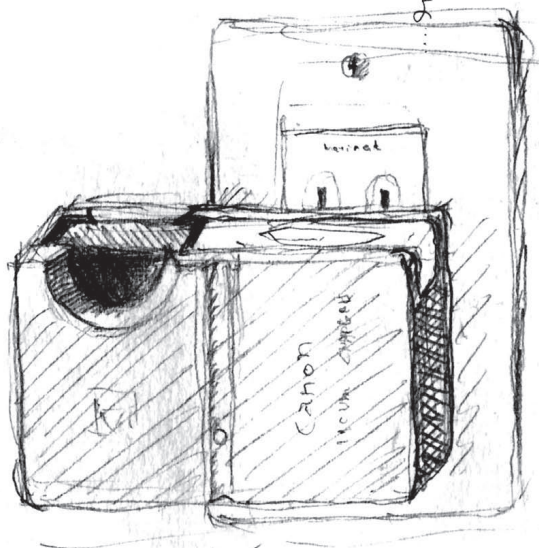
見つめる目の中に見抜く眼光の鋭さを見た思いです。

充電

ブリタニーにて。
夕べに会った
コンサント君
も、場所
見なしたもんなあ

君がいなくて
デジカメが
死んでしまったよ

2001. 8. 28



貴重なエネルギー

橋の下がベストポイントだと思っています。夜、テントを張る場所です。何度となく橋の下で寝てきました。川の水で体を洗い、汗を流す生活もあります。すばらしい場所です。

橋の下に足りないもの……もちろん、そういうものもあります。電源はありません。この頃、僕はデジカメというモノを手に入れており、それを武器に旅をしていました。パッパッパッやたらにたくさん写真を撮っても余裕です。しかも小さくて使い勝手が良い……いいモノを手に入れました。そんな便利なデジカメも、バッテリーを使い切ってしまったらおしまいです。電気製品の弱さです。電源がなかったら生き返りません。

そんなデジカメのバッテリーに「ほれ、たらふく食べ」と電気のごちそうをあげられる機会に恵まれました。コンセントを見つけた時のうれしかったこと……。別に僕の体が電気で動いている訳でもないから、デジカメの本音を知ることとはできません。でも、すぐくうれしかったし、安心しました。不安を抱えて旅をするのはつらいモンです。

いつか、帰る期限もないような、本当にあてのない旅もしてみたいです。でも、何か自分の中でウリヤ〜と闘っているような、不安要素があるからこそ旅は楽しいのかもしれない。楽しさと不安をじっくり感じられる旅人になりたいと思います。



ライダーがバイクから降りた時、ライダーはライダーじゃなくなります。

ライダーがライダーじゃなくなった時、それはどんな「時」になるんでしょう。

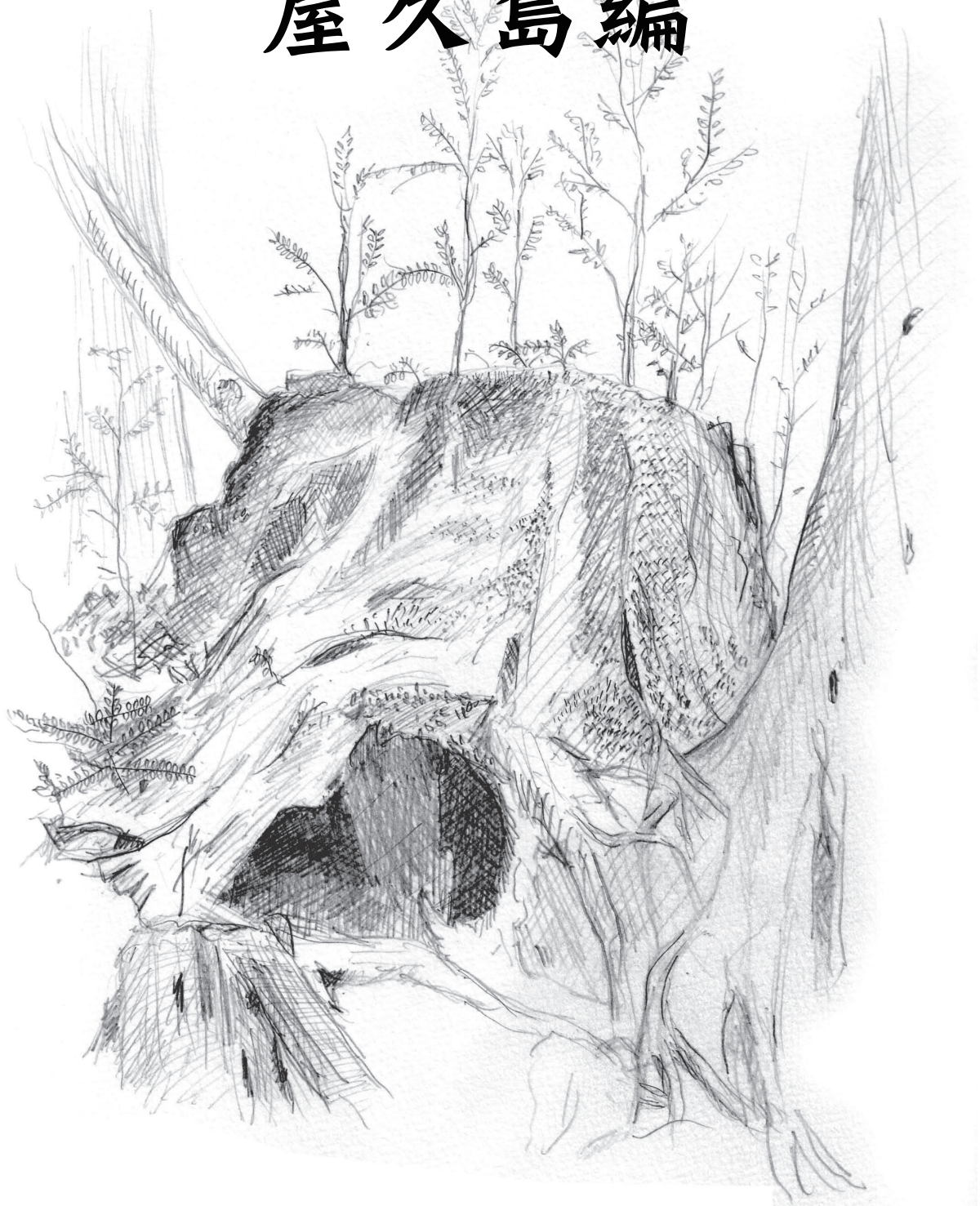
いや、ホントだったら、ずっとずっとバイクに乗っていたいとも思いません。バイクじゃなくてもいいです。チャリダー変身もステキです。歩きの旅をするトホダーもおしゃれです。旅人という種類の人間になっていたら最高です。自分の関心が高いところへ古今東西縦横無尽世界各地を巡ります。行ったことのないところへは、どこへだって行つてみたいと思います。

と、凡人の僕は考えます。……けど、僕は旅人という種類の人間ではありません。日常という世界へと戻っていかねければならない者です。僕にとって、旅とは非日常の世界なんです。

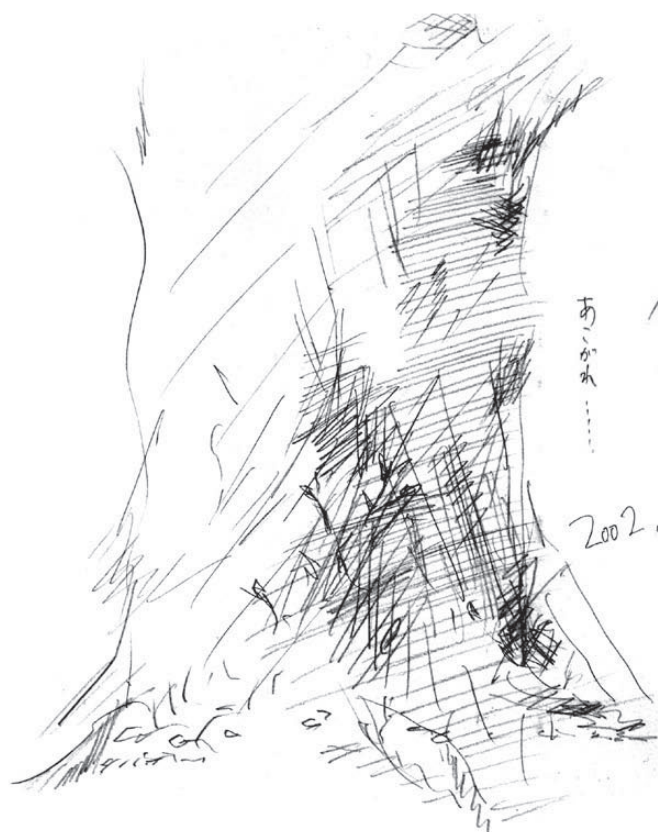
そんな非日常の世界がフェリーターミナルのガラスの中に少しずつ少しずつ、かすんでいきます。ガラスの中にはヨレヨレの姿の旅人がいました。違う……僕が描いている旅人の姿とは違う姿です。もっと生き生きとした眼をもつ、楽しい旅人に憧れているんです。

ちょっと旅をお休みして、また歩き出します。しばしの別れ、非日常の世界よ……、また行きます。

屋久島編



頭に広がるイメージの縄文杉



ドカンと天までのびる大きな幹……、そんなものが僕の頭にグングン育っていました。手で抱えることなんか絶対にできない、僕らを威圧するかのような大きな幹です。

縄文杉……。

学生の頃、大きな木をバックにした友達の写真を見ました。人間の姿が本当にちっぽけに見える、そんな写真でした。何人かの友達がそこに写り、何枚かの写真が重ねられていました。年を経ると、そこにまた、写真が重なっていきます。山の好きな友達でした。

縄文杉……。

僕の中で、遠い南の島が、だんだん近いものへと変わっていくのを感じます。まだ見たこともない心の風景がぐんぐん広がっていきます。鬱蒼とした森……そこにたたずむ巨大な木……それを仰ぐ自分の姿……と、スクリーンは映り変わりました。

縄文杉……。

七千年の時を見ているともいわれる杉の木です。その杉の前にして、僕はどんなことを思うのでしょうか。最初にあの写真を見てから時は流れ……今、やっとそこを訪れる日が巡ってきました。僕の思いはつのります。

縄文杉……。



屋久島への旅は夜中、三時五十七分発、「ムーンライトながら」号とともに始まっていました。青春十八切符を片手に、分解した愛車・山風号と一緒に乗り込んだのです。名古屋で新幹線に乗り換えて博多まで行き、そこから鹿児島まで鈍行列車を使い続けました。

「えっ?」……途中の駅で、僕は自分の目を疑いました。そこには引退してしまったはずのゼロ系新幹線が止まっていたのです。思わずシャッターをきっていました。

新幹線も、最近ではシャープな外観が目を引きようになってきました。そう思うとゼロ系は丸みを帯びているので、切れ味のあつ鋭さには欠けます。でも、やっぱり僕にとって新幹線といえば、卵のように鼻先の丸いその列車なんです。小さい頃、高架をじつと飽きずに眺めた、思い出に残る新幹線の姿です。得も言われぬ安心感やぬくもりを感じるんです。

これは人間でも自然な笑顔があふれる人に、安心感やぬくもりを感じるのと同じじゃないかと思います。外側だけではないモノ、ゼロ系新幹線に「思い出」があったように、人間に内側からにじみ出る「心のやさしさ」を感じるわけです。

一日乗り継いで、西鹿児島駅に着いたのが午後六時三十分……。遠くまで来たことを感じる一日でした。

No. 054599

清水 様

平成4年2月26日

金額

收入
印紙

但し、ジェットfoil旅客運賃として

☐ 乗 船 券 ☐ 回数券(枚綴) ☐ キャンセル手数料

予約番号

貨物代 17

上記の金額領収致しました。



いわさきコーポレーション株式会社

鹿児島商船

鹿児島市鴨池新町12番12号 ☎ 099-256-7771

☒ 鹿児島営業所 099-223-4251 ☐ 西之表営業所 09972-2-1224
☐ 宮之浦営業所 09974-2-0034 ☐ 安房営業所 09974-6-3399
☐ 指宿営業所 0993-22-4880 ☐ 天文館窓口 099-239-1377
☐ 予約センター 099-255-7888

取扱者印



自転車は貨物か？

鹿児島に着いた翌朝、いよいよ屋久島へと向かいます。「フェリー屋久島2」という船もあったんだけど、それは約四時間もかかってしまうので、僕は「トッピー」という高速船での移動を選択しました。とにかく早く屋久島に着きたかったです。

乗船手続きをしてから一休み……、そして「さあ乗り込もう」というときに、乗務員の「あつ、自転車はダメですよ!」の一言が耳に突き刺さりました。「えっ?」……頭が真つ白になりました。ウソでしょ……、すでにチャリンコは分解して袋に入れてあります。「貨物あつかいということにして、二千元払ったら乗せてあげることはいけます」とのこと。背に腹は代えられぬ……、渋々二千元を支払いました。

港を出て約二時間半がたった頃、目の前に憧れの屋久島の姿が現れました。……となれば、いい展開なんです、その時、僕は爆睡中でいつ着いたのかもよく分からず、寝ぼけまなこのまま船を後にしました。肝心なところでポイントを外すというのは僕の得意技で、何をやっていてもいつの間にかそういう状態に陥ってしまうんです。人生を物語っているようで、実はちょっと悲しいんですけどね……。

ま、何にしても屋久島にはたどり着くことができ、本格的な僕
のチャリダー生活が始まるわけです。



屋久島の玄関口、宮之浦港へ到着しました。ようやく……ようやく……ようやく……ようやくあこがれの島、屋久島へとたどり着いたのです。そこから見える山々は雲に覆われて、僕を拒んでいるかのように見えました。気分はちよつと暗くなります。

雨……、屋久島といえば雨なんです。一ヶ月に三十五日雨が降るとさえ言われます。えっ……そんなアホな……とか思いますが、それが実感なんです。僕自身、屋久島では九日間フラフラしていませんが、そのうちの八日は雨に降られました。チャリダーとしてみればかなりつらい現実です。行動しようと思った時には必ずカッパを着なきゃいけないなんて、「ふざけるなっ!」ってなモンです。

国内チャリダー生活の中では宿泊費ゼロ記録を更新していた僕は、この日、屋久島唯一の無料宿泊施設である矢筈キャンプ場へ向かう予定でした。何ととっても、世界自然文化遺産に登録されている島だから、そこら辺で勝手に野宿するわけにはいかないんです。世界に誇る屋久島を汚してしまう手伝いなんて絶対にイヤです。

いよいよチャリダー变身です。久しぶりに乗る自転車はしんどい乗り物でした。これから、雨にも負け……て、風にも負け……てしまつような日々が始まります。ああ、軟弱者……。

ただの空き地にしか見えない……



屋久島唯一の無料宿泊施設……とにかくそこを目指さなければいけません。寝る場所がなかったら僕は一晩中チャリンコの上になければならなくなってしまいます。それだけは避けたいところです。

矢筈キャンプ場はどこだ……チャリンコで走ること約三十分、なかなかそれらしきモノが現れません。地図を見ても、やっぱりおかしい気がします。海水浴場があつて、その近くのはずなんだけど……、勇気を持って少し引き返してみました。発見しました。ほんの小さな看板でその道が示されていたんです。その道をヒィヒィ言いながら登っていくと、いきなりの雨が襲ってきます。ヒィ……悲鳴の連続です。きつとすぐにやむだろうと木の陰で雨宿りをしました。やはり……やんでくれました。ラッキー、と思いながら道を進んでいきます。

トイレ発見、炊事場発見……、こりゃ出てくるぞーっと思ったら出てきました。テントサイトです。でも、これってただの空き地にしか見えないんですけど……。

ちよっと悩みました。でも、とりあえず他の場所も見えておこうと思いました。実はこれまでの宿泊費ゼロ記録も、屋久島であつたらつぶれてもいいという思いだったんです。それほど、「屋久島」とは僕の思いが強い場所だったんです。

大根、干しています



「国内チャリダー生活宿泊費ゼロ記録破れる」……この、きわめてどうでもいい自分勝手な思いこみニュースをいつ発生させるか、頭は動いていました。何といっても本格チャリダーデビューから約十年という歳月が流れていますので、そのタイミングについては慎重の上に慎重な判断が求められるのです。

そんなことを考えながら無料キャンプ場をあとにします。とりあえず、年賀状などを出さなければいけないので郵便局に立ち寄りました。……と、目に留まったのが、軒先からぶら下がる白い物体でした。「何じゃこりゃ……」と目を凝らします。「ダイコン」でした。短冊状に切って干してあったのです。我が家ではそういう習慣がなかったので、ちよつとびっくりしました。まあ、切り干し大根なんです、幅が広いんですね。やっぱり煮物にするんでしょうか。食べてみたかったけど、それはかなわぬ夢……あきらめてチャリコンに乗りました。

無銭宿泊記録ストップ候補の場所については、すでに旅立つ前から決めていました。ライダーハウス「とまり木」という所です。その名の通り、ライダーが集う宿であり、きっと変な人、……いやいや、おもしろい人がたくさんいるはずですよ。キャンプ場から約一時間、空港の近くの「とまり木」を目指しました。

……目的地は決まっていたんです。



……目的地は決まっていたんです。ライダーハウス「とまり木」です。

なのに、なかなかたどり着きません。だって、途中で僕の目に留まるモノがいっぱいあって、行く手を阻むんです。そりゃ、捨てるわけにはいきません。こちらはチャリダー、旅人ですから、一度その場をあとにしてしまったら最後、二度と見られないかもしれないんです。その一瞬一瞬を大切にしなければいけないんです。

「学有林」……この時、僕の目に飛び込んできたのはこの言葉でした。一般人は「どあ〜でもいいや……」と通り過ぎていくかもしれない程度のモノかもしれません。けど、一瞬を大切にするチャリダーの目は光るのです。ただ疲れていなくて余裕があったただけだ、というツツコミを入れてはいけません。

「国有林」などという言葉は耳にすることもあります。国が所有する林ですよ。それが「学有林」ということは、学校が所有する林ということです。学校が林を持っている！しかも、小学校が林を持っている……すごいことです。世界遺産の島の「学有林」とは、ものすごい価値のような気がします。他の物に代え難い財産です。

……なかなか「とまり木」へはたどり着きません……。

「じょうもん」って、どんな宿だろう……



……目的地は決まっていたんです。ライダーハウス「とまり木」です。

やっぱり、なかなかたどり着きません。今度、僕を動揺させたのはこの看板「じょうもん」です。まさか、竪穴式住居じゃないですよ……。まさか、料理はドンブリ団子と肉だけじゃないですよ……。まさか、打製石器を提供しているわけじゃないですよ……。まさか、コスチュームも……。

大変失礼な発想が頭の中を駆け巡りました。僕の縄文時代についての知識が貧弱であることを示しているのかもしれませんが。情けない限りです。勉強するということは大切なことです、あんまり説得力ないですけど……。

辞書で調べてみました。縄文時代は紀元前一万年前後から紀元前四〇五世紀まで続いていたようです。そんな昔から生きている杉があるんだからびっくりします。「じょうもん」という名前をつけなくなるのも無理はないことかもしれません。

思えば、僕が屋久島を訪ねた一番の目的は縄文杉に会うことでした。屋久島の人々にとっても縄文杉が持つ意味は大きいはずです。自分の心の中に絶対の自信を持つことができる存在があることは非常にうれしいことです。

……なかなか「とまり木」へはたどり着きません……。

どんな事故が待ち受けているんでしょう……



……目的地は決まっていたんです。ライダーハウス「とまり木」です。

まだまだそこへはたどり着きません。だって道にはいろいろな看板があるんです。この「一発」って、どんな「一発」なんだろう……と思ったら、頭はパニックです。ファイトオー一発！なんていうのも違いますよねえ。

鹿児島県銃砲保安協会連合会という文字を見て、やっと分かりました。鉄砲の事故です。山中で、獣を撃っているときに、人間撃っちゃったら大変なことですからね。そりゃ、あわててもらいたくはありません。

山で鹿を撃つんでしょうか。詳しくは知りません。でも、屋久島固有の「屋久鹿」というヤツらがいることは間違いありません。僕も、何回か目撃しました。あんまり人を怖がる雰囲気はありませんでした。だからかな……ヤツらは時々、交通事故に遭ってしまっているようです。気の毒なことです。

せわしくなくエンジン付きの乗り物に乗る人間として、「あわてるな」という言葉をじっくりかみしめます。ゆとりをもって、じっくり周りを見ながら生きていきたいものです。こんな時、チャリダーって幸せなのかな、と思います。

……でも、なかなか「とまり木」へはたどり着きません……。

あなたはドラえもんですか



……目的地は決まっていたんです。ライダーハウス「とまり木」です。

けれどもまだたどり着きません……。今度はドラえもんが立ちはかりました。……と思っただんですが、本当にドラえもんなんでしょうか。妙に足が長いし、背も高いような気がします。ずんぐりむっくりした姿でこそ堂々と「ここにドラえもんあり！」と言えると思うんです。

実は僕、ドラえもんが大好きなんです。「一家に一台(?)ドラえもん！」なんてよく言いますが、名言だと思います。ドラえもんが僕らにしてくれること……。それはいろいろな道具を出してくれるというだけではありません。もちろん道具は出してくれますが、その道具は夢という大きな力を持っています。いいかえれば、ドラえもんこそが大きな夢だと思えるわけです。

僕の家にはドラえもんはいません。道具もありません。だから僕に夢がないのかというと、もちろんそれは違います。夢は僕らの心の中にあります。心の中は夢であふれています。ということは、きっと僕らはドラえもんの夢の道具を心の中からつくりだすことができるはずです。目の前に現れた不思議なドラえもんに、目を、そして心を奪われました。

……なかなか「とまり木」へはたどり着きません……。



……目的地は決まっていたんです。ライダーハウス「とまり木」です。

やっと看板が見えました。ライダーの宿です。この看板は、木彫りによる手作りである可能性があります。木彫りとは、この宿に出没する木彫り職人のことで、宿には仏像などの作品も置かれています。手作りの匂いいっぱい宿なんです。

この手作りの宿「とまり木」を生み出した人とは、一九九五年一月一七日（火）午前五時四六分に財産を一瞬にして失ってしまった商売人でした。阪神・淡路大震災がその人の人生を大きく変えることになったのです。

震災の後、屋久島を訪れた元商売人は、釣りをしながら地元の人に屋久島へ移り住むようにと声をかけられます。「屋久島には地震がない」という言葉を受けて、思わず移住を決めてしまったそうです。こうして、後に「とまり木」のオーナーになる、にいさんとねえさんが屋久島へ根を張ることになりました。

ものすごく深い話ですが、「とまり木」に着いたときの僕はそんなこと、全く知りませんでした。おもしろそうな宿だと思ってそこを目指しただけですから……。ただ、着いた瞬間から不思議な宿であることを肌で感じたのは事実です。

……何にしても、やっと「とまり木」にたどり着きました。



「お帰りなさい！」という声が僕を出迎えました。びっくりしました。そりゃそうですね、初めて訪れたんですから……。実は僕が着くちょっと前に、他のチャリダーが「とまり木」を出発していったようで、勘違いをしたみたいです。でも、何かうれしい気持ちでした。

僕を出迎えた面々は数人……。庭先で竹を削っていました。みんな泊まり客でしたが、□ウソク立てを作るんだと、張り切っていました。物を作るというのは楽しいことです。

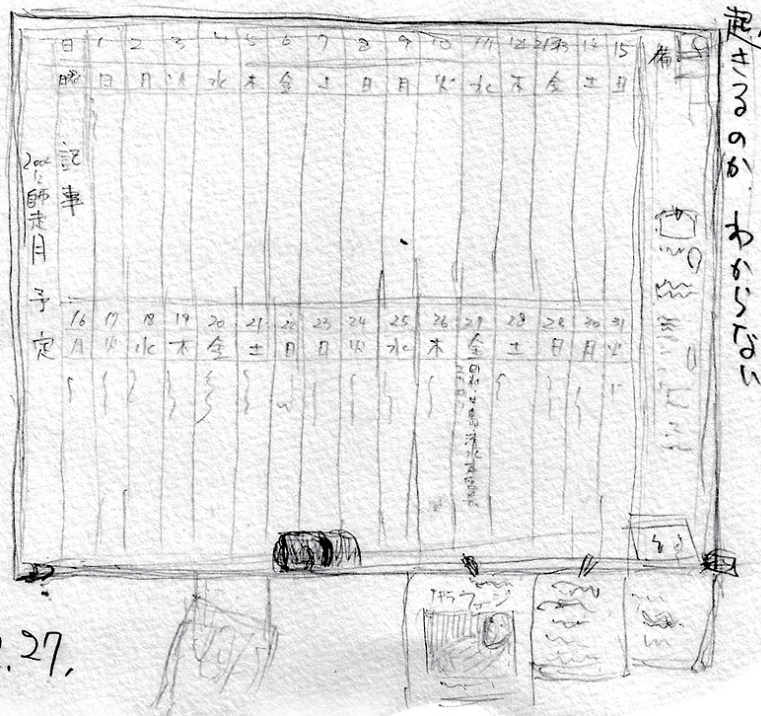
「とまり木」は、屋根も壁も壊れて下には雑草が生い茂る小屋から生まれたそうです。そんな所に床を作り、部屋を作ることは大変だったと思うけど、やっぱり楽しいことだったでしょう。目の前のボロ小屋が姿を変えていくのは感動的なことだったに違いありません。屋根ができ壁ができ、宿としての「とまり木」が生まれようとしていたんです。そして同時にオーナーとしてのいさん、ねえさんが生まれようとしていたわけです。

そんな、思いが積み重なってできた「とまり木」に僕がひよっこリチャリンコに乗って現れたんです。国内チャリダー生活宿泊費ゼロ記録更新中だったけど、僕はそれを崩して「とまり木」を目指しました。

……ま、とにかく「とまり木」にたどり着いたんです。

黒板

「とまり木」の命



2002.12.27.

下からは草が生え、天井から空が見えてしまうようなボロ小屋が、きれいになりつつあるころ、にいはさんは一つの声を聞きます。「いつもくん。屋久島で、どうやって食べていくの?」という、ねえさんの声でした。ねえさんは近くのお店でレジを打つという、生活のために自分の仕事を見つけてきていたんです。……ドキッ……そりゃ、にいさんも考えないふりをするわけにもいかなくありません。

……という、その頃、小屋の中、ゴミの山……そこで、にいはさんはある物を発掘しました。予定黒板です。そして、その瞬間に「宿……宿するー!」と宣言したそうです。ライダーハウス「とまり木」誕生の瞬間といってもいいでしょう。何がどうつながると予定黒板から宿へたどり着くのか、僕には分かりません。とにかく、にいさんの頭の中では「予定黒板＝宿」という公式がはっきりと浮かんだようです。

どこにどんなきっかけが転がっているか、誰にもそれは分かりません。でも、その転がっているきっかけを自分のものにするか、そのまま通り過ぎるかという違いはものすごく大きなものです。それを見逃さないキラリと光る眼を持っていなければいけないんです。

さて、僕の眼がキラリと光るのはいつのことでしょう……。

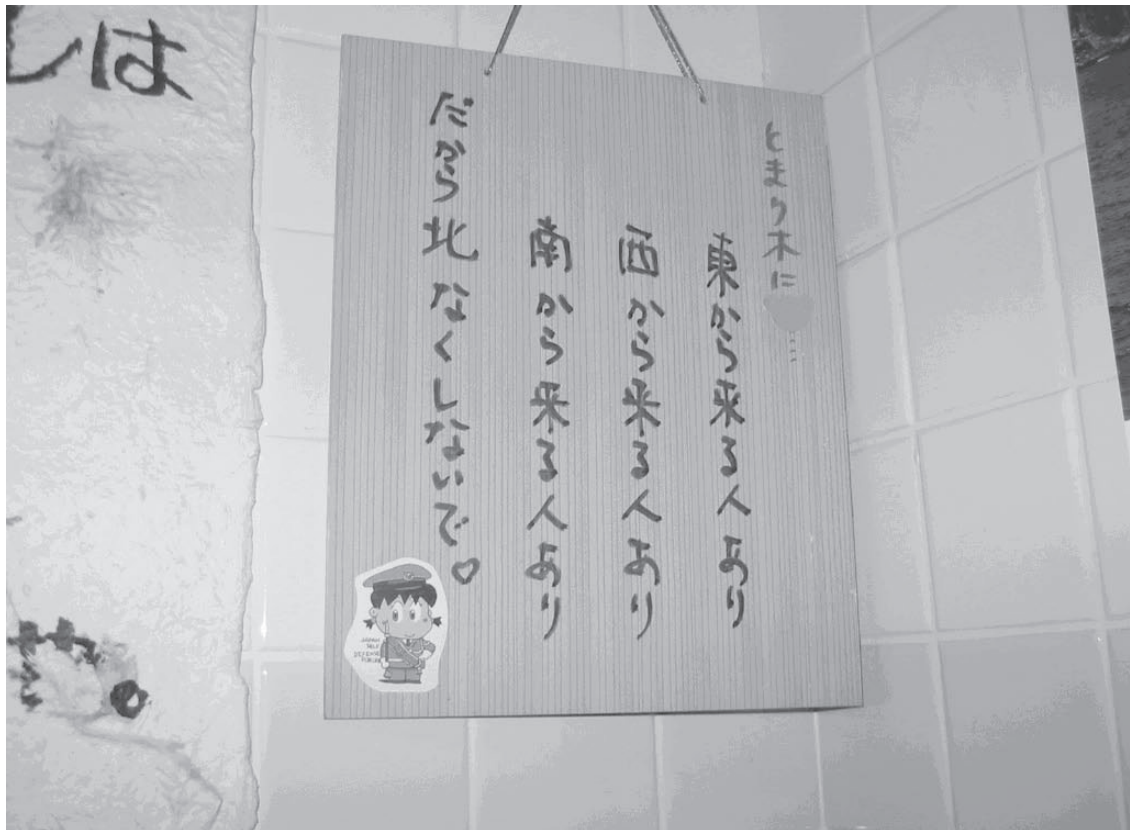


素泊まり一泊二千元……「とまり木」の料金です。ここで少し考えます。「僕、テント持ってるんです」……一泊七百元となります。この辺、やっぱりライダーハウスです。

チャリダーやライダーにとってテントは家です。つまり、僕らは家を持ち歩きつつ旅をしているんです。これは便利なことですよ。いつでもどこでも寝ることができるんですからね。んで、そんなチャリダーやライダーが、世の中にはたくさん並んでいるんです。だから、「とまり木」の裏にはテントがたくさん並んでいるんです。混雑するシーズンには一面テントだらけになるみたいでした。それだけ居心地がいいんです。

「とまり木」ではテント生活者にも風呂に入る権利があり、洗濯機を使う権利があります。くつろぎの間でウダウダする権利もあります。ちょっとうれしいことです。今までの僕のチャリダー生活は宿泊費ゼロというものだったので、テントを張る場所はないのだい橋の下でした。橋の下は雨が降ってもテントがぬれないので僕のお気に入りだったんです。そんな所ですから、当然風呂なんてありません。川で水浴びなんかしてました。

初めて知りました。七百元を払うということが、こんなに文化的な生活をもたらすとは……。お金とは使うもの……貧乏性ではいけないみたいです。僕にとっては大きな課題です。



ありがたいお言葉……

「とまり木」には神様がいました。便所神です。「べんじよのかみ」といっても、トイレットペーパーじゃないですよ……。

さて、この神様ですが、いろんなことをつぶやきます。そのつぶやきの中で、一番心に残ったのが「とまり木」に来る人々についてのお言葉でした。東西南北、それぞれから訪れるチャリダーやライダーたちを温かく迎え入れようという心が感じられます。そして、来た人たちが快適に過ごせるような思いやりが感じられます。

もし、同じ内容のつぶやきでも、「汚すな」という一言だけだったらどう思うでしょう。逆ギレしていたかもしれません。恐怖におびえながら用をたしていたかもしれない。どっちにしても、あんまりいい思いはしていなかったんじゃないかという気がします。

やさしく温かい言葉というのは人間の心の隙間を上手に埋めてくれるものなんじゃないでしょうか。人間の心の隙間というものは、周囲からなかなか見えません。場合によっては自分でも気づかないこともあるように思います。そのような心の隙間をそっと埋めてくれたら、「ありがとう」という言葉が自然に出てきそうです。

「とまり木」の便所に礼！……ありがとうございました。



「モッチヨム岳」……そんな山があるなんて、全く知りませんでした。でも、屋久島到着の翌日、僕はなぜかそこへ登りに行くことになっていました。

もともと、九州地方最高峰である宮之浦岳という山があることは知っていて、チャンスがあればそこには登ってみたいと……少しだけ……思っていました。でも、そんな高い山へ一人で行くだけの自信なんて、これっぽっちもありません。僕は山登りの専門家である「山屋」とは違うからです。

……と、「とまり木」のくつろぎの間で山屋さんたちが話をしていたんです。その次の二日間のうち、どちらかで宮之浦岳、そしてもう片方で「〇×△◇岳」に登るということでした。「宮之浦岳」という言葉に反応した僕はぜひ一緒に連れていってくれるようにお願いをしました。快く受け入れてくれました。それで翌日山登りすることになったんです。んで、その得体の知れない「〇×△◇岳」というモノが「モッチヨム岳」という名前の山であることを知ったのです。

「モッチヨム岳」を漢字で書くと「本富岳」となります。すごい字です。そこへ行く途中に「千尋滝」というのがあったんですが、これは「せんぴろのたき」です。もの名前というのは難しいものです。なかなか読めません……。



山屋である人々にとっては楽しさや喜びを感じる道なのかもしれませんが。モッチヨム岳の山道です。でも、僕は山登りをして、最高の幸せを感じるタイプの人間ではありません。だから、ハードな山道を見た、ただそれだけで「うわああ……」と疲れが倍増してしまいます。そして、モッチヨム岳はすごく急勾配な坂が延々と続いていました。しんどい道のりでした。……そんなにイヤなら最初から登らなさいいんですけどね……。

僕は、ある程度、普段体を動かしているつもりなので、まあ何とかなるだろう、と、軽い気持ちで山を登り始めました。ところが何か変なんです。スタートから妙に足が動かないんです。これは困った、と思いながらも、連れていってくれ、と自分からお願いしてしまった以上、歩き続けました。

山を登るときには、当然だけど足を上方向に持ち上げなければなりません。普段はあまり使わない筋肉です。前日、久しぶりにチャリダーへと変身した筋肉疲労があったのかもしれない……って、これはもちろん「言い訳」です。……とにかく、何か理由が欲しかったです。「自分はこんなはずじゃない」と思いたったんです。でも、モッチヨム岳はきつと、本当の自分、根性無しの自分の姿を見せてくれたんだと思います。つらさの物差しは自分の中にあるんですね……。



モッチヨム岳をヒィヒィ言いながら登っていくと、その道には屋久島ならではの光景が広がっています。とんでもなくつかい木々がお互いに絡まり合いながら大地へ根を下ろしているのです。モッチヨム岳は急な斜面がほとんどだったので、周りの様子なんて見ている余裕はほとんどなかったんだけど、時々顔を上げてみたとき自分がすごい世界の中を歩いているんだと感じました。

屋久島の木々を見て感じたことの一つに、実は「恐怖」がありました。一本の木が倒れた跡にその上へと乗り移り、以前の木を飲み込むかのようにまた大きくなっていく姿があっただんです。次から次へと前の木を征服して大きくなっているのです。他のものを踏みつぶしても自分は生き延びるという自然界の競争が感じられました。

でも、全く反対に考えることもできるのかなあ、と思い直します。二代杉とか三代杉などと呼ばれる杉があるように、自分の子ども、孫……というように、我が身を削ってでも子孫の命を育んでいく役割としての考え方です。こっちの考え方の方が温かくていいですよ。

正直な話、こんなことはいつでもよく、登山中の僕はしつこく早くゴールしたいという思いしかありませんでした……。



「救われた」……という思いだったような気がします。山頂が見えました。目的地がイメージできるといのは強いものです。それだけで少し元気が回復したような感じでした。しかも、その姿が美しいんです。まさに、山のとっぺんという顔つきだと思っています。「〇〇と煙は高い所が好き」なんて言います。実は、僕、煙だっただけです。高い所って、結構好きなんです。なんか、うれしくなってしまうんです。別に何の根拠があるわけでもないんですが、妙にハイテンションになるんです。崖っぷちとか、全然怖いなんて思わず、ひよいひよい歩いていたりします。周りで見ている方が怖いみたいで、ひゃあひゃあ言って注意してくれます。自分では余裕なんですけどね……。

「百里の道は、九十九里をもって半ばとせよ」なんて言います。目前に迫ったモッチョム岳の山頂ですが、なかなかたどり着けません。一度、姿がみえただけにくやしんですが、ゴールが近づいてこないんです。「もう少し」と自分を騙しながら歩いていきます。自分を騙して奮い立たせる、ってことも大切なことです。正直な自分だったら、即座にギブアップしてます。

そして、目の前に現れたのは岩……そしてロープでした。それさえ登れば山頂……のはずです。



なんといっても高い所が好きだという「煙」状態になっていきますから、気分は妙にウキウキしています。何か記念を残していきたいものです。それでは、飛ぶことにしましょう。……と、このポーズは僕の数少ないレパートリーの中の一つなのですが、モッチョム岳のてっぺんですから使用します。

空を飛ぶというのはきつと大変なことなんだと思います。僕は岩の上で着地しながら飛んでいます。地面に触れつつ、シャツターが切られるまでのわずかな間、この体勢を保つだけで必死なんです。体をまつすぐにしようとする、結構筋力が必要になってきてしんどいものでした。でも、僕は飛ぶんです。「煙」状態ですから……。

その日は天気も悪くなかったので結構周りが見渡せました。そこからは下界の様子までよく見えたので、逆に考えたら下界からもてっぺんの様子がよく見えたはずです。もしかしたら僕が岩の上で飛んでいる姿を何かで知っている人がいるかもしれないんです。そう考えると、なんか怖いような気がします。

てっぺんでは「とまり木」のねえさんが準備してくれたおにぎりを食べ、空も飛べた充実感を味わいました。ただ一つ……空を飛ぶには「シャッターを押してください」と人に頼む、少しの恥ずかしさを克服することが必要でした。

海だ！



海と山とどっちが好きか、と聞かれたら、僕はまず間違いなく海だと答えると思います。水遊びなんかが大好きで、あの浮遊感がたまらないわけです。潜ること大好きで、そこに魚が泳いでいたら最高なわけです。

僕が通っていた小学校区には海があつて、その海へ遊びに行つていいのが水泳「二級」以上という条件でした。二級というと、クロール、平泳ぎでそれぞれ百メートル、背泳ぎで二十五メートルを泳ぐ力を持っている人のことです。そして、その内でも、五年生以上の者だけに海へ遊びに行く特権が与えられていました。四年生の頃、すでに二級になっていた僕がくやしかったことといたら……。

モッチョム岳の上から大好きな海が山の上から見えています。ただそれだけで僕は幸せでした。どれだけ疲れてたって、いい風景を見たときには癒されます。体だけではなく、心まで癒されます。こんな心まで癒されるような風景が屋久島の中では何回も僕の前にやってきました。

といつても、もちろん景色がノコノコ歩いてくるわけありません。僕が「屋久島へ行く！」と思つたこと、そうやって自分から動いたことがすてきな風景と出会うきっかけになりました。だまってじつとしているだけじゃダメなんですね……。



モツチヨム岳から何とか下山してきました。その足元に目を落とすと薄汚れてナヨナヨした靴が横たわっていました。お世話になった登山靴です。

この靴、どんどんボロボロになってきています。買ってしばらくしたころ、ヒモを通すはずの金具がクニヨッと曲がってしまいました。あれれ、と思っていたら、そのうちなくなっていました。次から次へとその金具はポキポキ折れていき、上の方まではヒモを通すことができなくなりました。足首を守ってくれるはずだったんですけどねえ……。

今回はチャリンっ、と音がしたかと思うと、飾りの部分についていた金具が取れてしまったんです。まあ、ただの飾りだからいいんですが、何か不安が残ってしまうわけです。

そもそも僕がこの靴を手に入れたのはネパールでした。アンナプルナ山系をトレッキングするのに必要だと思って購入しました。その時はかなりイイモノを選んだつもりだし、その時の僕にとってはイイ値段だったような気がします。それをはいてネパールの山の中を意気揚々と歩き、疲れ果てていました。

こんな靴がボロボロになってしまったというのは、自分の身を挺して僕の足を守ってくれていた証拠ということでしょう。登山靴よ、ありがとう！



モッチョム岳恐るべし……僕はかなり疲れて戻ってきました。登るのにも下りるのにも、急斜面というのはとんでもないことです。下り道では膝がカクカクしてくるし、ズルッと滑ったりもするし、怖い思いをして帰ってきました。

こんな思いをしている軟弱者がいるかと思えば、余裕で歩いている人もいます。足元は長靴……よく、そんなモンで山道を歩けるもんだと思います。信じられません。

この人はライダーでした。だから、普段体を酷使しているはずがありません。体が「命」というチャリダーの僕としては「長靴のライダー」なんか負けてたまるか」と思っていたんです。ところがどっこい、長靴ライダーのすごいこと……、ひよいひよい登るしスイスイ下りてくるんです。完全に降参でした。

山に慣れた人というのはすごいモンです。ネパールの山の中では僕らが登山靴でヒューコー言っている隣を、ゴムゾリーでペタペタと、ものすごいスピードで追い抜いていく爺様もいらっしやいました。とても人間とは思えない世界でした。

基本的に僕は負けず嫌いな人間です。実は、モッチョム岳なんて余裕じゃないかと思っていたんです。それが意外なほどに苦戦させられて、ものすごく悔しい思いをしました。なので今、「いつか、余裕顔で登ってやる!」……と密かに燃えています。



チャリダーです。モツチヨム岳登山の翌日、チャリンコで白谷雲水峡という所を目指しました。

雨でした。朝からカッパを着て走り出すにはものすごいエネルギーが必要になります。まず、テントから起き出すのが憂鬱です。トイレに行くのさえ面倒です。どこかへ行こうなんて気持ちはしぼんでいます。チャリンコに乗るだなんて、もってのほかです……。ホント、軟弱者……。

「こんなに雨が降る降る、今日も一日何もしない♪」などと憧れの生活を口ずさみながらペダルをこぎます。最初はそんなモンでした。ところが、山道はどこまでも続きます。三十分くらいで上り坂終了……という自分勝手な予想は大きく外れていました。ああ、イヤだイヤだ、と思いながら進んでいきます。

と、周りが明るくなったような感じがしました。あ？……晴れ間が見えてきたんです。地面に影が映るではありませんか！ごくごく当たり前のことに思っていたことが、こんなにうれしいとは、我ながらびつくりしました。

苦しいことが続いているときに現れる、ほんの少しの喜びは何モノにも替えられません。旅をしていると、こんな感覚は異常なまでに研ぎすまされるけど、こんな感覚をいつでも鋭く持っていたいものだと感じる出来事でした。



木の隙間から光が飛び込んできます。雨上がりの水滴に輝くその美しさは、時を忘れて見入ってしまうほどのものでした。……いや、時を忘れてはいけません。チャリンコで坂道を上ったのはいいけど、白谷雲水峡の入口にたどり着いたのが、すでにお昼だったので、シャキシャキ進まないと言が暮れてしまします。山の中では瞬間移動のチャリダーではいられないんです。

さて、この白谷雲水峡という所の美しさはその時々によって色を変え、薫りを変えているようでした。『もののけ姫』などという映画のモデルにもなっているという森ですが、何千色の絵の具を使っても本物以外にその存在を表すことはできそうにもありません。

チャリダーからトホダーへと変身した僕は、濡れた山道を歩き続けます。森も様々な顔を見せ、いろいろな姿に変身してくれました。きらめく光が差したかと思えばドシャドシャと雨が降り、また、森を隠すかのように霧がやってくる……。七色の移り変わりを僕に感じさせてくれたんです。

様々な姿を見せながら、でもそれは大きな一つの森なんです。たった一つの色しかない絵の具箱ではなくて、無限の変化をもつ可能性に満ちた夢の宝箱でした。僕ら人間という存在にしても広さや奥のある存在を目指していけたら……と思います。



杉は何歳まで生きられるんでしょう。長生きする杉もあれば若くして命を失う杉もあります。命を計算できるものはありません。僕らの守備範囲を超越している、わけのわからんものです。

杉の中には人間の手によって倒されてしまうものもいるかもしれませんが。雷に襲われるものがあるかもしれません。老いて朽ちるものもいるかもしれません。そんな、自分の命を終わった杉たちの跡を継ぎ、二代目を名乗る杉もあります。初代の体に根を伸ばし、その体を取り込むように大きくなっていきます。

人間だったら受け継ぐのは名前だけですが、屋久杉たちは体の一部をも受け継いでいきます。根元には初代の体が二代目と同一化しながら存在し続けるんです。自分の体の中に初代の体を感じながら生き続けるんです。

怖いような気がします。どうも、僕は自分勝手なのでいつも自分のことと比較して物事を考えてしまいます。自分が何か他の人を踏み台にして生き続けるとしたら……、何だか吸血鬼の気分です。

うれしいような気がします。どうも、僕は楽観的なのでいつも自分にとって都合よく考えてしまいます。大切なものとずっと一緒に生きていけるとしたら……、何だか消しゴムつきの鉛筆の気分です。安心感でいっぱいです。

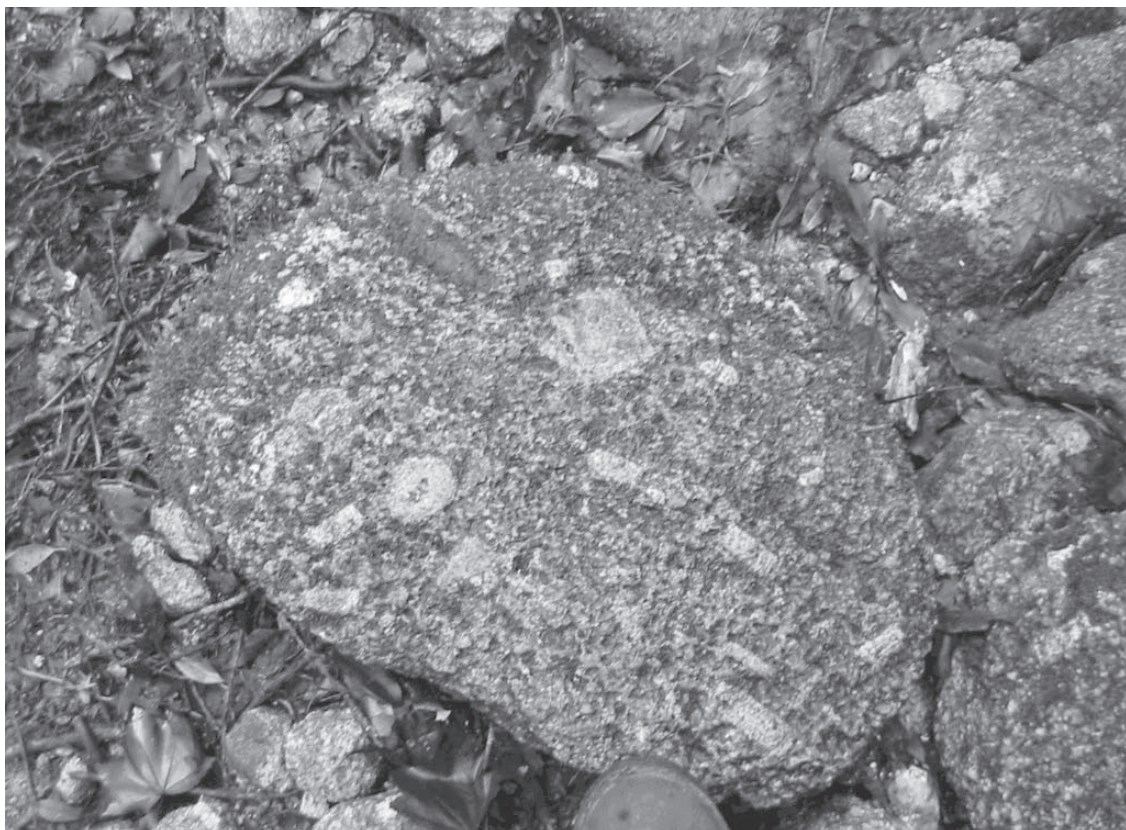


切り倒された杉はたいそう立派な姿をしていたことでしょう。切り株になってもその偉大な姿が想像できます。苔におおわれたその姿は、優雅に上着を羽織っているかのようです。その苔がたっぷり水を保ち、新たな命を育みます。きっと何十年後、何百年後、あるいは何千年後に、自分の姿はなくなっても次の世代の杉を守っているでしょう。

とっても感動的な切り株なのですが、実はこのような切り株は森のあちこちにあります。最初の頃はその姿を見るたびに感動しまくっていましたが、だんだんにその感動にも慣れて「おお、切り株よ。元気かい。」という程度になってしまいました。慣れというのは恐ろしいモノです。

たとえば僕は静岡人として、海が存在を当たり前のもののように感じています。でも、よく考えたら海を持たない町もあるんですよね。海水浴といえば遙か彼方への大遠征だと感じる人たちも多いわけです。歩いてでも海へ行ける所とは大違いです。

屋久島の人たちは、そのすごい自然を当たり前のように感じているかと思います。もしかしたら本来はそれが普通なのかもしれません。普段、大自然とのふれあいを失っていることで屋久島のすごさを感じる僕としては、少し寂しいような気がしました。そして、屋久島の自然をつらやましく思いました。



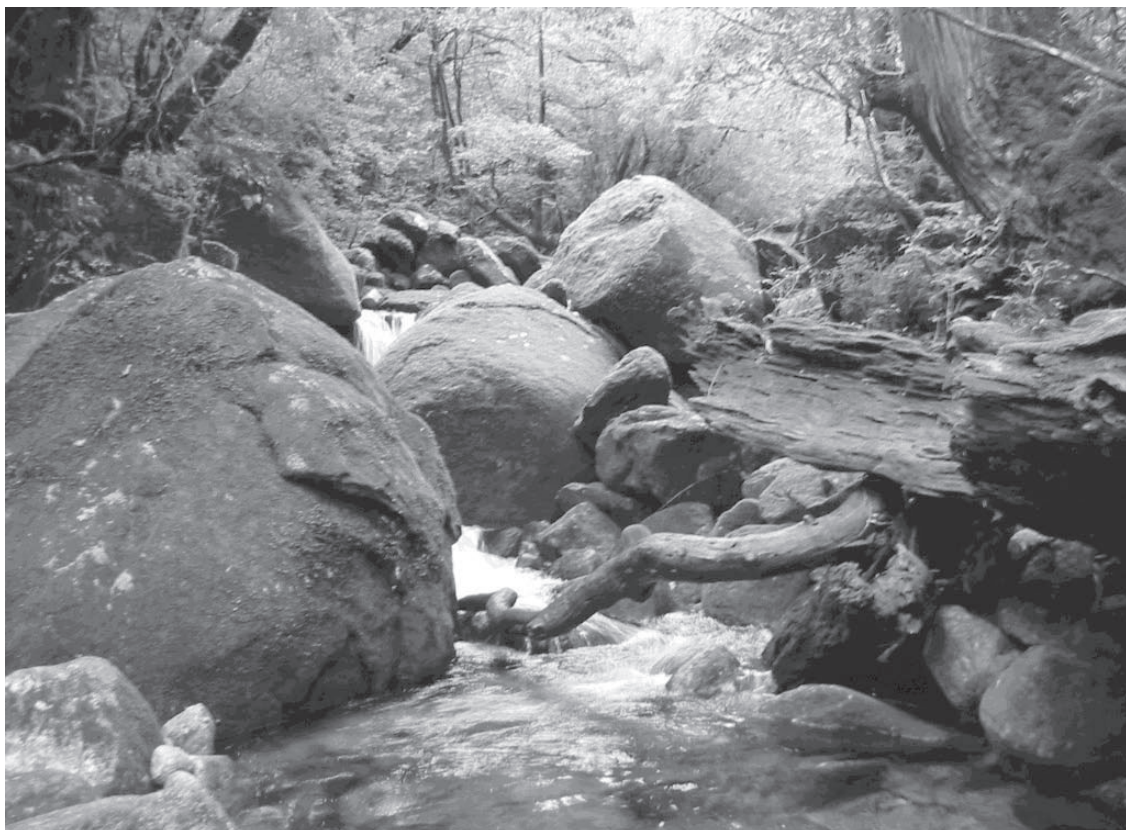
「あや？」石の中になにかが入っています。もしかして化石か？……などと考えてしまいました。いえいえ、ただの石です。

屋久島はもとも花崗岩のかたまりです。この花崗岩って、ものすごくきれいな石ですけど、そんなことは山の杉たちには関係ありません。花崗岩のかたまりには栄養なんかは無く、植物を育てる力はないんです。本来、屋久島というのは自然にとつてもものすごく不親切な所だったんです。

花崗岩の上に、ほんの少し水がたまります。さらに風が何かで飛んできた、ほんの少し栄養分がたまります。そのほんの少しの水と栄養分を使って、少しずつ木々は育っていきます。

屋久島は雨の島です。水には困りません。でも、太陽の光に悩みます。緑の葉っぱたちが「さあ、光合成するぞー！」と思っても、太陽はどこにも見えないんです。だから、少しずつ少しずつ育つしかないんです。いっぺんにグングン育つ時期というのがないの、中身のぎっしりつまった杉になります。堅くて強い屋久杉になつていくんです。

苦勞が多ければ多いほど、強くなる……それは真実のようですね。屋久杉は過酷な自然と闘っています。人間としての僕だって屋久杉には負けたくありません。もっともっと強くなるぞ、と心に誓う軟弱者でした……。



ジメジメ……といったらものすごく印象が悪いですねえ。でも、ジメジメ……なんです。屋久島、気候としては湿気がものすごく高く、空気全体も水分を多く含んでいるように思います。

だからなんでしようねえ……。森の中がものすごく緑色に輝いているんです。緑色のもとは苔です。苔というものも、イマイチぱっとしないイメージがありますが、雨上がりに滴を体いっぱいにためた苔が太陽のスポットライトを浴びている姿、精一杯輝いています。きれいでした。

森の流れ……緑の空気の中から水が流れ出すその雰囲気は幻想的、神秘的……ナニモノかが出てきそうな森の空気なんです。見る人がみたら僕には見えないナニカが見えているのかもしれない。

そう、僕、靈感と呼ばれるような類のものが全くないんです。今までに一度たりともそのような怪奇現象に出会ったことがありません。心霊なんていうヒト達が目の前に現れたら僕はどうするだろう……と考えます。ぜひ、友達になってもらうようお願いしたいところです。怖さを感じない人間の楽天性です。怖い思いをした人たち、ごめんなさい。

ジメジメ……の空気を爽やかなものに変える、屋久島という所、やっぱりすごい所だと思います。

お奉行様、待ってくださいえ！



名前つてのはものすごい力を持ったモンです。一度その名前を聞いたなら「ああ、そうなのね……」と有無も言わずに納得……というパターンが多いような気がします。

奉行杉……なんと偉そうな名前でしょう。庶民の僕としては名前を聞いただけで、とりあえず頭を下げなきゃいけないような気分になってしまいます。とりあえず貧乏農民のイメージで「待ってくださいえ！」とか言ってみたくなるモンです。もしも僕が女だったら「あーれ、お奉行さまあー」などと言いながら、クルクル回っていたと思います。別に杉の木が何かをするワケじゃないから、僕が勝手に遊ぶというだけです……。

それで、遊びながら考えるわけです。「僕が杉の木と遊んでいるのは、なんでだろう……」という思いです。別に僕は奉行杉と長年のつき合いがあるワケじゃありません。もちろん、向こうは何百年も生きているような木だから、僕よりも多くの物事をその体で感じ取っているはずですよ。気安く僕が話しかけたりするような存在じゃないのも確かです。それが、一緒になって遊んでしまうのは「奉行杉」という名前がついていることに理由があると思います。親しみを感ずってしまうんです。

人間も同じ……、名前というものは大きな影響力があるはずですよ。もっと親しみをもって名前を味わいたいと思います。



日本という国にはやたらめったら鹿という生き物が住んでいるようです。そういえば北海道でチャリダーだった頃、僕のとまりをビヨーンビヨーン、とすごいジャンプ力で林の中を駆け抜けていく鹿もいました。キャンプ場でエサをあさる鹿もいました。

今回、屋久島でも何回か鹿と遭遇しました。ある時は森の中で、ある時は道端で、またある時は冷凍になった肉として……僕の前に現れた鹿たちでした。

鹿も、山を下りて道なんかを歩いていたら交通事故に遭ってしまいます。彼らはでかいので、車にぶつかったときの衝撃は大きいようです。結果的に、鹿は死亡、車は再起不能となったりします。お互いにとつていいことは何にもありません。その肉をいただいて「おいしい、おいしい」と言っている貧乏チャリダーもいるわけですけど……。

森の中の鹿たちは堂々としています。自分たちの世界を自分たちのルールで生き抜いているようでした。そこに僕らのようなよそ者が訪れて、コソコソと写真などを撮り、去っていくのです。森の中では僕ら、ちっぽけな存在なんです。

大きな森に抱かれて暮らす鹿たちの姿は、自信に満ちています。森という偉大なふところの中で、いつまでもカッコよく存在していてほしいと思います。

飛鳥杉とか平安杉とか、そんなものもあるのかなあ……



縄文時代があれば弥生時代があります。そして縄文杉と名付けられた木があれば弥生杉と名付けられた木もあります。弥生杉、登場です。

縄文人は発達した顎を持ち、ゴツゴツした顔立ちをしていたといえます。対して弥生人はそれよりもほっそりした顔つきだったといわれます。そんなイメージがあるからでしょうか、弥生杉を見て、どうもしなやかな美しさを感じてしまいました。優美な曲線が空へ向かって伸びていく姿は、僕に女性的な印象を与えたんです。

男と比べたら女の人って「きれい」という言葉が似合うような気がします。「裸婦」というテーマで画家が絵を描いたり、彫刻家が像を生み出したりすることはよくあることです。もちろん美しい男性がいたり、力強い女性だっていると思います。それはそれでステキだと思います。でも、僕は「きれい」な女性はいいなあ……と感じます。「きれいなおねえさんはキレイですか」なんて聞かれたとしたら、ぶるんぶるん首を振って「もちろん大好きです!」と答えるはずです。ただ単に僕がイヤラシイだけでしょうか……。

ま、一般的に考えたら、男だろうと女だろうと無関係、「だから何だっ!」と思うこともいっぱいあるんですけどね……。

お前や、酔いすぎ！



「ういゝゝ」酔いすぎは体に良くありません。僕はお酒を飲めない体質なので、幸か不幸か酔いすぎるほどにアルコールが体にたまることはありません。何かの機会に「飲まされる」状況になったとき、僕は自分の体を呪います。きっと、二日酔いというのはこんな風なんだろう、と思いながら、お酒を飲まされます。飲んでいるその時から頭がガンガン痛くなり、気持ち悪くてゲロゲロになってしまうんです。

それでも、芸人としてはボケるときにはボケなければいけないという、過酷な使命をもっています。むしろ、体が勝手に動くというべきでしょうか……。あやじギャグと言われようと、どれだけ「寒い」と、冷たいツツコミを入れられようと、何かをしなければいけないんです。……いや、いつから芸人になったか、などというツツコミも不要です。

芸人っていう人たちはすごい人たちだと思います。よく、テレビで若手の芸人さんたちが、ボロボロになりながら笑いをとろうと努力しています。人の欠点を見つけてヘラヘラ笑うのは僕の趣味じゃないんですけど、そのどんな手段を使っても人を笑わそうという芸人魂は尊敬に値するように思います。

芸人は人を幸せに笑わせるために身を削ります。身は削りたくないけど、人を幸せにしたいと思うのは僕も同じです。

やかん

寒い寒い雨の中
食堂に入ったら
シューシューいてた



2002.12.28

「寒い」と感じるのはおやじギャグが連発されたときだけではありません。気温が低ければそりゃ、寒いんです。

九州の南にあるような島が、なんでそんなに寒いのか、僕には信じられませんでした。しかも、雨ばかりだから、とんでもない寒さを感じられます。シャレにならん、と思いました。

坂道を登るとき、チャリンコはものすごく温かい乗り物になります。汗をかくほどに暑くなります。そりゃ、体力使いますからねえ……。逆に坂道を下ってくるときは「ひえっ」と言いたくなるくらいに体が冷えてきます。

白谷雲水峡からの帰り道、やっぱり雨に降られました。帰りの下り道なので、チャリンコは何にもしなくても勝手に走っていきます。ビシビシ顔に雨が当たり、冷たい空気が体を走り抜け、ゾクゾクと背筋に寒気が走りました。ふもとまで下ってきたときは、寒さと空腹でへっへっしていました。

そこで見つけた一軒の食堂……。ずぶ濡れになりながら暖簾をかき分けて入り込みます。食事の準備もしてくれそうです。助かった……。というのが正直な感想でした。温かいお茶をいただきながら、店内を見渡すと、そこにやかんが熱い息を吹き出しながら、シューシュー言っていました。

……僕はやかんの絵を描いていました……。



縄文杉に会いに行こうとしたら、多くの人は安房という所から山を目指します。自動車で行けるところまで行ってから、一日をつかって往復してくるというパターンです。

自動車はきらいです……だから……、いやいや、とんでもありません。愛車「山風号」に乗ってあげたいという純粋な気持ちから、とにかくチャリンコで坂道を登っていきました。

上り坂とはしんどいものです。走り始めてすぐに「こんな苦しいことをしてるのは、なんでだろう」と考えてしまいます。毎度おなじみのことなので、だからなんだ……というレベルの疑問ですが、でも、やっぱり考えてしまうんです。以前、富士山の五合目を目指したときには、後悔にも似た思いがわき上がってきました。それでも、まだ走り始めてしまうのがチャリダーの宿命というモンです。

こだわり……って大切なものだと思います。僕の場合、かなり偏っているかもしれないけど、自分なりのこだわりをもって日々の生活を送っています。チャリダーに変身したときでもそれは同じです。周りの人から見たら、「バカじゃん……」とか、「アホちゃう?」とこぼすようなことかもしれません。バカ度一〇〇パーセントに近いかもしれませんが、それでも、僕はバカじゃないフリをして生きていきたいこうと思うんです。



山の中に寂しげな線路が続いていました。幅はだいたい一メートルくらいでしょうか。トロッコと山道に伸びていました。

When the night has come... などと歌い始めそうです。きっと何人も人が歌っているはずです。『スタンド・バイ・ミー』の世界です。線路の上を歩いていくというのは、ロマンなんです。ただそれだけでうれしいんです。

でも、線路の枕木ってのは僕の歩幅に合っていないようで、どうもその上を歩くのには抵抗がありました。あこがれの縄文杉に会いに行くためにトロッコ道を歩かなければいけないというのは以前から知っていたことなので、少し覚悟してその場に臨みました。

あれ……？……？と思ったのはその歩きやすさでした。レールとレールの間、つまり、枕木の上に更に板が敷かれていたんです。こりゃラッキーってな具合です。歩幅には関係なく、すたすた歩くことができました。その一歩一歩が縄文杉へと近づいていく歩みかと思うと、足も軽くなります。

自分の足で歩いていく、ということ、チャリダーとしてはあんまり多いことはありません。足の代わりにタイヤが体を前に進めてくれるフケですから……。ちよっと自分の足で一歩ずつ歩くことにも魅力を感じてしまいました。これって浮気？

気をつけるけど……来たら逃げられないんじゃない……



先生に「忘れ物をするな!」と言われることがあります。いや、忘れちゃったから「忘れ物」なワケで、わざと持ってこなかったという事とは違うんですが……。世の中にはどうにも困ってしまう時があります。

狭いトロッコ道を歩いていて、そこをトロッコが走ってきたら……。どうすりゃいいんでしょうか。前を見て、充分に気をつけて歩いていたらしましょう。前からトロッコがものすごい勢いで走ってきたとしましょう。道は狭いので逃げ場がなかったとしましょう。どうにもなりませんよ……。あきらめてトロッコに轢かれるか、谷底へ落ちていくか、究極の選択です。

でも、看板には「気をつけてください」と書いてあるんですね。具体的な方法を書いてくれると、もっと親切だと思います。たとえば、「五メートルほどジャンプして逃げてください」とか「上手投げが有効です」とか書いてあったら、挑戦できるじゃないですか……。難しいですけど……。

要は、自分の身は自分で守るしかないんです。どうしても危険に遭いたくなかったら、山へ行かなければいいんです。山へ入ったからには、常に危険と隣り合わせだと覚悟すべきなんです。それが暗黙のルールだと思います。

あ、「忘れ物するな!」と言われたら「はい!」と返事です。



「育ての親」なんて言葉がありますが、この森は何を育てているんでしょう。森は土をつなぎとめることで魚を育てているんです。……何かの教科書で見たような言葉です。

以前、橋の下でテントを張って寝ていたら、水没していました。あわてて逃げ出しました。朝、岸の上から見たら、完全にその場所には川になっていました。びっくりしました。

その時のことを自分なりに考えると、僕を水没の刑に陥れたのはダムのような気がします。ためてためてためて……ドバァ〜っと一気に放出するのがダムのやり方です。僕はそれにハマりました……いや、勝手にハマったんですけど……そんな感じだと思います。

それが、森たちだと、「雨降って地固まる」ことを意識しながら、じんわりじんわり根っこを絡めつつ水を流し、土の中の栄養分を上手に含ませて、おいしい水をつくってから海へと流していくから、ドカーンと一発で水があふれることはないんですね。栄養たっぷりのおいしい水は、僕らののどをうるおし、流れ込んだ海で、魚たちを育てる「育ての親」を果たしてくれるわけです。なんとありがたいことでしょう。

でも、屋久島は栄養分の少ない花崗岩のかたまりみたいなものだから、スパルタ教育をしているかもしれません。



木を見て心の底から「怖い」と思いました。何だかよく分からなかったんだけど、身の毛がよだつような感覚でした。「自然はすばらしい」なんて言葉はその時の僕には全く当てはまるものではありません。恐怖でした。

一本の切り倒された木に根を下ろす別の木の姿……。最初にあつた木の養分をすべて吸い取って自分のものにしていくようなオーラをそこに感じました。決してスピードのある動きではないけど、確実にその木を締め付けていく姿でした。むしろ、スピードが感じられないからこそ、じっくりじっくり征服されていく木の恐怖が僕に乗り移ったように思えました。

もちろん、考え次第です。「へい、らっしゃい！」ってな掛け声に呼び込まれて思わず根を伸ばしちゃったよ……という感覚で見ることだってできます。「さあ、私の膝の上でゆっくり休みなさい」というお母さんの声をイメージすることだってできます。そう考えた方が気持ち晴れ晴れとしますね。やっぱり明るい方が幸せです。

この森を通る僕の感覚には、妙に心の中に崇高なものが入り込んでいたような気がします。「恐れ」じゃなくて「畏れ」というものです。ええ加減人間の僕にそんな感覚を持たせる屋久島の森……ちよっとくやしいモンです。



「僕は君らの後に付き従っているワケではないんですよ！」人間としてのプライドをもつて、人間としてトロッコ道を歩いているんです。決して猿の仲間入りをしたとは思っていません。

彼らは堂々と線路の上を歩いていました。もちろん、人間だけしか使つてはいけない……というものではありませんから別にいいんですけど、何か妙な気分でした。人間よりも猿の方が存在感があるように思えてしまつたんです。

屋久島固有のヤクザルたちは島の中、森を生活場所にして、たいそう元気に暮らしています。「自分たちは人間よりもえらいんだ」というような顔をして、僕らの顔を見ても当たり前のような振る舞いをしていました。僕としては「なめんなよ！」とか言つて猿にけんかを吹っかけてみたいような、それほど当たり前のような雰囲気を感じたんです。さすが、ヤクザルたちです。僕をこれだけの気持ちにさせるとはたいした奴らです。

相手のレベルが高ければ高いほど燃え上がるモンです。どんなときでも同じです。基本的に負けず嫌いなので、僕の周りでは常に勝負が展開されています。他の人は感じていないかもしれないけど、僕は常に周りと勝負して生きているんです。

……ん？ということは僕のレベルは、ヤクザルと同レベルということになるんでしょうか……。



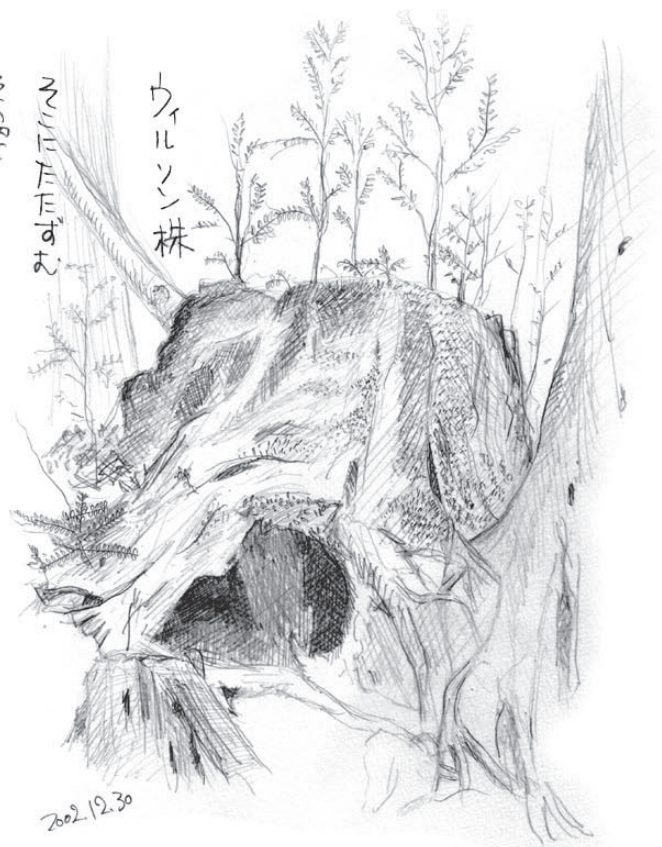
「今は昔、竹取の翁といふものありけり」などいいながら、『竹取物語』は始まります。どうも、僕のイメージからすると、ちよつとしよくれたあまり元氣のない爺様がのそのそ山道を歩いているような、そんな光景です。「野山にまじりて竹を取りつつ、よろずのことに使ひけり」というくらいですから、現役バリバリの爺様なのかもしれないけど、弱っちい印象しか出てこないんです。

そもそも「翁」とは辞書で見ると「①年をとった男。②老人の尊敬語。……」となっています。②の方は全然ヨボヨボしている印象もないし、むしろ威厳のあるお姿が連想できます。

翁杉と名付けられた杉に出会いました。彼は偉大な姿をした立派な杉でした。彼の周りではたくさんの子ども、孫、ひ孫にあたる杉たちが翁を取り囲んでいました。たくさん信頼を集め、寄り添って暮らしているような、そんな空間でした。堂々とした幹の中に温かさを感じる、そんな存在感でした。

日本語には一つの言葉で表していても、実際の姿は全然違うことがあるわけです。人が発する言葉ってのは主観的なことも多いし、その言葉の裏側にある真意まで読みとることが求められます。面倒ですが……、それがしっかりできるとしたら、何十倍も自分の心が広がっていきそうな気がします。

でかい切り株なのだ……



ウィルソン株

そこにたたま

その姿

ずいりと重く

ずいりと大きい

大地に根を伸ばし

大地をつかむ

その姿

その重さ

「ウィルソン！会いたかったよー！」……周囲十三、八メートルの巨大な切り株、その名もウィルソン株です。十六世紀末に切られたと伝えられています。それを二十世紀になってからアメリカの学者であるウィルソンさんが発見したから、ウィルソン株という名前なんだそうです。

切り倒されてから約四百年だというのに、まだその姿を美しく保っています。それは屋久島の杉が他の場所の杉よりも脂をたくさん含んでいて腐りにくいからだというんです。過酷な自然に鍛えられているヤツは違いますねえ……。

ところで、このウィルソン株ですが、実は縄文杉とともに僕の中では「期待大」の存在でした。この切り株の中から湧き出ている水がメチャクチャうまい、と聞かされていたからです。そう教えてくれたのが山好きな人で、信頼できる人だったのでかなりの楽しみが心の中で高まっていました。

そして、切り株の空洞の中に入り、いよいよ試飲です。ゴクリ……フム……ゴクリ……フムフム……。おいしい水でした。でも、情けないことにそれがどこまでおいしい水なのか、よく分かりませんでした。自分の舌の鈍感さ、曖昧さを恥じました。

まだまだ経験不足、修行不足の僕です。もっともっと多くの旅を続けなければなりません。よしっ、大義名分ができました。

見よ！このデカさ！



でかい、でかい、でかい……何よりもそれがウィルソン株を見ての感想です。公式データでは、僕の身長は一八二・四センチということになっています。ということは、両手を広げたときにもだいたい一八二センチくらいあるわけです。ま、数字を見てごの、このというレベルではなく、パッと見て直感的にでかいんですけどね……。

んで、僕はこの切り株のシルエットが好きなんです。実際にこの目で見える前にも写真や絵などでその姿を知っていました。でも、やっぱりその場で見るその姿は素晴らしいものでした。切り口の傾き、空洞部分の明暗、表面に生えた苔……もう言葉にするのがもったいないくらいのもう美しさだったと思います。

お笑い芸人がテレビで何かの芸をしています。僕らはハハハと笑います。それが、目の前で行われるライブだったら……、その笑いはグハハであり、ギャハハであり、グラグラなんです。何といつてもナマに勝るモノはありません。その科学的には証明できないような、得体の知れない空気は確かに存在するような気がします。別に心霊現象があるというわけじゃありません。人がつくり出すオーラとでもいえるのかもしれない。

ウィルソン株は僕に強烈なオーラを発しました。思わず、ポーズを取って写真撮影です……。



南の島、それが僕の屋久島に対するイメージでした。だって、九州の南に浮かんでいる島ですから、暖かいに決まっています。

それが、寒い寒い、寒すぎる……なんてこんなに雪が積もっているんでしょう……。泣きそうでした。僕は生まれてから、雪なんてものをそんなにたくさん見てきていません。年間通して一回降るか降らないかという土地で何年も生活している者としては、雪を見ただけでもう頭の中が凍り付きそうな勢いです。

気候が穏やかだということは性格も穏やかになる……。と直結しているみたいです。僕の周りの人たちが全部そうだというわけじゃないけど、やっぱり穏やかな人たちが多いみたいです。都道府県ごとに歩くスピードを測ったら、僕らはかなり遅い部類になるようです。環境が人を育てるんです。

そんな穏やかな環境の中でもさらに周りから「のんびり」だと言われます。ということは、僕は全国的に考えても最高レベルの「のんびり」人間に認定されるべき貴重な存在なんです。世の中にはテキパキと要領のいい人も、ずるい人も、せっかちな人もいます。何をしても、どんな時でも、とにかく「のんびり」ってのは「良さ」にはなりませんかね……。

ゴメンナサイ。言い換えればただの「鈍くさいヤツ」ということです。……ああ、瀬戸際……。



つながり合うということ……本質的にそこまでいくのはものすごく大変なことです。この木たちは完全につながり合っちゃっていました。どっちがもとの木なのか知りませんが、二本がくっついちゃっています。

もしも人間だったとしたら……ベエッタリ、いっっつつでも、ずうっつとくっついていたら、かなりストレスがたまるんじゃないでしょうか。だって、いくら気が合ってたって、二十四時間、三百六十五日の間お手々つないでランラン♪……ってワケにはいきませんよ。恐るべし夫婦杉です。

木や草にやさしく話しかけていると、より美しい花が咲くと聞いたことがあります。木にも心があるってことなんですよね。そして、僕は美しい花を見て「ああ、きれいだなあ」と思っんです。木の姿を見て僕らの心が安らぐんだから、逆に考えたら……木も僕らの姿を見て「ああ、きれいだなあ」とか思っているんじゃないか。あ、でも、木には目がないから、雰囲気を感じているのかもしれないですね。「ああ、イヤな感じ……」だとか、「ああ、勢いを感じるぞあ」とか、その人の外面からは分からないことを読み取られているんだとしたら、ドキドキします。

外面にとらわれない眼……僕も欲しいです。



「感動の時」の始まりとでもいいましょうか、そこに現れた姿を見てからしばらく、僕はその空気に酔っていました。同じように流れているはずの時間なのに、そこで一度区切りができて、別の時間が流れ始めたような感覚でした。

そこまでの道のりは結構つらいもので、かなり疲れていました。雪は積もっているし、坂は急だし、エライことになってしまっていたんです。でも、霧の中から木の階段が見えてきて、そこを上れば会える、と思っただけで、時間は変化しました。

どんなことでも同じだと思うけど、ワクワクすることや楽しいことなんかが目の前にあるとしたら、もう全然普通じゃなくなってしまう。まだ、そこにどんないいことがあるのか、もしかしたら違うかもしれないけど、期待でいっぱいになってしまいます。そんな時間って、とてもうれしい時間だし、大切な時間のよう気がします。

実際に姿を現した縄文杉は、霧の中で大きな体を浮き立たせていました。僕が初めて出会った縄文杉は、霧の中だったわけです。キラキラ輝く陽を浴びていたわけでもなく、夜露にきらめいていたわけでもありません。……霧の中で、静かに静かに立っていました。

「感動の時」の始まりでした。



自然に……ホント、自然に体が動くことがあります。どんな時か……感情の高ぶりがあったときです。喜怒哀楽が表に現れた時です。

喜……体が踊り出します。

怒……声が張り裂けます。

哀……涙が滲みます。

楽……顔がくずれます。

縄文杉に出会えた時の僕の気持ちを、もし漢字一文字表すなら「敬」になるのかという気がします。何年も前からずっとずっと会いたかった縄文杉へ、雪の山道をずっとずっと歩いてたどり着いたんです。僕なんかよりもずっとずっと大きな体で、人間よりもずっとずっと多くの年月を生きてきた命です。心の中は「敬う」気持ちにあふれていたように思っています。自然に手の平を合わせていました。

手の平を合わせると、皺を皺が合わさります。「しあわせ」です。それが、手の甲を合わせてしまったとすると、節と節が合わさって「ふしあわせ」になってしまいます。人と人も同じだと思います。背中を向け合っていたら、何も出てきません。腹の底から正面向いて関わったら、相手が見えてきます。きっと、「しあわせ」へと続いていくと思います。



もう少し……もう少し……と思って手を伸ばしても、届くわけがありません。縄文杉は柵の向こう側です。

僕が見た大学時代の友達は、写真の中で、抱きかかえるように縄文杉の肌をさわっていました。巨大な幹の前で笑っていました。写真の中だけでもその大きさを感じさせるものがあつたし、その思いを伝えるものがありました。あの写真が僕の屋久島行きの原点でした。

僕と同じような思いを持った人たちは世界中にものすごくたくさんいたようです。そして、当然僕より早く屋久島を訪れた人たちも多いわけです。その結果、縄文杉の周りは踏み荒らされ、根も傷み、植生まで変わりつつありました。大昔からそこに立ち続けた縄文杉にとって、急激すぎる環境の変化だったんだと思います。

僕は縄文杉にさわれませんでした。どれだけ手を伸ばしても、縄文杉は近づいてきてはくれませんでした。目の前に堂々と立っている縄文杉は少し離れたところから僕を見下ろしていました。その大きさを肌で感じさせることを許さず、眼で……そして心で感じることを求めています。遙かなり、縄文杉……やっぱり、僕にとっては遠い存在だったようです。

……手が、あと八五〇センチくらい長ければ……。



歩いて二十分弱、そこには僕を迎え入れてくれる場所がありました。縄文杉と僕とを結ぶ夢の浮島です。

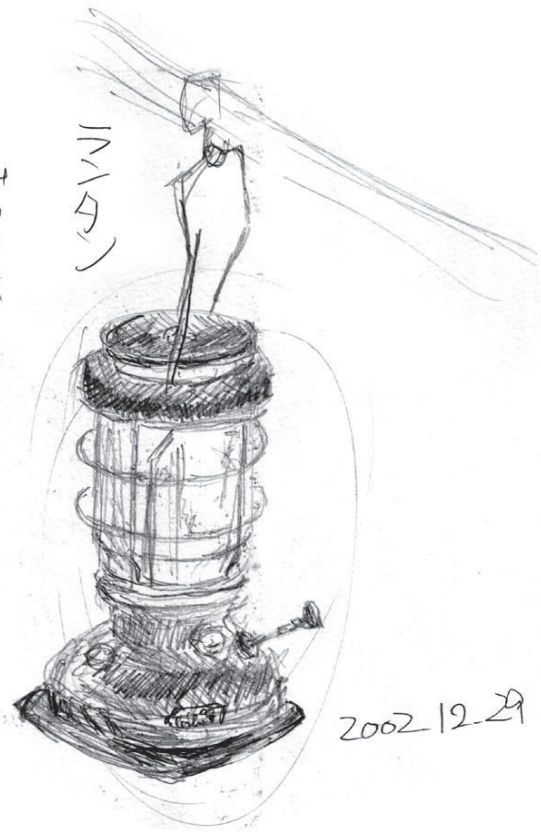
何といっても僕は縄文杉に会いたくて屋久島を訪れました。その縄文杉への道のりは遠く険しいものです。朝は暗いうちから動き始め、夜も暗くなろうかという頃までの丸一日をかけて往復する人たちがたくさんいます。でも、それだと縄文杉と対面する時間はほんの少しだけになってしまいます。それも、たくさんの人たちで混雑している所で、流れ作業を行うかのような出会いしかできません。

それでは納得できませんでした。冬場、自分の装備で高所の一夜を明かすことに不安もありましたが、それでも僕は縄文杉との時間を大切にしたいと考えました。だから、宿の旅人たちの情報を頼りにして、山小屋に泊まることにしたんです。

そもそも、山ん中のことですから、そこが混んでいるのか空いているのかも分かりません。その場で、出たとこ勝負なんです。チャリダー生活で、常にそんな勝負をしてきたので「自分ならできる」というカンは何いていました。さすがに雪山での宿泊経験はなかったので、かなりビビってましたけど……。やっぱりカンピュータには敵うものではありません。

とにかく、僕は山の上で夢を見ることになったんです。

あかり



ランタン

山小屋で

まぶさかな

と思っていたら

山の仕事の人たちが

光を灯した

その明かりの

明るさ

温かさよ……

灯火……そんな感じでしようか。真つ暗な山小屋にふわりと浮かび上がる光が感じられます。やさしさであり、温かさであり、安らぎです。

そこはブロックの壁に囲まれた無機質的な空間でした。外が明るい時間でも、その内側には陽の光が差し込まないようなそんな冷たさともいような雰囲気が漂っていたんです。

外は闇に包まれていきます。僕の頭が輝き始めます。ヘッドライトを頭に装着です。これは両手が使えるので便利で、大好きです。でも、僕が愛用しているヘッドライトは発光ダイオードを利用しているので、青白い光から冷たさを感じてしまいます。鋭さはあるんですけど、鋭すぎて怖いくらいなんです。

……と、ランタンと共に山小屋へ現れた人がいました。僕にはその人がつけた光がとても温かく思えたんです。ランタンの灯は燃えている火です。僕のヘッドライトのように電気の申し子とは少し違いました。

野生の動物は揺らめく火を見て恐れを抱くといいます。僕ら人間は同じ火を見て安らぎを得ます。ゆらゆらと様々な形に姿を変えながら、ひと時として同じ形を留めていることはありません。人の心と共通するところがあるからでしょうか。僕らは火を見て自分の心の奥を覗いているのかもしれない。



「ストーブがある!」「コンロがある!」……何にもない、ただの山小屋だと思っていたのに、こんな装備が置いてあるなんてかなり大きな驚きでした。

僕の感覚として、山ん中というのはとにかく頭を使って、そこにある物をどうにか工夫して、何とか生命を維持させるという極限状態に近いものがあります。寒さに耐えながら使い捨てカイロを握りしめ、空腹をこらえながらモソモソ菓子パンをかじる世界なんです。

だから、石油ストーブがあつたら「ええ?そんなアホな!」と思うし、ガスコンロなんてものがあつたら「ウツソ!信じらんない!」なんて叫びそうなくらいです。それだけ僕の中では衝撃的な出来事だったんです。

僕はどうしても縄文杉に会いたくて、しかも、じっくり対面する時間がほしくて、一晚を山ん中で過ごすことにしました。「とまり木」の宿の中でも「どこの、この」といろいろ質問をして自分でも何とか過ごせそうだと判断した上で、しっかり登山カードだって記入しました。僕は山というものを絶対になめてはいけないと考えています。

ストーブがあるだなんて……山じゃない……なんてこともない……やっぱり……僕は軟弱者です……。



野菜炒めが中華鍋の中で踊っています。中華鍋の下ではプロパンガスが唸ります。お隣では石油ストーブの炎が揺らめき、ティーポットが湯気を上げます。

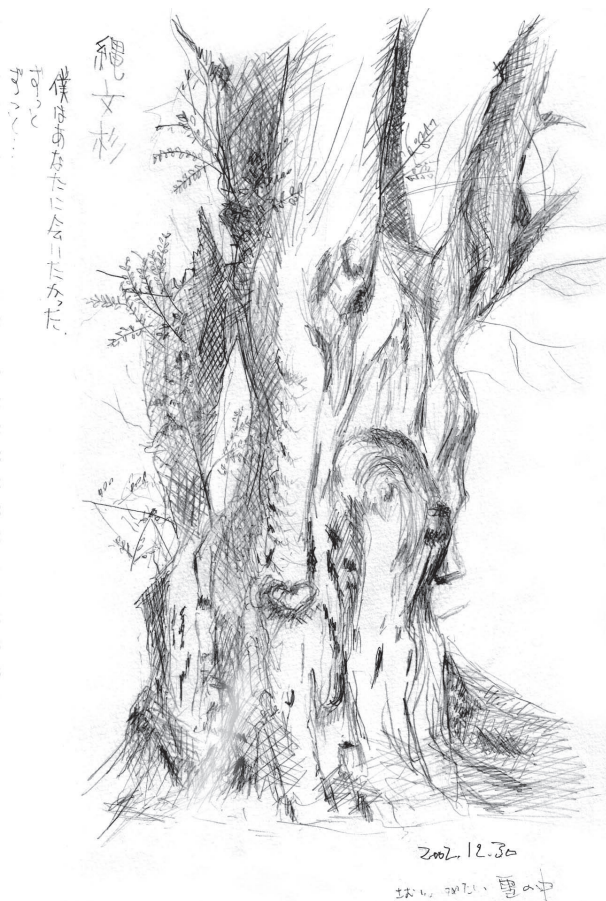
僕は小屋の上の段から顔をのぞかせ、料理人の動きを追っていました。野菜を切る、油が入る、具が入る、炎が包む、味がつく……手際よく、料理が作られていきました。それは、山の作業員さんの夕食です。ヒジヨ〜にのいしそうな光景でした。

何といっても山人中、しかも冬だから小屋を利用する人の数は多くありません。だから、作業員さんたちがプロパンガスを小屋に据え付け、石油ストーブを持ち込んでも、登山客の居場所は充分にあり、ゆとりがあるんです。作業員さんたちは自分たちの基地として山小屋を使い、生活していました。山での肉体労働だから、かなりきつい仕事だと思います。自分たちの帰る場所が快適だったら、そんなきつい仕事の後でもリラックスして過ごすことができるはず。大切な場所です。

僕は山小屋で、そのリラックスの心をほんの少しだけ分けてもらいました。ポットのお湯はコーヒーへと変わりカップに注がれ、注がれたコーヒーは僕の体の中でリラックスへと変わっていきました。

寒い夜、少しだけの温かさを心に感じ、寝袋へ入りました。

対
話



朝早く、モソモソと僕は山小屋から抜け出しました。寒い日に温かい寝袋から飛び出るのにどれだけのエネルギーが必要なのか……。冬のある日にこたつから体が動かないのと同じです。三十分くらいは弱い自分と格闘したと思います。

朝の縄文杉の姿はまた格別でした。それこそ自分以外の誰もいない静けさの中での対峙です。凍りつく手にスケッチブックを持ち、少しずつその姿を線で表していきます。

最初はフニャフニャした情けない線でした。それがだんだん形を見せ始めると、自分でもその世界へと入り込んでしまいます。空へと手を伸ばす枝を描きながら、一緒に自分が枝に上っていきます。肌のうねりを描きながら、その表面のざらつきを自分の手に感じます。至福のひとつです。

一瞬という時を自分に取り込む写真とは違う、ねっとり絡みつくような濃厚な時間を紙の上に写し取っていきます。自分の思い入れの深い所、さらりと印象に残す所……スケッチブックの中には僕だけの世界が広がっていきます。上手であるとか下手であるとか、そんなことは関係ありません。僕の思いがそこに留められていれば、僕の作品なんです。

とはいえ、雪の中の寒さは厳しいものがあり、一時間ほどで縄文杉との対話を終えることにしました。



「なあゝに、当たり前じゃん」……と、思わず言ってしまうような感覚に陥ります。山の中には「ゴロンゴロン」とどかい木が転がっていたり、バアーンと切り株が苔むしていたりします。それが、ものすごいスケールで存在しているんだけど、もし街の中にそんなモンがあつたら過激にびっくりしてしまうような代物なんです。

たとえば、ウィルソン株や縄文杉は確かに圧倒的な存在感があるし、特別な存在だと思っています。でも、ふと気がついたとき、そこらへんに何気なく立っている木も、やっぱりすごいんです。

そんなすごいヤツであろうとも、ボケるときには確実にボケておかなければいけないと思ってしまうのが悲しい性なんです。ね。大きな切り株に大きな穴が空いていれば、すでにそれはお風呂として目に映るんです。どれだけ寂しい山の中であろうとも、たとえ僕一人しかそこにいなくてもボケる必要があるんです。そして、セルフタイマーを駆使してでも記録に残さなければいけない、そんな義務があるんです。これは絶対なんです。もちろん、僕の中では……ということですが。

結果的に写真を見たとき「僕は何をしているんだろう」と後悔することもあります。顔が見えにくくなっていることだってあります。一抹の寂しさが心を吹き抜けることを感じる時です。



あれ、見たことがあるような気がする……そんな光景でした。映画のスクリーンから飛び出たような感じがします。こんな所から駆け下りていこうとしたら、はつきりいつてビビっちゃいます。白い狼の背中に仮面をつけた少女がくっついて、だあ〜とスピードよく、ここから走っていったら怖いんです。そんなモンが自分に近づいてきたらチビってしまうかもしれません。

いい景色でした。屋久島という特殊な島、そして世界遺産として登録された所の中で、意外と穴場のような場所だと聞いていました。ここがもしバンバンに晴れ渡っていたら、もう最高、言うことなし、というくらいの印象がありました。

残念ながら曇っていたから遠くの山までは見えなかったけど、もし、晴れていて頭に雪をかぶった山の姿がそこに見えたとしたら……ああ、まだ行って、見てみたいと思える場所です。

「腹八分目」という言葉があります。めいっぱい食べ尽くしたら、満足感を通りこして「もういい!」ということにもなります。食べ物のことだけじゃありません。僕はあちこちの場所に行つて未練タラタラで帰ってくる人が多いんです。ものすごく幸せなんだけど、さらに大きな喜びを求めているし、チャンスさえあればもっと楽しい時間を持てるはずだと思ひながら帰ってきます。この場所も……「腹八分目」……です。



やってしまいました。二度目です。テントの中が水々しくなっていました。テントの外も水々しくなっていました。僕のテントは水たまりの真ん中あたりに立っていたんです。

最初、テントを張る時に「パレットあるよ!」と声をかけられました。「ハイ?」……絵の具を使うわけじゃないし、何のこっちゃ……と首をかしげます。周りのテントを見て「ナルホド」と思いました。テントの下にスノコみたいなモンが敷いてあったからです。フォークリフトが荷物を持ち上げるとき、パレットと呼ばれる土台を使いますが、それが敷かれていました。

結局愚か者の僕は、張り始めてしまったテントをもう一度やり直すのが面倒で、そのまんま地面にテントを張ってしまいました。これが水々しいテントとなるきっかけだったんです。

屋久島の雨を甘く見ていました。キョーレツな雨が降り、水びたしです。夜、ゴソゴソとテントの中で水を吸い取り、吸い取りながら朝を待ちました。以前水没したときは河原にテントを張ったときで、その時は速攻でその場所を逃げ出しましたが、逃げ出すわけにもいかない一泊七百円のスペースです。ひたひたと下に迫る水の感触を味わいつつ、ただただ朝を待ちました。

幸いなことにその雨はずっと降り続くことなく、翌朝無事に僕は水没テントから解放されました。……雨はキライです。

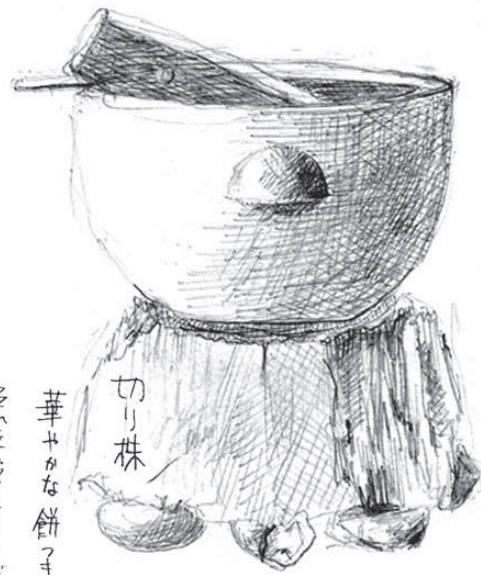
餅

杵と臼

と番を待つ

新年を迎えるのに

心が躍る



2002.12.31

杵と臼の絵

華やかな餅つき、
それをサマえるのが
土台になった
切り株
おち果てろ
まろろ
ぱらぱらと……

出番はまだか……と静かにその時を待ちます。はやる心を抑え、じっと待ちます。自分が活躍する瞬間は必ずやってくる、間違いないんです。だから、待ちます。

出番がきた……躍動感に心が騒ぎます。ズシン、ズシンという衝撃に、最高の喜びを感じて最大限の働きをします。ひとつの動きが多くの役割に変換されて、また、多くの働きへとつながっていくのです。

杵と臼……杵はほぼ間違いなく木でできています。臼は……木の場合と石の場合があります。人間として臼を使うとき、木の臼よりも石の臼の方が力も伝わりやすく楽です。軟弱者の僕としては、手伝いをするにもこの臼が石の物だったので非常にホッしました。杵を振り回す回数が全然違いますからね……。

何升の米がこの臼の中に投入されたでしょうか。そのたびごとにズシン、ズシンと杵が米を餅へと変えていきます。できた餅はもちろんおいしくいただけます。ものすごく幸せな時間がくることは明白で、モチベーションも高く持ち続けることができます。

華やかな所からふと視線を移した時、土台には切り株が構えていました。石臼の下でパラパラと身をバラけさせながら力を受け止め続けた切り株の役目を危うく見落とすところでした。



年末に餅つきをし、新年を迎える……当たり前のことのような感じがします。ところが、僕自身、正月に餅を食べるという習慣が薄れてしまっていました。というのも、正月に日本以外の所にいることが増えてしまったからです。ある年にはフィリピン、ある年にはメキシコ、またある年にはペルー……などなど、餅とは縁のない正月を迎えることが続いていました。

日本で迎える久しぶりの正月、でも、僕自身は旅先での正月だったので、餅のことなんぞすっかり忘れていました。あつとごつこい、そこは我が宿「とまり木」です。みんなで餅つきをするという年末行事が予定されていました。ああ、何という幸せでしょう。

その日、朝から餅つきのムードが漂っていました。夜半に雨が降ったので、玄関前にはブルーシートが張られ、着々と準備が進みます。台所ではもち米が蒸され、いい匂いが流れてきます。いよいよ餅つきのスタートです。

ぺったんぺったん……調子よく杵を振り下ろし続けるのは、かなりしんどい作業です。餅は、その弾力性と粘り気で杵をつかまえるから、どうしても繰り返していると疲れてしまうんです。いわば、人間と餅との戦いです。

……僕は餅のねばり強さを尊敬します。

あんこ、きな粉、大根おろし等、各種取り揃えて……



磯辺焼き、僕が一番好きな餅の食べ方です。味付けにもこだわります。砂糖醤油はダメです。甘いのと塩辛いのが一緒に餅にからまるなんて、僕としては信じられません。あの醤油の香りと海苔の香りが奏でるハーモニーを楽しむのが磯辺焼きを食べるとき最高の喜びなんです。

好きな餅の食べ方がもう一つあります。大根おろしです。これは、つきたての餅がないとおいしさを発揮できない、非常にハイレベルな味だということができると思います。ここにも醤油が必要です。醤油の種類に関しては大根の味があるので細かく定義づけをする必要はないかもしれませんが。醸造アルコールを使っていないものであれば特に問題ありません。

食べ方として、あんこもいいアイディアです。やわらかい餅にたっぷりあんこをつけて食べたら、食感と甘味の広がり口の中がホフホフンとしてしまいそうです。

きな粉も悪くはありません。栄養価も高いため、炭水化物に偏りがちな餅料理に少しでもバランスを持たせる働きもしていますね。ただ、粉っぽくておせてしまいそうな点が弱点になるかもしれません。ちよつと不利ですね。

ま、とにかく、たくさんの餅をつきまくり、たくさんの餅を食べまくり、「とまり木」で新年を迎える準備を整えました。



寂しさ……もう、終わりだ……という寂しさです。何かが終わってしまったり、終わりそうなとき、心の中に湧き上がってくるものは何でしょうか。……いやいや……むしろ、湧き上がってこないことも多いかなあ、とも思います。

さて、心の中に何も湧き上がってこないにしても、パターンは二つあるはずです。一つは、ホントにナア、ン二毛ないとき、そのまんまだけど、何も無いときです。思い出そうとして努力してみても、全くの無駄……ということもあります。

もう一つは、完全燃焼したとき、燃え尽きた充実感があるときです。何かをやり遂げたときというのは、気分も晴れ晴れ、あとには何にも残らない、という喜びさえあります。

夏休み最後の日、「ああ、終わりだあ」とか叫びながら、どっちのパターンに転がるか、ってな感じです。部活やら何やらでものすごく充実していた場合があるかと思えば、何をしていたんだ……と後悔する場合もある、という夏休み最後の日的人生模様は非常におもしろかったです。ま、僕の場合は、ほぼ毎年宿題に追われていて、いろいろ考える余裕なんてありませんでしたけどね……。

餅つきを終えた杵と臼は……、あれだけの餅をつくり上げたなら充分満足でしょう。約五時間以上フル稼働でした。

かき

いりりの炭火

その上に並ぶ

かき

かき

かき

じゅんじゅん

みんなの顔に

笑いがあふれる

いりりの炭火

その周りに並ぶ

笑顔
笑顔
笑顔



2002.12.31

美味

小さい頃、牡蠣フライが食べられませんでした。あの独特の香りが僕の前にものすごく高いハードルとなって立ちはだかっただんです。

ところがある日、アルバイト先の旅館で食事をしていた時のことです。冷えてしまっただけの、小さめのクリームコロッケが目飛び込んできました。パクッ……ん？……不思議な味のクリームコロッケ……あつ……それは牡蠣フライでした。……ということである日突然、僕は牡蠣フライを克服してしまっただんです。

そして、月日は流れ……屋久島のライダーハウス「とまり木」では牡蠣がふるまわれていました。以前に泊まったお客さんが送ってくれたそうです。素泊まり二千円コースでもない、 TENT泊七百円コースの僕が当然のような顔をして食べても良いのか……ま、食べていました。

人の心のぬくもりがあったからか、ものすごく「うまい」と感じてしまいました。炭火で焼かれた、その焼きたての牡蠣をみんなでパクパク食べました。人間というもの……いい加減なモンです。その場の雰囲気になまされているのかもしれない。でも、いいんです。うまいんだから……。ステキですね。人の心をおいしくいただけるんだから……。



場所は屋久島です。車のナンバーは滋賀です。不思議なことかもしれませんが。ま、いいじゃありませんか。そんなこともあります。神戸から移住してきたとしても、滋賀ナンバーです。

初日の出を見に行こうという話になりました。軟弱チャリダーの僕は、屋久島での移動手段が人力のチャリコンということに限界を感じつつあり、エンジン付きの乗り物にはかなり心が揺らいでいました。そして、朝早く起きた者の特権として、この「とまり木号」に乗るチャンスが訪れたんです。

宿の表側に止められている、この「とまり木号」にはかなりの興味がありました。もちろん何かものすごい装備がついているわけでもありません。ただの軽ワゴン車です。でも、いつも「とまり木」の前に控えているその姿は、少なからず存在感をアピールするオーラを発していました。

時々、オーナーのいさんとねえさんは、宿を客に任せて「とまり木号」にてどこかへ行ってしまみたいで。屋久島で走っているはずの「とまり木号」が本州を走っていて目を点にしたライダーもいると聞きました。そりゃ、びっくりです。でも、この「とまり木号」、見かけたら思わず声をかけたくするような雰囲気を持っています。そこに乗る人たちの心を運んでいるからでしょうか。魅力的な「とまり木号」でした。



夜な夜な伊勢エビを釣りに行く人たちがいました。うれしそうな笑顔の中に、なぜか、みんな使命感が満ちていました。

僕も釣りはきらいじゃありません。でも、どちらかというと海釣りよりも川釣りの方が好きなんです。自分で伊勢エビが釣れるということに多少の魅力も感じたけど、それよりや夜は寝たいと思ったし、寒い所でじっとしているのもイヤだなあ、と思いました。

さて、そんなこんなで、とにかく夜は更けてゆき、新しい年もやってきます。何があるわけでもないのに元旦というウキウキしてしまうのは日本人特有の習性かもしれません。クリスマスもいいけど、やっぱり正月、元旦ですよ……。

そして、「とまり木」の宿泊者一同に雑煮が振る舞われました。ベッド宿泊者優先で雑煮が分配されていきます。その雑煮の椀の中には、なんと伊勢エビさんがいらっしやいました。夜遅くに伊勢エビを釣りに出かけた人たちは、この、みんなが幸せになる雑煮を目標にしていたんです。ありがたいことです。何の義務もありません。ただ「とまり木」に泊まった、というだけです。その宿泊者が、みんなが喜べるような伊勢エビをもたらせてくれたんです。

伊勢エビ万歳！

正月

元旦に雑煮

当たり前のことかもしれない

でも

伊勢えびの入った雑煮
僕にとっては

ヒゲ一本だけだったけど

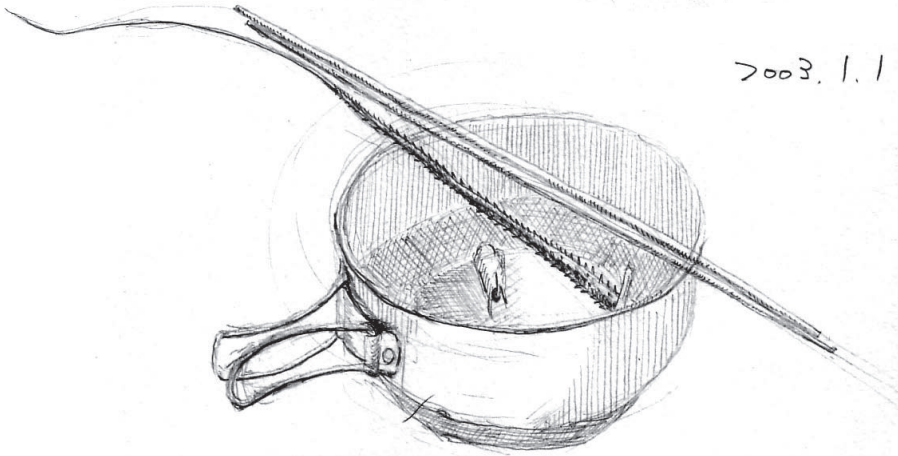
ものすごくおいしかった

ものすごくおいしかった

当たり前のことかもしれない
でも

元旦に雑煮

2003. 1. 1



ヒゲが飛び出ていました。ヒゲだけでも伊勢エビは伊勢エビです。最初はうれしいような悲しいような妙な感覚でした。

テント宿泊者である僕は、自分の食器を提出し、そこに雑煮を入れてもらいました。だから、アルミの食器にヒゲが生えているわけです。変な姿です。そして、お正月用の「寿」の割り箸をいただきました。箸袋には、料理長であるねえさんが名前まで書いてくれました。僕専用の割り箸です。

ものすごくおいしい雑煮でした。エビの姿として入っていたのはヒゲだけでしたが、紛れもなく伊勢エビの雑煮でした。エビとカキとかカチカチしたヤツらのすごさだと思います。あのだしの効き方は半端じゃありません。ヒゲだけの雑煮の中に伊勢エビの姿が想像できるほどの存在感があったと思います。

姿の见えない隠し味には、他にも心というものが感じられました。夜中にヤツらを釣り上げてくれた人たちの心、料理してくれたねえさんの心、楽しく温かい雰囲気をつくり出していた宿泊者の心……、すべては「とまり木」という宿が産み出した心です。でも愚かな僕は、どうしても姿形にとらわれてしまいます。

僕はまだ本当の中身を見極められない、ふし穴の眼しか持っていない。姿のないエキス……だしを見る眼を持ち、あわよくば、自分がそれだけのだしになれたら……と思います。

わん！



犬派？猫派？……人の好みはだいたいどちらかに分かれるみたいです。ちなみに僕はどちらかというと犬派だと自分では思っています。家で飼ったことがないのでよく分かりませんが、犬の方が僕と仲良くしてくれることが多いような気がします。

変な画像が僕のところに残っています。僕のイメージの中では犬です。スチロールの容器をくわえた部分、それが鼻先だし、微妙に曲げられた手首が足先なんです。「とまり木」で仲良くなった人がケータイ電話にくっついてるカメラで撮って送ってくれたものなんです。画像を見る限り「犬」ではなく単に「変な人」です。所詮僕はただの「変な人」なんじゃないか……。

くわえているスチロール容器……なんでそんなモンを僕が持っているんでしょうか。決して「犬」になるための常備品ではありません。もともとは無料のおしるこが入っていたんです。

僕が「とまり木」でボクッとしていると、ただでおしるこをもらえるという情報が耳に飛び込んできました。でも、寒いしめんどくさいなあ、と思っていました。んで、ウダウダしていたら「行く」という人がいて、情性についていった……それだけのことなんです。そしたら意外においしくて、ハイになってしまい、「犬」になってしまったのだ……という顛末です。

中身はやっぱり「変な人」というだけかもしれません……。



抽選結果が聞けなかった...

買い物をしました。「とまり木」にほど近い、スーパーマーケットです。テント生活の身なので自分のメシは自分でどうにかしなければイカンのです。といっても、このチャリダー生活の中でメシ作りに大きな力を注ごうという気は全くなかったので、食パンやインスタントラーメンを買ってきて、何となく燃料として消化、吸収するという感じでした。

新年、やっぱり手を加えずに食べられそうな物を買って店を出ようとする、何やら一枚の紙切れが手渡されました。数字が書いてあります。何かもらえるかもしれませんが。元来貧乏性の僕は、タダで何かを手に入れられそうなチャンスが訪れるとすぐうれしくなってしまう。実際にそんなチャンスの中から幸運がやってきたという経験はありません。せいぜいお年玉つき年賀はがきで「年賀切手」が当たったくらいのモンです。

抽選などのすごさは、その期待感のすごさだと思います。全然たいしたモンじゃなかったとしても、「大当たり〜！」と言われたとしたら必要以上に喜んでしまいます。人間でも何か期待できそうな人だと、ちよつと話してみようかな……なんて考えちゃったりします。期待はずれのこともありますけど……。

さて、この紙切れ……、結果を知ることなく、ホントの紙切れのまま僕の手元に残っています……。

亀をいじめないで！



「とまり木」という宿にはいろんなモノがありました。このとき登場したのが、亀の甲羅です。……と、いつても、発泡スチロールの甲羅です。かなり精巧にできていて、フジツボなんかがつついていました。生み出した人の喜びに溢れています。

屋久島には、毎年、亀が産卵のためにやってくるといいます。そして、「とまり木」の中ではスチロール甲羅をつけて亀に同化するという現象も起きていたようです。産卵の時期の海岸には、本物の亀の中でスチロール亀が涙を流しているはずですよ。

こんなおもしろいモノを見て、放っておくわけがありません。みんなでワイワイいいながら亀大会です。僕は浦島太郎が助けてくれるのを待ちながら、しばらく意地悪な人間たちに遊ばれていました。

亀はいじめられていたんでしょうか。頭を引っ込め、足を引っ込め、体を守ることができる亀です。もしかしたら、甲羅の中で居眠りをするくらい余裕だった、ってことはないでしょうか。「兎と亀」にしたって、最後は亀が勝ちます。辛抱強く着実に歩みを進める亀は、ものすごく強い生き物なのかもしれません。兎との競走で、もし亀がリードしていたとしても、亀は全力で前進していたような気がします。

全力疾走の亀になりたいと思います。



「能ある鷹は爪を隠す」ということわざについて考えました。

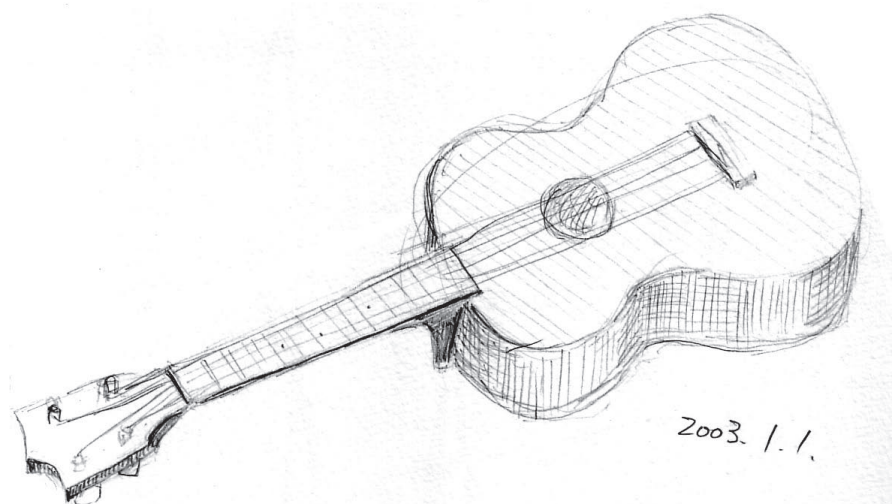
この日「とまり木」の中では入れ替わり立ち替わり亀が登場していました。いじめられる亀もいたし、女の亀もいたし……、そしてヘルメットをかぶって平然とお茶を飲む亀もいました。

当たり前のようにお茶を飲む亀の正体は、作家です。自称「売れない作家」さんです。名前を光井貞二さんといいます。この亀は……失礼……、この人は『旅ノカケラ』という本を出していて、ライダーとしての自分自身の体験と心の動きを文章に著していました。旅についての本ですが、そこに行っていない人間が読んでも、まるで自分がそこで景色を見て、風を感じているような錯覚に陥るような世界が待っています。なんて、美しい感性を持った人なんだろうと思わされます。

そんなすごい人がなぜか亀になって、当たり前のようにお茶を飲んでいたわけです。人は見かけによらないとも感じました。すごい人がすごい姿をしているのは、まあ、普通です。すごい人がそのすごさを人に感じさせないというのは、かなり超越したモノを持っている証拠なのかもしれません。全然すごいくない僕は、ヘラヘラと大喜びをしながら本を売ってもらい、サインまでしてもらって、凡人つぶりをアピールしてきました。

爪が退化する前に、才能を高めたいと思います。

ウクレレ
まさか
屋久島で
君に出会えるとは
思っていなかったよ…
相変わらず
小柄で
かわいらしい姿だね
また
よろしく



歌声が聞こえます。いろんな歌が流れてきます。美しくて、心地よくて、癒される合唱のような歌があります。強くて、激しくて、心が燃える応援歌のような歌があります。どんな歌も、それを伝える人の心がこもっているとき、人は何かを感じることが出来ます。

ウクレレの音は、音量としては小さなモンです。僕は以前、大勢の人と一緒に歌おうと思ってウクレレを弾いたものの、その音が聞こえずに、アカペラと同じ状態になってしまったことがあります。また、ある機会には、人前で歌うことができました。その時、感動的な歌を披露しようと思っていたのに、やっぱり音のインパクトが弱く、結局「あゝあああ、やんなっちゃった……」と受けねらいの芸人になっていました。

でも、雰囲気のある屋久島の夜、なんとなくしみりしながら旅人が集い、そこにウクレレの音がポロロン♪と流れたら、すごくいい雰囲気でした。僕にはできない芸当だと感じてしまいました。

楽器は使えます。でも、それを使う人によって、その音色はものすごく変わります。伝わる思いも変わります。僕も、お笑いで終わるだけではなく、それにプラスしてクラシックの心を感じさせるような演奏ができるように修行します。



チャリダーのスピードはホントにゆっくりゆっくり、時速二十キロの世界です。しかも、坂道だったり、自分の体力次第では時速五十キロにまで落ちることもあります。これは、単に僕が軟弱者だというだけの話かもしれませんが、それでも、チャリンコの速さというのは独特なモノです。

時としてチャリダーに、また時としてライダーになる僕ですが、それぞれの速さにももしろみを感じます。どちらも同じ二輪車なので、気を抜いて走っていたらコケることもあります。二輪車とは、コケるからこそおもしろい乗り物なんです。

ところが、この時は二輪車に乗っていないながら、別の感覚を味わっていました。ボーっとしていても、コケることはないだろうと思います。でも、転がり落ちることはあるかもしれません。人の後ろに乗るなんて、普段の僕ではありえない体験です。

慣れるまではグクシヤクしていました。それが、だんだんにリズムが合ってきて、心地良くなっていきました。グラウンドを駆け抜けるムカデ競走のような、スピードとリズム感の融合です。ギアチェンジの軽い衝撃、ブレーキングの瞬間、コーナーリングの傾き、そして、立ち上がりのアクセル……。

人の運転でありながら、自分がエンジンの鼓動を感じて駆け抜けるのも、いいモンです。



「アナタハ神ヲシンジマスか？」と聞かれたら、どう答えるだろうと考えます。答える相手によって僕の口から出てくる言葉は違うと思います。

そこら辺の日本人編……「信じません」と答えるでしょう。そこら辺の日本人で、真剣にカミサマを信じている人はあまり多くはありません。だから、その人たちにはどんな答え方をしても、そんなに深く考えることはないと思われます。だから、とりあえず無関心の人になります。

外国人編……「仏教徒です」と答えるでしょう。外国の人たちは何かの宗教を信じている場合が多いようです。だから、僕も日本人としてはポピュラーな仏教の信者になります。宗派は浄土真宗です。合理的な考え方をすると思うので、僕は浄土真宗のファンになっています。

駅前で声をかけてくる人編……「」と無視するでしょう。だいたい急いでいるときに限って声をかけてくるし、反応するとフケの分かん会話をしななければいけなくなることが多いからです。「幸せですか?」「はい、幸せです」というパターンもあります。できるだけ素早く歩き抜けます。

さて、屋久島では「とまり木」の泊まり客と一緒に神道を信じる人になり、初詣へ行ってきました。



正月を過ぎると遊んでばかりもいられません。屋久島を離れて仕事へ戻らなければいけなくなります。特に、フェリーは欠航になる危険性がかなりあるので、ゆとりをもって本土へもどる必要があります。短期旅行者の切なさです。切ない旅行者が、一人また一人と屋久島を後にしていきます。その仲間を送り出す心がありました。みんなで見送りです。

屋久島の牧場には象がいると信じながら、見られなかった切ない人たちが帰っていきました。残った集団で「ゾウ」の人工字を作り、「パオーン！」というあいさつで送り出しました。周りで見ている人たちの目には、かなり怪しい集団と思われたはずですが、「とまり木」の魂は燃えていました。

それまで、僕はチャリダーとして宿泊費ゼロ記録を保っていました。だから、宿の人たちと一緒に過ごすという経験をしたことがありません。橋の下にテントを張るのは僕ぐらいのモンでしたから……。 「とまり木」に泊まり、初めて他の仲間と過ごすチャリダー経験をしました。

仲間っていいモンです。同じようなことを考えて旅をしているという共通点があります。同じような場所を訪れているという共通点があります。全国各地に散らばっていても、「第二の我が家が屋久島にある」という共通点を持った仲間です。



「マウンドには神様が宿る」と野球部の人たちは言います。それほどまでにグラウンドを大切にしている人たちなんです。雨上がりの朝、学校のグラウンドに何人も野球部員たちがはいつくばっている姿を見たことがあります。彼らの手にはスポンジが握られています。そして、吸い取られた泥水がバケツの中に絞られています。ここまで自分たちの場所を大切にすること、正直、びっくりし、感動しました。

正月一日、屋久島では同じような光景が広がっていました。「とまり木」宿泊者たちです。みんなで泥水と格闘していました。恐るべし「とまり木」です。

それは新年ソフトボール大会を行うための準備だったんですが、そもそも宿の客どうしてそんなことをする集団つてのがすごいと思いました。その真剣さも半端じゃありませんでした。

何かに燃える、という経験は人間を豊かにするように思います。運動会でのムカデ競走に燃える、文化発表会の合唱に燃える……、それで何が残るのかって、記録として残るモノはたいしたモノじゃないかもしれません。残るのは記憶であり、心です。何かに向かってバカになり、燃えること、僕は大好きです。

……でも、誰もいない留守中に、「とまり木」を訪ねた客はいなかったんでしょうか……。



「とまり木」の「とまり木」による「とまり木」のための大会……神聖なるソフトボール大会、プレイボールです。夕食のバイキング料金のうち千円分を払うか払わぬかという大きな分かれ道になるので、勝敗に関しては真剣勝負です。

が、僕自身はエエ加減なモンで、「まあ、楽しけりゃいいじゃない……」という発想でした。我がチーム全体としても何となくエエ加減な雰囲気か漂っていました。守備の人数も妙に多かつたし、打順なんかもだいたいこんなモンという順番で回ってきました。

んで、回も終盤にさしかかったとき、どうやら僕の打順が回ってきたみたいでした。といっても、僕はエエ加減モードでやっているから、呼ばれて「ああ、ハイハイ」ってな感じでバッターボックスに入りました。そしたら、こともあろうに逆転のホームランを放ってしまったのです。ありゃりゃ……。

後から、何か都合のいいところで都合のいいように打順を組み替えていたのか……という疑惑も持ち上がりましたが、そんなに深く考えてはいなかったと思うんですけどね……。ちよつとだけ腑に落ちない部分があつて、心から喜べない感じになってしまいました。

遊びでも、しっかり全力でやらなきゃダメなんですね……。



年の初めには曇っていて見られなかった日の出が美しく輝きました。言ってみれば新年の再スタートです。真面目にチャリンコに乗り、「さあ、走るぜっ」という朝に美しい日の出を見られたのは、うれしさ倍増です。

正月元旦を迎えたというのは、まあ一つの祭りです。とすると、その翌日は祭りの後の余韻を残しながら始まる、第二回戦です。パッと見たら別に何の違いがあるわけでもありません。普通の一日の始まりに思えてしまいます。特にその前の日の価値を感じられない人から見たら、何じゃそりゃ、とツツコミを入れたいくなるほどにメチャクチャ普通のことです。

そう、実際は普通の日の始まりなんです。でも、メチャクチャ普通の日なんです。普通は普通でも、見る人が見たら全然違って見える日、それが祭りの翌日だと僕は思うんです。メチャクチャ普通、つてもものすごく変な日本語だけど、ものすごく深い意味を感じる奇妙な言葉だと感じます。

祭りを大切にし、そこで素敵な思いをした人には次の日のスタートは新たな祭りへのスタートになります。次の祭りは七夕祭りでしょうか、収穫祭でしょうか。そこへ向けてもうスタートしているんです。

再スタートの日の出を見ながら、チャリダー復活でした。

酔っぱらいとしては大好きな川でしょう……



屋久島は周囲約百キロの島です。チャリンコで一周するには、まあお手頃な距離です。軟弱者の僕にとつて、坂のアップダウンがづらい部分もありますが、一応チャリダーのつもりですから、ちゃんと走るんです。

走り始めて何キロも行かないうちに、また、目に飛び込んでくるモノがありました。バス停です。その名も「焼酎川」です。コケそうでした。地名とは思えないモノです。

僕は元来お酒を飲めるタイプではありません。うちの家系なんです。仕方がないんです。学生の時など、無理矢理飲まされて、毎回イヤな思いをしてきました。飲み始めてしばらくすると気持ち悪くなってきた、頭が痛くなってきた、現在進行形の二日酔い状態って感じです。

さて、いろんな地名がありますが、日本国内には普通の読み方ではない地名がたくさんあります。そりゃ、読めんだろ……と標識に向かってツッコミをいれることもよくあります。それぞれの土地に根付いた文化がその地名の中に生きているんだと感じます。南北に細長い日本列島なので、北と南とではその様相もかなり違ったりします。

「焼酎川」。この近辺で、昔、何があったのか……、酒が飲めない僕には、想像を絶する光景があったのかもしれない。



天ぷらはおいしいですよ。僕は抹茶塩なんかで食べるのが好きです。素材の味を舌で感じます。

「とまり木」でテント生活をしていたら、天ぷらなんて食べる機会はまずありません。だから、僕自身には全く関係ない話なんです。チャリンコで屋久島を走っていたら発見してしまいました。……「何を？」って油の回収箱です。

天ぷらなんぞを作ったときには、使った後の油をどうするかで悩むこともあります。世の中には油を固めるためのモノも販売されています。宣伝を見ると、ツルンっていう姿でゴミになる様子が分かって、最初見たときには感動しました。でも、お金をかけてまでそれを買う気が起きたことはありません。

それが、ゴミと一緒に収集所に捨てられたら、お金もかからないし、お手軽です。さすがは屋久島、世界遺産の島です。環境を守ろうという意識の高さが現れていました。

環境にやさしくできる心があったら、きっと人にもやさしくできると思います。僕はひとつなんです。みんなみんな宇宙が燃えていた頃からつながる仲間なんですよ。それぞれの星がキラキラ輝いているように、僕は輝いています。森も海も川も、猿も鹿も人間も……みんな幸せになれるはずです。

……もちろん、天ぷらを食べたときにも、幸せになります。



「酒は百薬の長」と言うこともあります。お酒も適度に飲むのであれば体に良いこともあるわけです。……じゃ、同じように二十歳までは禁止されているたばこはどうでしょう。こちらは「百害あつて一利無し」ってパターンになると思います。たばこにはニコチンやらタールやら、ドロドロしたイメージのものが入っています。体の中にドロドロネチャネチャしたものが注入されていくなんて、ちよつと想像したくありません。

そんなことは、どーでもいいんです。ここで問題なのは難しい読み方をする看板があつたということなんです。「たばこは島内で……そこまでは読めました。その先です。「買*ましよう」……「えっ?」……「買い(?)ましよう」……。ダメだこりゃあ、と脱力してしまいました。チャリンコのスピードがおちたのは言うまでもありません。

僕はこの手のネタに弱いんです。いわゆる親父ギャグというやつです。周りからは「寒う〜」と言われ、「うう〜」と反応しながら、実は心の中で喜んでいる人間です。こんなセンス、大切だと思うんですが、なかなか認めてもらえないこともあります。なんでだろう……。

心の広さです。自分ではそう思うことにしています。きっと他の人のしよ〜もないギャグにも笑顔を向けられるはずです。



修行者が滝壺で水しぶきを上げているマンガなどがよくあります。僕は実際に見たことはありません。子どもの時、小さな川の流れて「修行中〜!」とか言っていて遊んだことはあります。大体みんなあるんじゃないでしょうか。僕は特別ですか。

滝壺に行くまでに自分の体が落っこちてしまいそうな滝がありました。大川の滝というところです。「オオコノタキ」と読みます。なんでやねん……とツツコミを入れても、その読み方は変わりません。「オオコノタキ」なんです。

屋久島を半周くらいした辺りだったんでしょうか、この滝が現れたんです。本当だったら、せめて水をさわれる場所にまで下りていきたくったんだけど、軟弱チャリダーの僕はこのときすでに体力の無さを感じていました。とてもそこまで行く気力もありませんでした。

それと実はもう一つ、理由がありました。その日に発つフェリーの時間が迫っていたんです。もちろん僕が乗るわけじゃありません。「とまり木」の仲間の一人がその便で島を出ると聞いていたんです。それじゃ見送りに行かにはイカンと思っていました。だから、愛車「山風号」と大川の滝を写真に収め、そそくさとその場をあとにしました。寒かったから、滝壺へ行っても面白くなかったかもしれませんけどね……。

猿よ、たくましく生きてくれ！



ウッキ〜……、目の前に猿が登場したら自分はどうするでしょう。たとえば、奈良公園の鹿のように穏やかにお辞儀なんてしていたら、「苦しいやうない、近う寄れ」と考えてしまうかもしれません。あるいは、斜め前くらいからおずおずと現れて恥ずかしそうに手なんか握ってきたら、「あ……、可愛い」なんて思ってしまうかもしれません。

もし、背後から忍び寄るようになってきて、バババツと自分の持ち物をはぎ取っていったりしたら……、頭にくると思います。その持ち物をじっくり観察して必要かどうか、見極めていたりなどしたら、もう、耐えられないでしょう。

世の中にはいろんな猿たちがいます。人間に被害を与える猿も増えているようです。彼らは人間からエサをもらったことがあり、「おお、ーンゲンというのは何かをくれる生き物なのだ」と思っているといえます。だから、物を奪ってもそれが当たり前という感覚みたいです。

自然の中で生きている猿たちにエサをあげてはいけなかったんです。どんなにかわいらしい猿だったとしても、それはダメなことだったんです。自分たちだけで生きる力を奪うことだったんです。

人間も同じ、甘やかしてはいけないこともあるんです……。



「バカ」なんて言葉をつかつてはいけません！……とはいっても、馬鹿は馬鹿だと思ってしまう。だって、真冬の海で、しかも、真っ裸で泳ぐ人たちがいたら……、そりゃあ、「バカ」って言いたくもありません。

特に学生時代、いろんな馬鹿なことをする人々がいます。何かのパーティなんかで顔の半分を赤と青に色つけをし、髪の毛の半分を金と銀で染め分けて、しかも、それを半分ずつ立たせたり、寝かせたり……メチャクチャです。原付でぶっ飛ばしていたら、そこに坂があつて、坂がジャンプ台になつて空を飛び、拳げ句の果てに血だらけになつてしまつたり……信じられません。

いろんな種類の馬鹿がいます。何も考えられないでいつの間にか馬鹿になっているのは、ちょっと気の毒な馬鹿です。何か思いがあつて、それが発散されたときに変身する馬鹿は、ちょっとカッコイイ馬鹿です。実は、このカッコイイ馬鹿つてのは人生の中でものすごく大切な変身なんじゃないかと思えます。人に迷惑をかける範囲で、目一杯の馬鹿をやっていたら、その後の人生にとって肥料になるからです。経験こそ人の生き方を大きく左右するものじゃないでしょうか。迷惑をかけない馬鹿には大いになつてみたいものです。

あ……、前述、馬鹿の例は僕じゃありません。



堅く口を結ぶ、嗚呼と雄叫びをあげる……、両方とも心の中が滲み出てくる姿だと思います。僕自身は寡黙な人間なので、どちらかというとなげのうちに思いを秘めるタイプです。ペラペラとおしゃべりをするのが苦手なんです。……いや、ホント。

感情が対比した姿が見られると、人の心の起伏って不思議だなあ、と思います。それを如実に表現しているのが仁王像じゃないかと感じました。阿像と、吽像がそれぞれ人間の心をむき出しにして立ちまわっているんです。阿像の由来が人間の感情表現なのか違うのか、学術的には知りません。でも、そんなふうに考えたら納得できます。

全国各地に仁王像が立っています。大きなモノから小さなモノまで、いろいろあります。屋久島の仁王像はズンズンとびくびくしていました。石造りで雨ざらしだから少しづつ小柄になっていったんだと思います。顔の感じもはっきり見ることができません。歴史を歩んできた仁王像です。小さいけど硬い体をその場に据えて、数々の出来事を見てきた姿だったんです。この先も、体をすり減らしながら人々の営みを見続けるでしょう。そして、小さな小さな砂つぶになって、人々から忘れ去られることもあるでしょう。それでも、やっぱりその場に残るでしょう。

土地の守り神……、メチャクチャカッコいいです。

三岳三兄弟

みんなに囲まれ長男

長男

一人静かに三男

三男

間にはさまれ次男

次男

三岳三兄弟

三岳！



飲む人が
このおかし
な時間
潤滑油
は
かたがた

2003.1.3

三岳三兄弟

「二日酔い」という言葉があります。僕は一度もそれを体験したことがありません。聞くところによると、頭は痛いし吐き気はするし、大変な状態になるみたいです。怖いですねえ……。

でも、よくよく聞いてみたら、その状態って、僕がお酒を飲んでいる時に起きている現象と同じことなんです。最初のうちは、何だかよく分からないけどメチャクチャ気分がうきうきします。それが、だんだん気持ち悪くなってきて、グログロすることになります。さらに、頭がガンガン痛くなって耐え難くなってきます。つまり、僕はお酒を飲んでいる最中から現在進行形の状態で二日酔いになっているんですね……。

お酒を飲めないというのは、幸か不幸かどっちなんだろうと考えます。飲めなくてくやしいと思った経験はたくさんあります。暑い夏の日ビールをぐわあ〜と飲んで「うめえ！」なんて言っている姿なんか、ものすごくうらやましく思います。

お酒は、だいたいどこの土地にもあります。その場所その場所によっておいしいお酒があります。それを旅先の現地で飲むことつてのが、ものすごくおいしいみたいです。その場所の雰囲気を楽しみ干すということなのかもしれません。

でも、でれんでれんの酔っぱらいの姿はカッコよくありませんよね……。下戸でよかった、と思う瞬間です。

確かにうまかった……ような気がする



各地の名物つてのがあります。浜松だったら鰻だし、焼津だったら鯉でしょう。それぞれ「うなぎパイ」というものがあり、「かつおサブレ」というものが売り出されています。

じゃ、屋久島の名物っていったら……、縄文杉？ヤクザル？海中温泉？……なかなか食べられそうにありません。どんな名物があるでしょう。僕はだいたい自炊していたから、よけいに名物というものがよく分かりません。

でも、自炊していたからこそ分かるものがあります。それは水です。地味々な感じもしますが、これはすべての原点になるようにも思います。どんな料理をしても、水つてのはどこかで影響しています。もちろん、僕が料理の中でどんな水を使っているのか分かるということじゃありません。そこまで僕の舌は肥えていません。でも、何かとおいしく感じました。チャリンコに乗って疲れていただけかもしれませんけど……。

屋久島を離れるとき、缶の紅茶を買いました。縄文水と銘打ってありました。缶に入った紅茶だから、ひっくり返るほどにおいしいモンとは違います。所詮は缶の紅茶です。名前に騙されていたんでしょつか、スッキリとおいしく感じられました。

騙されてもいいです……屋久島に騙されたなら……。

あ、ホントは「首折れサバ」などの屋久島名物もあります。

壁に耳あり、障子に目あり……



写真、写真、またまた写真……、こんな写真だらけの部屋でくつろげるのでしょうか。はい、ここは「くつろぎの間」です。「とまり木」に泊まった人たちの写真がベタベタと貼り付けられています。

といっても、創立からずっと、全部の人の姿を張り付けていくスペースもなく、アルバムの中に収められている人たちもたくさんいます。これからそちの人数がどんどん増えていくはずだし、僕もその中に入り込むことになるんですね。

同じ場所で同じ時間を過ごした人というのは特別なものです。それが長かったら、やっぱりそれだけの出来事があり、思い出があります。その時はホントにつまらないことだと思えても、後から考えたらものすごく価値のあることもあります。時間というのは何ものにも替えられない、とんでもないヤツです。

でも、それが長いか短いか、関係ないこともあります。旅に出て、同じ所に泊まったというのが運のつき、僕と出会ってしまう人たちがいるんです……。ほんの何日間かの付き合いかもしれないけど、ものすごく中身の濃い時間が流れているのが旅の時間というものです。なかなか忘れ去ることはできません。

幸か不幸か僕に出会ってしまった人たち……、僕にとってはいつまでも大切な、宝物です。

請 求 書 2003年1月3日 No. _____

清水 啓介 様

時間を作って又
ゆくり遊びに帰って下さい。

下記のとおり御請求申し上げます

今年から宜しく!

税込合計金額		税率		消費税額等	
45610.-		%			
月日	品 名	数量	単 価	金 額 (税抜・税込)	摘要
12/26	1 テント			700	
27	2 "			700	万代亭 中宿を
	3 おにぎり			210	
28	4 テント			700	白谷雲水峽
29	5 "			700	白谷雲水峽
30	6 テント			700	下山
31	7 "			700	下山
1/1	8 "			700	新島 島一泊
2	9 "			700	新島 島一泊
3	10 "			700	新島 島一泊
	11				
	12				
合 計				5610	

コナミ ウ-322

記録に込められた思い

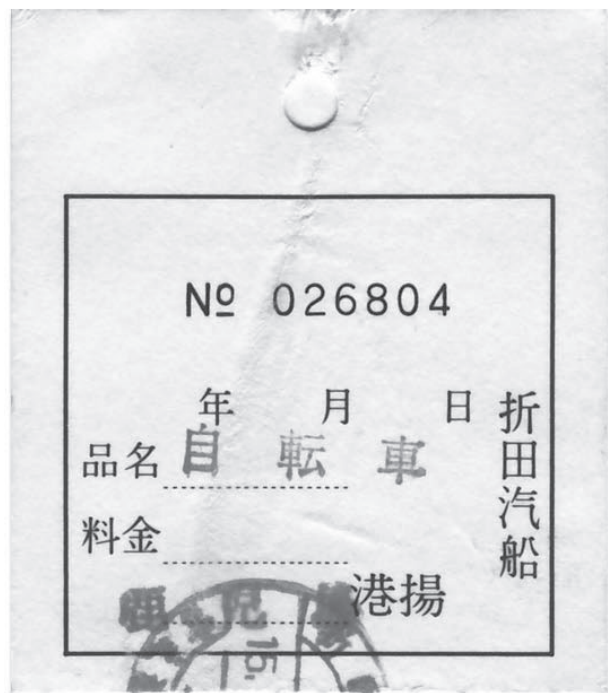
八泊の屋久島での記録です。最後の朝、宿泊料をねえさんに支払いました。当たり前のことです。そして、お釣りとともに支払いの明細をくれました。それも当たり前のことです。ところが当たり前じゃないところがありました。それは、その中に僕の行動する姿がチラチラと見えただけです。

例えば、十二月二十九日は白谷雲水峽から縄文杉へ行っていたことが分かります。しかも、その時は「とまり木」にテントを張りっぱなしにしていたので、二百円割引になっています。

宿の記録をこんな丁寧に書いてもらったのは初めてです。かなりうれしくなっていました。毎日の様子をきめ細やかに見ていてくれたんですね。そして、心配してくれていたんですね。ありがたいことです。

その上、そこにはコメントまでつけてくれます。通信簿をもらったような感じです。久しぶりに味わう感覚でした。「とまり木」でもらった通信簿……そこに懐かしさと温かな心を感じました。

一泊七百円で本当に良かったのかなあ……と考えてしまいます。餅つきをさせてもらい、雑煮を食わせてもらい、いろいろお世話になりっぱなしで、一泊七百円……。いや、金額じゃないですよ、感謝の気持ちはたくさん払ってきましたから……。



900円も、トビの
半額以下である！

そのタイヤで屋久島一周も果たしたので、山風号は思い残すことなくフェリーに乗ることができたと思います。行きの高速船では二千円も払わなければ乗られなかったのに、帰りのフェリーへは九百円で乗船です。しかも、分解して輸送するんじゃなくてチャリンコの姿のままです。ヤツは幸せ者です。

基本的に、僕、フェリー大好きなんです。のんびりできる空間だと思います。のんびりしてもいいという雰囲気の流れているんです。僕が乗るのは庶民のスペースである二等船室なので、そのほとんどの場合は大部屋にみんなしてゴロンゴロンしている風景が広がっています。あのドラドラ感はもうたまりません。風呂だつて入れることもあります。汚れまわったチャリダーでも、心おきなく船旅を楽しむことができます。

ライダーとして乗船した場合、僕はだいたいヘルメットを自分で持ち歩きます。だから、どう考えても「コイツハライダーデアル」ということがはつきり分かります。とすると、他のライダーの目を意識することになり、どこかで話しかけられるかドキドキします。

チャリダーとして乗船した場合……何となくの雰囲気で一般大衆との違いを嗅ぎ分けます……。チャリダーもドキドキです。何にしてもフェリーは僕ら旅人の憩いの場です。



「また会おう、相棒！」ってな感じです。フェリーに乗っている間、愛車「山風号」は底部船室で待っています。しばらくの別れです。屋久島の中ではそんなに大活躍というほど乗り回したわけじゃないけど、それでも、相棒と離れた場所にいと少し寂しさを感じます。

ペダルを一回踏み出すと、チャリンコはスイ〜っと僕らの一歩よりも長い距離を難なく進んでいきます。下り坂なんて、僕らがペダルを回さなくたってスイスイ前へ進んでくれます。感謝、感激、雨あられです。逆に、上り坂のときは全然言うことを聞いてくれないから、僕らがチャリンコを押してあげます。お互いさま……、ホント相棒です。

底部船室で、相棒はロープで固定されます。当たり前のことなんだけど、これもやっぱり少しつらいかもしれません。ロープでしばられて「うれしい」と思っていたら、変な世界へと突入してしまいそうです。薄暗い船底の片隅で身動きがとれなくなる相棒の姿を見て、いよいよ旅が終わってしまうことを思い知らされたような気がしました。

旅先で走り回ってこそ、僕の相棒です。山の中、風のように突き進む「山風号」です。山風は時として嵐にもなります。次に旋風を起こすまで、つかの間の休息です。



さようなら……

あんまり好きじゃない言葉……「さようなら」……。いくら明るくしていても、どこか悲しさがかくれているような言葉に感じます。お別れの言葉です。

「とまり木」の集団は、やっぱり不思議なモノでした。大雨の中、港までわざわざ見送りに来る同宿者がいるなんて、ちよっと信じられないくらいです。雨に濡れながら、それでも大きな声で叫び、手を振る姿は眼に焼き付きます。

一期一会……出会いがあればかならず別れというものがあります。だからこそ、出会いを大切にしなければいけないんだと思います。□にしてしまえば簡単なことです。でも、それを心から感じ、行動として表すことは難しいことです。その喜びや悲しみを、どうやって表現すればいいんでしょう……。

出会いや別れの時、その気持ちをすぐに、しかも、上手に相手に伝える手段を、僕は密かに身につけています。あいさつです。いろんなあいさつがありますが、そこには今まで言葉を使ってきた人々の知恵がたくさん詰まっています。あいさつには自分の気持ちに加えて、その人々の気持ちも織りなされているのかもしれない。

あんまり好きじゃない言葉……「さようなら」……。だけど、次へのスタートのために……さようなら……。



帰りたくない……。でも、帰らねりゃいけない……。未練たらたらで屋久島をあとにしました。周りにもそんな空気が充満していました。非現実の世界から現実の世界へと連れ戻されるという事実……。冬の朝に暖まったふとんを引きはがされる思いです。

正月休みを屋久島で過ごした一般大衆が、一斉に一般社会へと復帰していくので、フェリーの中には人が渦巻いていました。一緒にフェリーに乗った「とまり木」仲間についていたら、いつの間にかステージの前に着いていました。そんな所まで人を詰め込んで、フェリーは僕らを現実世界へと連れ戻していったんです。

僕にとって、憂鬱極まりないこの帰りの旅路、フェリーの雰囲気はその心境を汲み取ったかのようなジメジメ感でいっぱいです。雨にも濡れていたし、身も心もジメジメした船内でした。乗船しても「とまり木」居残り組による見送りがあったので、余計に屋久島への思いが残りました。旅の終わりというのはものすごい寂しさがこみ上げてくるものです。

ところが、その先にはなぜか「チャリダー日記（屋久島編）」の蛇足がくっついていました。屋久島の中での旅が終わったとき、密かにそこを起点とする旅が始まっていました……。

ステージ
誰もいない
そのステージ
本末
誰かが
歌い
踊り
しる

ステージ



スポットライトを浴びて輝く……ステージとはそんな憧れの世界です。誰もが自分に注目し、笑い、泣き、楽しむ……すごいことです。

もしも、僕がステージをひとつ任せたとしたらどうでしょう。歌手のように歌う……物が飛んできそうです。芸人を手本にして笑いをねらう……誰もいなくなりそうです。ギタリストのごとく音楽を奏でる……弾ける曲がほとんどありません。「チャリダー日記」の読み聞かせ……教育的に悪影響を与えそうです。教師のフリをして授業実践……居眠り続出でしょう。

ステージってのは、その場にふさわしい人が、そこにふさわしいことをする場所なんです。人を幸せにする技術を持った人がステージに上がるからこそ、スポットライトを当ててもらえるわけです。遥かなり、大ステージです。僕には遠い存在に思えて仕方ありません。たどり着くまでに百億年くらいかかるかもしれません。

屋久島からのフェリー内、そのステージは寂しく黙っていました。誰もいないステージは、じっと主人公が現れるのを待っています。適材適所……ステージは待ち続けます。

……でも、ただ一人、日本語を読めない外国人が寝袋に入り、ステージの上で眠っていました……。



跳びはねた経験……記憶に残っている中では、綱引きで勝った瞬間に天へ向かったように思います。ホント、いつの間にか足は地面を蹴り、ジャンプしていました。

人間が自分の感情をあふれさせることは時々あります。でも、仏さんが跳び上がるって、どんなレベルなんだろう。超越してしまっていて、さっぱり分かりません。それを我が身で体験できたら……こりゃ、すごい体験です。

「仏跳麺」ということは、仏さんもそのおいしさに驚き、跳びはねるような麺ってことですね。仏さんがラーメンを食べるのかどうか、すでにそこから疑問ですけど、ま、そういうこともあるのかもしれない。

鹿児島といえば黒豚、チャーシューの質がきつと格段に違うはずです。「とまり木」から一緒に行動していた我々は、期待に胸はずませてラーメンと対決しました。もともと豚好きな僕としてはもう、たまりません。「アイ・ラブ・ブタァー！」なんです。うまいものはうまいんです。店の中で跳びはねることは、他の人たちに迷惑をかけるかもしれないので抑えました。

この、自信をもって何かを世に送り出せること、すばらしい宝物だと思います。僕にとってそれは何だろう……と悩みます。が、この悩んでいること自体が僕の宝物なのかもしれません。

番台

風呂屋では、

やぼり

カウンターというより
番台と呼ぶたい



番
台

2003.1.4.

言葉を大切にしましょう、と言います。その通り、言葉は大切なものです。そんなことは言わなくなつて分かつています。

じゃあ、自分の言葉を大切にしましょう、と言われたらどうでしょう。そうかもしれない、でも、「自分の」言葉って何なんだろう、と考えてしまいます。

「とまり木」以外の場所で、宿泊料金を払うことになりました。健康センターみたいな所です。要するにお風呂があつて、休憩所みたいなモンがあつて、仮眠室みたいなヤツがある、そんな施設です。一緒にいた「とまり木」メンバーと突撃です。

その雰囲気は、昔だったら銭湯という言葉になるようなものでした。いや、僕の「自分の」言葉を使うなら、間違いなく銭湯なんです。そして、お金を払う所も「カウンター」じゃなくて「番台」なんです。風呂上がりには腰に手を当ててビンのコーヒー牛乳でも飲み干したくなる、そんな場所に思えました。

僕の気持ちを伝えるには「自分の」言葉が必要です。誰かから借りてきたような言葉では僕の気持ちは伝えられません。時には気持ちを上手に表すことができる言葉がなかなか見つからないこともあります。だからこそ、僕は「自分の」言葉を大切にしていきたいと思います。だからこそ、周りの人の「自分の」言葉も大切にしていきたいと思います。



自分には見えない何かが見えることがあったら……それは超越したモノを感じる力かもしれない。

僕の間からは貝の絵に見えました。ところが、それが全くそのように見えない人もいます。一人、また一人と「とまり木」の仲間がそれぞれの場所へと戻っていく中で、その人は、まだしばらく一緒に旅を続ける人でした。何に見えていたのか、詳細は不明です。まさか、そんなことはないと思うんですが、もしかしたら、魚に見えていたのかもしれない。いや、断じてそんなことはないと思うんですが……。

「たいらぎ」とは何なのか、僕は知りません。でも「寿し」は分かります。酢メシを使った伝統的な日本料理の代表選手です。ということは「たいらぎ寿し」とは「たいらぎ」を材料とした「寿し」であることは易しく想像ができます。

食べてみて、やはり「寿し」のようでした。上に乗っている物は、どうも貝柱のような感触です。想像していた貝とは少しイメージが違うものの、貝は貝、おそらく正解でしょう。

どうしても、会話にズレを感じます。確かに「たいらぎ寿し」は駅弁でもあり、できたてじゃないかもしれませんが。でも、そんなに不思議なものでもないと思います。

不思議に感じるのはそれが「鯛」だと想像するからです……。



アジの開きは背開き？腹開き？……そりゃ、腹開きでしょう。じゃ、ウナギはどう開きますか。関東と関西では違います。そんなこと、僕にとってはどうでもいいことです。皮一枚でくっついてりゃ、どっちも同じようなモンです。それが、全部離れてしまったら、バラバラです。

全て開かれていました。こっちから向こうまで、スパーンと貫通でした。僕にとっては初めての体験で、かなりの衝撃でした。確かに、停車時間は長いけど、大胆な行動だと思います。列車の出入り口が両方開いていたって、得する人はいないんじゃないでしょうか。アホが喜ぶくらいのモンです。

開けっぴろげでうれしいのは、たとえば、合唱の時のどの奥、これはいいです。口が開いているのは大前提ですけど、のどの奥が開いていることで、共鳴する空間が大きくなるから歌声が響くようになるはずです。ギターだって胴体に穴が開いてなかったら全然響きません。開けっぴろげが命です。

開けっぴろげの性格というのも、いい感じだと思います。苦勞することも多いものの、人を受け入れる態勢がオープンだと吸収することが多いわけです。多くの栄養を得て、多くの傷も作り、自分を成長させていく開けっぴろげ状態です。今の僕には無理かもしれないので、せめて腹開きくらいにしておきます。



「だから何なのだ？」と思わないで下さい。電車に乗っていて、線路側の出入り口から外を見るチャンスなんて滅多にないはずですよ。このチャンスを逃す手はありません。他のことを考えている余裕はありません。最優先でシャッターを切らなければいけないんです。

ものの見え方って、場面によってものすごく大きく違うことがあるように思います。こっち側からみるのか、あっち側から見るのか、重要なポイントなんです。プロ野球、日本シリーズ、三勝三敗で迎えた最終戦、セ・リーグの目でみると、パ・リーグの目で見るのでは、熱の入りが三℃くらい違うことだってあります。

自分の好きなチームが勝っている場面だったら……、鼻歌交じりで「かつ飛ばせえ」なんて言っているでしょう。それが、もし負けている場面だったら……、物でも投げたくなる気分です。同じ自分なのに恐ろしいモンです。

要は考え方です。自分にとってプラスになる考え方ができたら、それが一番だと思います。トップバッターは緊張して打席に入ります。失敗したらそれまで……、ヒットを打ったら優秀選手です。そんな考え方、見方ができる眼が欲しいです。

あ、写真を撮っていたら、扉が閉まり、挟まりました……。



親切な人でした。車掌さんです。何回も何回も僕らの車両にやってきてはゴソゴソやっています。すばらしい人なんです。いや、なかなかいませんよ、こんなに親切な車掌さんは……。

列車の中、斜め前の席に、サングラスをかけた背の高い人がいました。その人の姿を見た瞬間、「何か」を感じました。野生の勘とでもいうようなモノです。それで、何気なく眺めていると、……おもしろかったです。

車掌さんに何かを聞いていました。うゝむ……。車掌さんが何かを持ってまた現れます。カバーをかけた業務用らしい時刻表でした。何かを教わっていました。うゝむ……。車掌さんが、何かを持ってまた現れます。メモ用紙みたいでした。そこで、説明を聞いていました。うゝむ……。

もう、僕としては耐え難いおもしろさでした。何と表現したらいいんでしょう。人間と人間のやりとりのおもしろさを感じたんです。人間はケンカもします。でも、助け合いもします。列車の中では両方のことが起こります。助け合いの姿は、美しい姿です。それをクスクス笑っちゃいけないのかもしれませんが、ユーモラスな姿でもあったんです。

ちよっとしたことかもしれません。その、ちよっとしたことの中に自然と笑いが出てくる、ってステキなことだと思います。



突然、象さんが現れました。ヒィ……、やられました。こういうネタに弱いんですよ、僕は……。完敗です。

なぜ、こうなったのか……。この列車に乗ったということがすでに運命だったのかもしれませんが。「僕を東京まで連れていってください」……正確な内容は覚えていませんが、確か、そんなことだったように思います。「へっ?」……。彼に声をかけられました。

鹿児島出身の人でした。

「写真を撮らせてください」……正確な内容は覚えていませんが、確か、そんなことだったように思います。「はい、いいですよ」……。彼がカメラを取り出します。「へっ?」……。出てきたのが象さんだったんです。その中にカメラがしまっていました。何だか、よく分からない世界です。

なぜ、こうなったのか……。この列車に乗ったということがすでに運命だったのかもしれませんが。「わたしも連れていってください」……正確な内容は覚えていませんが、確か、そんなことだったように思います。「へっ?」……。女の人に声をかけられました。大分出身の人でした。

「旅は道連れ世は情け」……よく言ったモンです。



鹿児島人です。決して鹿児島の人がすべてこのような人だとは思いません。きっと彼は特別な人なんです。

南方系の人たちは、強い日差しの中でたくましく育ちます。なので、小麦色の健康的な肌をしていたりします。りりしい眉毛だったりもします。軟弱者の僕としてみれば、かっこよくてうらやましい限りです。

でも、この鹿児島人の眉毛は異常です。……あ、アイマスクでした。眼光も驚くほど鋭く、カミソリのようにです。……あ、アイマスクでした。ゴルゴ13が好きなのかもしれません。列車に座っている姿を見ると、その場だけ空気が違うことを感じてしまいます。すごすぎます。

変身願望というものが人にはあるといいます。今とは違う自分になりたいという気持ち、変身したいという気持ちになって現れるようです。中学校の運動会なんかで、なぜか男子生徒がセーラー服なんか着てたりするのも、そんなせいかもしれません。

自信をもって「自分が好き！」と言えることって、そんなに多くはないかもしれません。どうしても自分の姿の中でも悪い部分に目がいつてしまうからです。でも、今の自分に満足せず、よりレベルが上の自分を目指したいという前向きな気持ちをもって変身していきたいと思います。



鹿児島人と大分人、それに静岡人……実は岐阜人も一緒だったんですが、これはかなりの珍道中でした。本当に「旅は道連れ世は情け」という言葉が頭の中に浮かんできます。

もともとは、それぞれが一人旅だったんです。でも、人間って寂しがりな生き物なんだろうね。一人旅をしているという仲間の雰囲気共有したかったのかもしれない。僕は四人、寄せ集め集団ができあがったんです。この四人が出会ったのはただの偶然だったけど、何かの共通点があり、接点があったから出会うことができたんだと思います。

列車の中には他にもたくさんの方が乗っていました。あちこちの通勤電車では、毎日つぶれるほどの人が乗り込んでいます。その人たちが、みんな全然関係ない所から一つの列車に乗り込み、みんな全然関係ない所へと散っていくんです。何の接点もないんです。

僕はは会いました。もちろん日常的に付き合いができる関係ではないかもしれませんが、それでも、出会ったんです……大切にしたいなあ、なんて思います。そのうちに忘れてしまう関係かもしれない。それでも、出会ったんです……大切にしたいなあ、なんて思います。

一期一会……深い言葉だと思います。

駅

それだけの土地に

それだけの良さがあ

駅あり

名物あり

ぬくもりあり



あなごめし屋

岐阜人は『平家物語』でも有名な安芸の宮島に立ち寄って帰るということでした。鹿児島・大分・静岡連合は、乗り継ぎの列車待ちという理由で一緒にその駅で降りました。

メシを食おう、ということになり、お店を探します。「広島焼き」という文字に惹かれて入ったその店でしたが、「あなごめし」ができるよ、と言われ、いつの間にかみんな「あなごめし」をたのんでいました。よく考えたら、値段も確かめずにたのんでいました。メシが出てくるまで、まともでもない馬鹿話をして盛り上がっています。店の人に頼んで写真まで撮ってもらったりして、その馬鹿っぷりをアピールしていました。あ、いや、そのお店の人もいい人で、「あ？撮れたかな？」「ん？この角度でちゃんと入ってるかな？」などと、気をつかってくださいました。ホントに……いい人たちが出会ったモンです。

いい人との別れというのは、やっぱり少し寂しいものです。メシを食べ終わり、岐阜人とはお別れです。同じ空間、同じ時間を過ごしたその重なりは、そんなに多かった訳じゃありません。でも、中身が濃かったんですね。自分の描いた絵を渡したりなんかして、ちよつと感傷的になりながら駅に向かいました。

……あ、「あなごめし」一四五〇円は、うまかったです。

時刻表

These are four historical Japanese train timetables. The top-left and top-right tables are for the 'Kansai Railway' (関西鉄道) and show a dense grid of routes and times. The bottom-left table is for the 'Kansai Railway' (関西鉄道) and shows a different layout. The bottom-right table is for the 'Kansai Railway' (関西鉄道) and shows a different layout.

延々と、そして、遅々と鈍行列車は走ります。鹿児島から浜松まで、だいたい丸一日半くらいだったと思います。途中、出会いがあり、別れもありました。僕のチャリダー生活屋久島編の中で、貴重な「蛇足編」でした。屋久島島内にいたのと同じくらいの濃さがあるようにも思える帰りの鈍行列車でした。

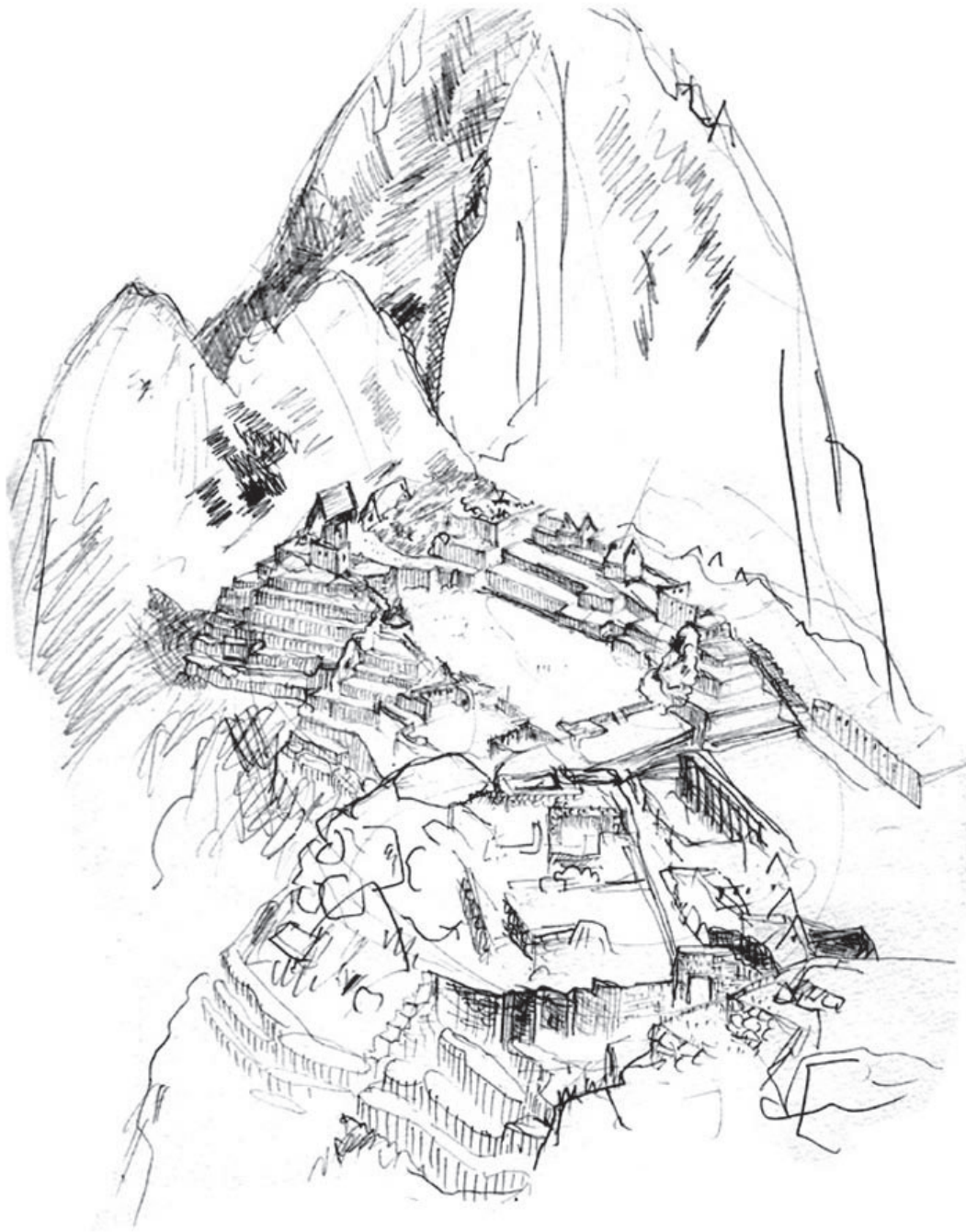
旅に出ると、時間の流れが急激に変化します。ものすごく速くなったり、ものすごく遅くなったり、何しろ変化がすごいんです。「一日一事」といつて過ごしたこともあります。その日にどうしてもしなければいけないことは一つだけ、たとえば何か買い物に行くだけ……、つてな具合です。それだけしかせず、あとはぼろろと過ごすんです。普段では考えられません。

この時のチャリダー生活はこれで終了です。一つ一つの旅に終わりがあります。僕の周りには旅に「終わり」を作っていない人もいます。生涯旅人で暮らしたい、という願いもあるけど、今の僕にそれはできません。まだまだやり残していることが山ほどあります。力を注ぐ場所は旅だけじゃないんです。

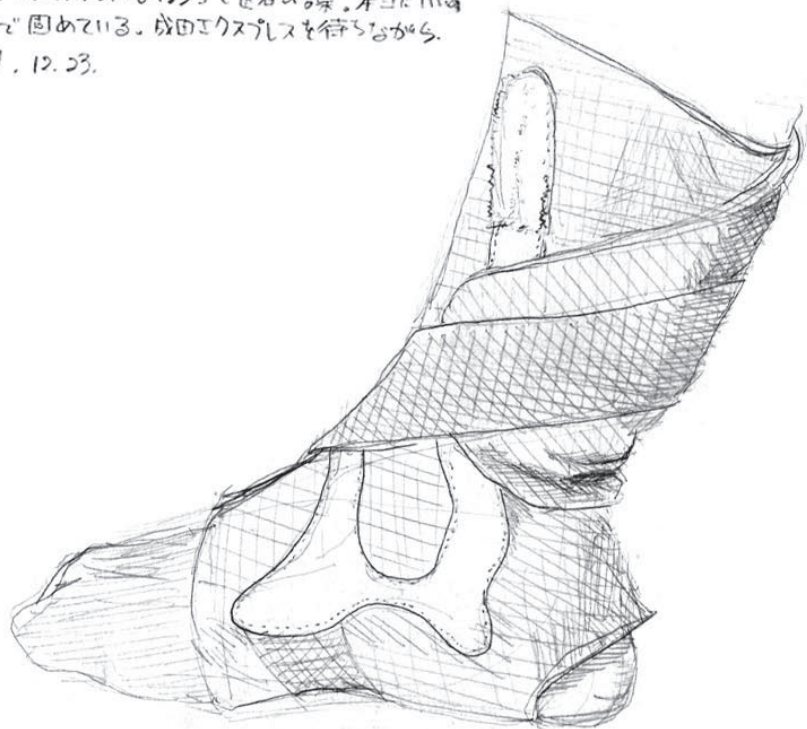
旅をするごとに、大切な「何か」を自分の中に育てているような気がします。それが何なのか、まだよく分かりません。でも、読み込まれた時刻表がきつと僕に教えてくれると思います。

旅の時間に……、ありがたう……。

ペルー編



バレーをやっている。ブロック!! おれ!?着地で、グキッ!! 右足首 くるぶし外側、はくり骨折...。必死2日前、「ギプス 取っちゃいましょう」と医者言葉。本当にいいか? と思いつつ、今はサポーターで固めている。成田エクスプレスを待つながら、東京駅にて...。 2001. 12. 23.



サポーターでがっちり!

「お正月は暖かいところで過ごすにかぎる!」ってなことを言いながら毎年のように国外逃亡をしています。そこで、いつか行きたいと思っていたマチュピチュとナスカの地上絵を見ることを最大の目的としてペルーを目指しました。ところが、年末に自分の入っているチームでバレーをやっているとき、必死でブロックに跳んだら足をグキッとやってしまい、剥離骨折になってしまいました。出発二週間前のことです。

医者に行ったら速攻でギプスで固められてしまい、松葉杖まで持たされてしまいました。「イカン、荷物が増える……」と焦ってしまいました。旅立つのが前提です。骨折なんかには負けてはいられません。その日から出発日までの食生活は無茶苦茶でした。カルシウムのタブレットを買い込んで大量摂取し、「骨元氣」とか何とかいう納豆の上に鰯のふりかけをかけて毎日食べていました。カルシウム補強の飲むヨーグルトをがぶ飲みしたのは言うまでもありません。

出発二日前、医者でペルー行きの話をしたところ、「じゃ、ギプス取っちゃいましょう!」とのこと。ホントにいいのか……と逆に心配しましたが、医者の言うことだから大丈夫だろうとお任せしました。

最初っから負けっぱなしの旅でした。



△Delta

ご搭乗誠にありがとうございます。

サ ラ ダ

葉野菜、鮭のフライ、柚子ドレッシング
茶そば

ア ン ト レ

お好みのお料理を一品お選びください。

鶏胸肉のロースト

サンドライトマトと赤ピーマンのソース

ポテト、さやいんげん

シーフードメドレー

スイートアンドサワークーマトソース

チーズトルテリーニ

四種類のチーズ入りトルテリーニパスタ

マッシュルームチーズソース、トマトソース

デ ザ ー ト

小倉ロールケーキ

フ ラ イ ト の 半 ば で

オレンジジュース ストロベリーヨーグルト

ブルーベリーマフィン ピーチデニッシュペーストリー

ラ ン チ

赤ピメント、ラディッシュ

パパイヤのヴィネグレットサラダ

きしめんと鮭

または

鶏胸肉の照り焼き

ピメント、ご飯

果物各種 チョコレート

ご希望に添えない場合もございますので
ご了承ください。

△Delta

welcomes you aboard

APPETIZER SALAD

Mixed Greens with fried Salmon,
Yuzu Dressing and Chasoba Noodles

ENTREES

Please choose one of the following Entrees

Roasted Chicken Breast

With a Sun-dried Tomato and Red Pepper Sauce

served with Potato Wedges and Green Beans

Seafood Medley

Served in a sweet and sour Tomato Sauce

Four Cheese Tortellini

Tossed in a Mushroom Cheese Sauce

complemented by a flavorful Marinara

DESSERT

Ogura Roll Cake

MID-FLIGHT SNACK

Orange Juice Strawberry Yogurt

Blueberry Muffin Peach Danish Pastry

LUNCH

Red Pimento, Radish

and Papaya Vinaigrette Salad

Kishimen Noodles presented with Salmon

or

Teriyaki Chicken Breast served with White Rice

Green Pimento and White Sesame Seeds

Assorted Fruit Chocolate

Please accept our apology if your selection
is not available

3611027-0

ペルーへの道のりは長いものでした。

出発当日、浜松駅に着くまで僕は「名古屋空港」を目指していたのです。自分のチケットを見て愕然としました。「成田」の文字……。とにかく急いで新幹線の切符を買い、ホームまで駆け上がったものの、時刻表をじっくり見て、また愕然。どう考えても間に合いそうもありませんでした。結局その日のヒコーキは僕を置いて飛んでいくのでした。半年前から予約を入れていたチケットだったんですけどね……。

仕方がないのでその足で旅行会社へ行き、そのヒコーキをキャンセルして空いている席を探してもらいました。かなり落胆して、もう無理かと思っていたのですが、「どんな手を使ってでも行きたい」と駄々をこねたところ、ものすごくラッキーなことに翌日の席を取ることができました。キャンセル料五〇パーセントの残金と、差額の追加料金を支払い、複雑な気分でその日は自宅へと戻ったのです。

翌日はゆとりをもって東京へと向かいましたが、今度は東京駅で自分の足をスケッチしているすきに成田エクスプレスを乗り過ごし、目の前を走っていく電車を見送りました。僕の心の底ではペルーという国をおそれていたのかもしれませんが……。

ぎりぎりセーフぐらいでヒコーキには乗れましたけどね……。



海外旅行とは、怖いモノです。どこで何が起きようとも自分の身は自分で守らなければなりません。僕は以前「南米はシヤレにならんよあ」と聞かされていました。何だかよくわかりけど、特に怖いと教えられました。……といいながら、ほとんど準備もせずに現地についてしまい、困っていました。

すると、そこに「これからどうするんですか？」とやさしそうに声をかけてきた人がいました。インドの街中だったりするとこれはかなり怪しいんですが、ここは国際空港の中です。きっと大丈夫だと思ってその人と話をしました。

事務所までついて行き、僕の旅のルートがほとんど決まっていないことを言うと、「じゃあ、こうしなさい！」と、バシバシいろんなことが決まっていきます。このままではやられてしまう……と思い、こちらからも質問で反撃をしました。

事務所の人も「日本と違って危ないから」ということをくり返していました。結局、貧乏人の僕が最高級のバスを予約したりして、なぜか旅がリッチなモノになっていました。

たぶん、もっと納得できる方法があったと思います。が、僕はほとんどペルーについて知っていることがありませんでしたので、こういう結果になってしまいました。どんなことでも予習は大切なんですね。

そうだよなあ……、クリスマスなんだよなあ……



ペルーの首都・リマ市街でデリバリーのバイクを発見しました。おしゃれ(?)なことに荷台はサンタクロースの帽子をかぶっています。こういうワンポイントが僕の好奇心をそそるのです。これぞシャッターチャンス!

くだらないことかもしれませんが、僕は今まで見たことのないようなモノを写真に納めることが大好きです。その遺跡やら風景などはきつと腕のいい写真家がすてきな作品を生みだしているはずです。だから僕は僕の視点で「おもしろい」と感じたものを撮ります。

他の人は僕の写真を見て「何だかよく分からん」と言います。だから、写真を見せるときには一生懸命説明をします。僕の説明があるのと、ただ写真を見るのではかなり大きな違いがあるような気がします。ところが、実は、後から自分でも何の写真なのか分からなくなることがあります。なので、できるだけ早いうちに写真のコメントを書いておくことにしています。

その時その時に感じたことを記録に留めておくことって大切なことだと思いますか。ほんの小さなことでも他の人には感じられないこともあるはずです。それを少しでも写真という方法で記録しておきたいんです。もちろん、記録より記憶の方が大切なことたくさんありますけどね。

ぎっと高いんだろっなあ……



「ん？ Holiday Inn？ ほりデーいん？……ホリデーインだとい？
なんと、修学旅行の時に泊まつたりするホテルではないか！ 京都
だけじゃなくて世界中にある国際的な高級ホテルだったのだな！」

修学旅行とやらでホリデーインに宿泊する中学生もいます。
彼らがどう感じたか分かりませんが、僕にとってはかなりの高
級ホテルです。もちろんペルーであっても高級ホテルです。そん
な高価なところに泊まるなんてことは僕自身には絶対あり得ない
ことです。もちろん高級ホテルだからこそ学べるいろんなことも
たくさんあります。ホテル内の服装やらテーブルマナーなどなど
……。いわゆる「一般常識」を試される場所だといってもいいか
もしれないのです。

でも、僕はTシャツ・短パンにゴムズリでぶらぶらしてた方
が楽なんです。何よりそういう宿は安い！ 僕にはそれがぴった
りです。何と言っても僕は貧乏人なんです。それ相応の生活とい
うものがあると思います。貧乏人の僕がスーツケースを持って高
級ホテルに泊まるのは、まだ早いのです。

いつか、僕が大金持ちになって、もっと常識のある人間になっ
たとき、もしかしたらホリデーインに泊まっているのかもしれま
せん。……ま、しばらくの間は考えられません。

花屋さん



目の前にパツと花畑が広がりました。この人の前も後ろも花でいっぱい……きれいだなあと思いました。こんなふうに毎日、花を売って歩いているんですね。なんか「いいなあっ！」て思いませんか？

最初は「げげげっ、出たな……花おんな！」ぐらいに思いました。でも、この人の表情を見たら気持ちがおかしくしてくるんですね……。何となく汚い感じの服装だったりするんですが、あつたかいです。……時々いるんですよ、こういう人が。

都会のご真ん中、車が排気ガスをばあんばあん出しながら走っている中に、時代を間違えたように現れる人たち。しかもそれが当たり前のように振る舞っているんです。さらに周りの人も当たり前の顔。日本じゃ、あり得ないような光景です。場所が場所ならきつと何かしら不利な状況に追いつめられて、ものすごく苦労して生活するようになると思います。みんなと違うことは決して悪い事じゃない、それを認めてあげられるような世の中であってほしいと思います。

こういう顔をした人たちが、他の人に迷惑をかけるとは思えません。迷惑をかけずに、ひっそりと、でも、必要とされて生きていけるようなやさしい暮らしが僕らの心を幸せにしてくれるような気がするんです。



トヨタの新車です。新車に、このグルグル式の窓開けタイプがあるとは驚き！ 旅行会社のおっさんに空港から市街のオフィス、そのオフィスからバスターミナルへと乗せてもらったのですが、それが、この車です。

どうも、僕の悪い癖で、何かと怪しいモノという感覚でいろんな物を見てしまっただけです。日本人の感覚で言えばこのグルグル式は「ふふふっ、出たな！」のレベルですが、この人にしてみれば全然おかしくもないんですよ。

前、僕も車に乗っていたときがあります。その車についていた窓はパワーウィンドウのものでした。僕は窓開けの調節が下手くそで、ウィーンと開けていく途中で「ここっ！」と思って止めても開きすぎているんです。おまけに僕のその車はクーラーが壊れていたので窓を開けたり閉めたりすることが多かったんです。当然、夏には窓を全開にして走っていました。で、車を止めてから気づくんです「あ、窓を閉めてなかった……」。ところが、エンジンをかけていないと窓が閉められない……。やっぱりグルグル式が一番なのです……きつと。

「世の中に出回っている車たちよ、今こそ君らは窓をグルグル式に戻すべきなのだ！ パワーウィンドウなどに負けてはいけないのだ！」と誰か叫んでくれませんかねえ。

まわりは黄色いタクシーばかりナリ……



こいつが僕を空港から旅行会社、バスターミナルへと乗せて走ったトヨタです。きれいな車ですよ。なかなかの乗り心地でした。前席に座って空港から市街地へと向かうとき、前の方に海が見えて、ちよつと幸せになりました。普段きれいな車などという物に乗り慣れていない人間にとっては、ほんの少しのことがすべて幸せに思えてしまいます。でも、この車の窓はグルグル式なんです……。

初めての場所で最初に乗る交通機関……結構重要なポイントなんです。何も知らない観光旅行者を騙してやろう、と悪い人たちが待っていることも多いからです。海外旅行初体験、というインド旅行のときは、思いつきり騙されました。料金がわからない貧乏人から大金を取るなんて、ずるいですよ……。

このトヨタは旅行会社の車みたいで、安全性は大丈夫だと判断できました。じゃ、よしっ！ 行こうか……というところで、次の課題はお金です。「え？ お金払うの？」ってな具合です。チケット買ったんだから、サービスしてくれてもいいような気がします。なんか、騙されたような感じもありますが、疲れていたのもあって、お願いしました。

後日聞いたんですが、そのあたりの場所で、タクシーが強盗に襲われたそうです……。教訓、「安全第一」！

グスカ眠ってたので一度もテレビは使わなかったけど……



リマから地上絵を見るためにナスカへ向かいました。そのバスはすごいものでした。僕は貧乏旅行者でありながら、なぜかお金持ちが乗るはずの最上級ロイヤルクラスのバスに乗ることになってしまい……。有頂天です。目の前には個人用のテレビまでついています！ 超ぜいたくな旅です。

今までの旅の中で、僕が乗ったバスのほとんどが、ボロボロの古くいものでした。十二時間くらい乗らなきゃいけない夜行バスの窓が壊れていて、ヒューヒュー風が入ってくる寒さだったこともあります。二十四時間くらい乗らなきゃいけない寝台バスに、長い体が収まらなくて苦労したこともあります。そして、エンジントラブルで止まってしまったことだってあります。僕にとってはボロボロなのが当たり前……のはずなんです。

ペルーでのロイヤルクラス乗車は「王子と乞食」の世界でした。王子様にしても乞食にしても、人間とは自分に不釣り合いな場面に出会うと、困ってしまう生き物のようです。もちろん、僕は乞食派ですが、「ロイヤルクラス」に乗っただけでキョロキョロと落ち着きがなくなってしまう。「テレビがある」というだけで、写真まで撮ってしまうんですからねえ……。

でも、悲しいかな、しょせん乞食は乞食。テレビの喜びを感じる間もなく、はしゃぎ疲れて眠っていました。



ふと外を見ると、そこは海、そして海水浴のために屋台が出ていました。浮き輪にビーチパラソルなど、華やかなモンです。南半球の十二月は夏なんですね。それにしても、高速でバンバン走っている車道のすぐ隣にこんな屋台が出ているなんて、恐怖を感じます。

僕も、時間があつたららのんびり浜辺に行きたかったんですが、そんなゆとりはありません。何といつても僕は日本という国で仕事をしている忙しい種類の人間なんです。……ここで途中下車できない自分の立場が恨めしく思えました。

「金はないけど時間はある」という貧乏旅行者は気の済むまでその場に滞在するということがあります。その場所ですべて自堕落な生活を送るんです。その状態を「沈没」といいます。なかなか浮かび上がって次の場所へと移れなくなるんです。

世界中には二年とか五年とか、長い期間の旅をしている人がいます。その人たちはよく「沈没」してしまいます。あちこち放浪していると、どんな場所も同じに見えてしまつて、何もしくなつてしまふんです。そんな中でも好奇心旺盛にガンガン旅をしている人はすごいと思います。

これは僕らの日常生活も同じことです。普段の生活の中で、いろんなことに興味を持つて、充実した時間を送りたいものです。

所詮、写真なんてこんなモンよ……



ナスカに着いたその日の夜、ホテルから一人寂しく外を眺めると、そこは行列のできる店でした。「あれは何だ？」と聞くと「チキンだ」という答えが返ってきました。「そうか、今日はクリスマスか……」と思いだし、また寂しくなる僕でした。その写真を取ろうとしたものの、窓ガラスに指が写るだけで、また一段と寂しくなってしまうのでした……。

僕は一人で旅するのが好きです。もともと自分勝手な性格なので、他の人と一緒にいると自分が思ったとおりには動けずいらいらしてくるんです。でも、こんな時……そう、クリスマスの夜なんかは一人でいると……ものすごく寂しくなってきます。都合のいいときに都合のいいように、誰か僕の相手をしてくれる人が現れるといいんですが……。これこそ自分勝手……。

「次の日は地上絵を見るんだ！」と、旅行会社の事務所に確認しに行ったりして気持ちを奮い立たせ、自分の中のわくわくした気持ちをクリスマスプレゼントに替える努力をしました。気持ち次第でどんなことだって楽しくなり、充実したものになるはずですよ。そうだ、絶対そうです。

でも、結局、何をするでもなく町の中をフラフラ歩いて、人々のうれしそうな顔を見るだけで、この日の夜という時間は過ぎていきました。

僕が泊まったニ〇ソルへ七五〇円くらい？の部屋



ナスカに着き、予約していたHotel Aregria という宿に入ったとき、まず、二十ドルの部屋に案内されました。「高い」と言ったら、次に四十ソルの部屋を見せてくれました。それでも「高い」とケチをつけたら二十ソルの部屋に連れて行かれました。一体、どこまでのレベルの部屋があるのか、僕には見当もつきません。とにかく二十ソルの部屋で勝負です。

地下牢みたいだけど、僕には充分……。でも、後から同じ宿に泊まった日本人に聞いたら、その人はもうちよっとレベルの高い部屋に、もうちよっと安い値段で泊まっていたみたいでした。くそっ、くそっ！

その日、何といってもクリスマスです。チキン屋さんの行列が示している通り、みんなウキウキです。特に、キリスト教を信じている人たちが多い所ですから、クリスマスといえはかなり重要なお祭りです。日本人の感覚で考えてはダメでした。

僕が地下牢のような部屋で、翌日の地上絵に備えて気合いを入れて「寝るぞ〜！」と思っていたら、隣の建物の方から陽気な音楽が聞こえてきたのです。「ま、クリスマスだから勘弁してやるか……」などと軽く思っていたのが大間違いでした。ついに夜が明けるまでそのお祭り騒ぎは続いたのです。

本当に、地下牢での拷問だったような気がします……。

なんか痛いなあ、と思ったら……



剥離骨折の足にはサポーターは不可欠の物でした。が、しっかり固定していたら、キュウキュウ締まっていたのか内出血していました。「何か痛いなあ」とは思っていたんですけどねえ……。『これは大変』と、この後からはできる限りサポーターをはずすことにしました。

サポーターをしていなければ、足は軽いし動きやすいような感じがします。でも、それで歩き回るとはとても勇気がいることでした。いつまたグキッとやってしまうかわからないからです。道はところどころデコボコで、石の上なんかに乗ってしまったら一発で痛み復活です。

エライときにけがをしてしまった、とまた後悔するものの、どうにもなりません。いくらバレーで上達したくても、自分のレベルをわきまえないといけませんねえ。どれだけ背伸びしたって、僕は初心者、体がヒィヒィ悲鳴をあげるだけなんです。それに気づかないから愚か者なんですけど……。

僕は欲張りな人間でもあるので、他の人がやっていることで自分ができないことがあると、ものすごくイヤいんです。ブロックしてもスパイクを決められたら嫌じゃないですか……。何でもそうですけど、物事には限度があるということを学ばなければいけないんですね……。

「すぎの森幼稚園」はどこにあるのだろう……



ふと見ると、そこに走っていたのは「すぎの森幼稚園」でした。そこら辺の人々は何事もないような顔をして通り過ぎていきますし、平然と幼稚園バスに乗り込んでいきます。「ああ、ここにはすぎの森幼稚園・ペルー出張所があるんだ」なんて勘違いしてはいけません。

ペルーの国内ではあちらこちらに日本の車が走り回っていました。一番多かったのは多分TOYOTAでしょう。NISSANもよく見ました。日本の車は大人気なんです。……たえそれが中古車であつても……。つまり、「すぎの森幼稚園」では使わなくなったバスをペルーに運んで、修理して現役復帰させているわけです。

そう考えると、日本の人よりもペルーの人の方が物を大切に使っているのかもしれませんが。ビデオデッキなんかでもそうだけど、修理のために電気屋さんに持っていくと、「新しい物を買った方が安いですよ」なんて言われてしまうことがあります。そう言われると貧乏性の僕はちよっとくやしんだけど、修理するより買ってしまった方が得のような気にさせられてしまいます。複雑な心境です。

それでもやっぱり、ペルー国内で「すぎの森幼稚園」に出会ってしまったら、びっくります。



セスナのチケット、六十五ドル也

いよいよナスカの地上絵に会いに行く時間が近づいてきます。実際にチケットを手にして、ますます気分が高まっています。巨大な地上絵だから普通に歩いていても見ることはできません。セスナに乗って空から見なければその姿をはっきり見ることはできないのです。

このセスナのチケット、ペルーに着いてすぐの空港の中で旅行会社にお願ひして手配しておきました。そこでは「混雑してすぐにゲットできるかわからない」というようなことを言われて、イカンと思われました。で、六十五ドルという値段であっても当たり前のようにお金を払っていました。

さて、実際に手に入れたチケットを持って、セスナに乗るために飛行場へ向かいました。ドキドキです。……と、そこに一人の日本人が同じようにセスナを待っていました。話をしているうちにセスナの値段のことになり……聞いて驚いたのはそれが三十五ドルだったということです。「やられた」と思いました。空港の旅行会社の人が極悪人だったというわけじゃないと思います。着いたばかりの人間を相手に商売する人ってのはそんなモンなんですよ。ふう……。

何でもそうですが、追いつめられているとろくなことがありません。ゆとりをもっていきましょう……。



これがナスカの飛行場……、砂利やら何やらコロコロしてて、とてもワイルドです。本当にこんなんでしつかり離着陸できるのかドキドキ……、このスリルは、まず間違いなく日本では味わえません。

飛行場に限ったことじゃないけど、とにかく日本という国はやたらめったら設備が整っているんです。例えば駅……自動券売機に自動改札口、自動精算機であるなんてとても信じられないくらい設備です。しかも、人々は整然と並んで、お行儀良く電車に乗り込んでいくのです。日本という国はすばらしい！

とはいえ、仮にも空を飛ぶモノに乗ろうというときに、これだけボロボロだと多少の心配が胸に湧いてきます。セスナなんていう小型ヒコキに乗ることも初めてのことだし、緊張感に溢れています。そのヒコキも、小さいから妙に作りが簡単で、おもちゃみたいに见えてしまうんです。

まあ、大勢の人が乗っているわけだから大丈夫なんだろうけど、心配してしまうのが人間ってモンです。そこで、安心感を買うためには、またたくさんのお金が必要になるんでしょう。安心感の値段はいくらぐらいでしょうか。

まあ、多少不安でも、安いヒコキの方が僕に合ってるような気がしますけどね……。

パイロットはすべてに目を通していたのだろうか……



さあ、セスナに乗り込みました。目の前にごちゃごちゃした計器が並んでいます。大型のヒコキでは絶対お目にかかれない代物です。大型機でパイロットの操縦席に入り込めるのは、ハイジャックをした犯人くらいでしょうか。それが、セスナだったらすぐ目の前です。見た目はややこしいけど、操縦そのものは簡単そうに見えてしまいました。きっと僕にも操縦できるはずだ、なんて思っていました。

バイクにもメーターがついています。当然です。僕の愛車「赤龍丸」にはスピードメーターとタコメーターがついています。……それしかついていません。どのくらいの速さで進んでいるのか、エンジンがどのくらいの速さで回っているのか、ということがわかれればいいんで、全然問題ありません。欲をいえば燃料メーターがあると便利だなあ、と思っています。

さて、このセスナでは高度メーターやら機体の水平確認メーターやらが作動していました。えっ、でも、操縦桿の右側の二つ、何の意味もないような……、全く動いていないような……。

ま、いいんです。飛べれば！ 飛んで地上絵が見れたら何の文句も言いません。多分大丈夫でしょう。今まできつと何人もの人がこのセスナに乗っているはずですよ。よっしゃ！ さあ、行きましょう！

僕の頭の中は舞い上がっていた……



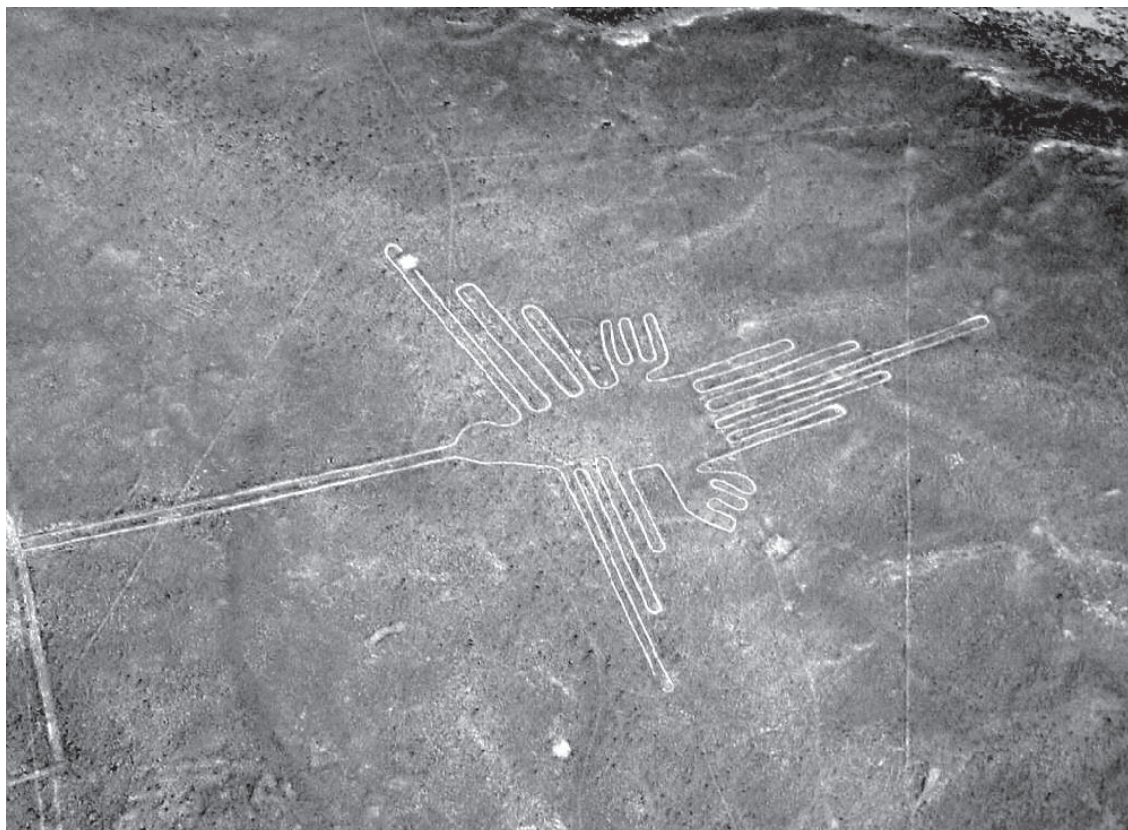
いよいよ、離陸。待機場所から滑走路へ向かい、意外なほどにスムーズな動きをするセスナ。よく見れば滑走路だけはばっちりアスファルトで舗装されていました。

滑走路をあとという間に走り去り、セスナはいつの間にか空へと舞っていました。僕の心も共に舞っていました。これから現れるであろう地上絵が僕を待っているんです。浮かれずにいられるでしょうか！ 幸いなことに、僕はパイロットの隣、前部座席に座らせてもらいました。狭い後部座席にはイギリス人カップルが押し込められています。そうか、カップルはとなり同士がいいよなあ、でも、かなり狭そうだなあ、僕はやっぱり一人旅でよかったんだよなあ、などと思っているうちにセスナは急旋回を始めました。

当然のことながら、水平飛行をしているだけでは真下にある地上絵を見ることができません。そこで、ぐるっと旋回しながら地面にある地上絵を見ることになります。グイーンと旋回している間、セスナが斜めに傾いて地上絵を見ることができるといわけです。

遊園地の乗り物にでも乗っているかのような感覚で、またフクフク度が上がっていききました。斜めに傾きながら僕の興奮は最高潮へと達していくのです。

ハチドリよ！ 俺はお前に会いたかったぞ！



何やら地上には不思議な線がいっぱいあります。はるか昔に流れていただろう水の跡も残されています。この乾燥帯、何もかもが時間を止めて僕らを待っているんです。

最初は、どこにいいのかわかりませんでした。でも、パイロットが「ウチユウジン！ ウチユウジン！」と日本語で叫んでいます。なんで日本語なの？……と思いつつも、やっぱり、えっ、どこ？……と探したら宇宙人の絵がこちらを向いて手を振っていました。他にも意味不明の線だとか三角形だとか、いろんなモンが地面に描かれています。

けど、ナスカの地上絵といえ、やっぱりこの絵でしょう。しばらく飛んで、やっと現れました。ハチドリの絵といわれるものです。子どもの頃、科学雑誌で見た写真そのものがすぐ眼下にあるのです。

比較するものが周りには何にもないので、その絵は思ったより小さく見えました。でも、よく見るとすぐ横に道のようなモノが見えます。その大きさと比べてみると……、やっぱりデカイ……。情けないことですが、僕は他のモノとの比較でしか物事を考えられないみたいです。自分なりの物差しがしっかり出来上がっていないのかもしれない。

何はともあれ、感動のハチドリでした。



いくつも地上絵が続いていきます。コンドル、クモ、ペリカン、サル……。地上絵が見えるその度に、セスナが僕の座っている右側にグイーンと傾きます。パイロットは「カメラ、カメラ！」と下を指さして、写真を撮らせようとします。パイロットによってサービス精神が旺盛で、右側と左側、平等にセスナを傾けてくれるということでした。

時々、翼を傾けながらヒコークは飛んでいきます。……しばらくして、僕は地上絵なんかどうでもよくなってきました。気持ち悪くなってしまうんです。グイーンと下を見るたびにフワツと体が浮いて、おなかから熱いモノが込み上げてきます。

「うつうつ……もう、勘弁してくれ……」という気持ちになってきた頃、向こうに滑走路が見えてきました。あの、デコボコした滑走路がものすごく美しく見え、僕を迎えてくれているように見えました。空中旅行の後半がどれだけ長く感じられたことが……。きついフライトでした。

セスナを降りるとき、パイロットが僕に話しかけてきました。しかも日本語です。「グロ？」と一言……そして、「ニヤッ……。涙目になりながら人が苦しんでいるときに……」。

こうして、目の前の怪しげな平仮名っぽい文字に見送られながら僕はセスナを後にしたのです。

ティーパックで出てくるとは思わなかったけどね……

マテ茶をたのんだ。
ティーパックだった。
なんか拍手拍けした。
ミントの香りが
ものすごく強く
ふんわりした。



2001.12.25

マテ茶

セスナに酔ってへ〇へ〇しながらホテルに帰還しました。「気持ち悪かった」とホテルの人に言つと、「マテ茶を飲むといいよ」と教えてくれました。藁にもすがる思いでマテ茶を頼んでみました。

出てきたモノはカップとお湯とティーパック……。果たしてどんな味がするんでしょう。お湯を注いでしばし待ちます。薄く色がついてきたところで、さあ挑戦です。気分が悪かったからよくわからなかったけど、印象としては、ハーブの香りがものすごく強いものだったという感じです。そもそもマテ茶とは何モノなのだ……むう……コカ茶とは違うのか……むう……。何でもいいます。気持ち悪い世界から復活したいんです。

安宿ではあったけど、白くて美しい壁のホテルのレストランで優雅にお茶をたしなんているという自分の姿を想像したとき、上流階級への仲間入りをしたような気分になりました。そこで、さらに優雅にスケッチブックなんぞを取り出し、より優雅に絵など描き始めてしまうのです。なんてすてきな時間でしょう。それだけで、気分がゆったりしてゲロゲロになりかけた自分が人間界に戻ってこれたように思います。

で、マテ茶がセスナ酔いに効いたのかどうか……。それはよくわかりませんでした。



「あ、ガソリンスタンドだ」と一瞬で済むはずのことが、一瞬では済まないのがおもしろいところです。これ、どう見ても手動式のポンプですよ……。カラーデザインはタバコのパッケージをイメージしているのでしょうか？恐るべきガソリンスタンドです。ガソリンスタンドでタバコなんぞ悠々と吸っていたらガソリンに引火します。大変危険です。それが手動のポンプだろうと何だろうと、そんなこと関係ないはずですよ。

こういう所を見ると、日本はやっぱり設備が整っていると実感します。日本ではガソリンスタンドには車をグイーンと持ち上げたりする機械もついていますからね。このガソリンスタンドでは修理にしてもヨイシヨ、ヨイシヨと車の方が斜めに登っていくような仕組みになっていました。

どうも僕らは楽をしすぎているのかもしれない。手間をかけてお茶をいれることもせず、ペットボトルからトクトクと烏龍茶を注いでみたり、ほんのちよつとの買い物でも車に乗っていたり……。もっと自分の手、自分の頭を使って生きていかなければいけないのかなあ、と考えたりもします。自分のやることですからね。

もちろん、ガソリンを手押しポンプで入れるべきだと考えているわけではありませんよ。



かっこいい車を発見しました。トヨタのMR2のようでした。けれども、こいつには煙突がついているんです。燃料は何でしょう。……薪でしょうか？ 石炭でしょうか？……もしかするとペルーではこのスタイルが当たり前だったのでしょうか。

この車はかっこいいですけど、僕は車がきらいです。だって、大きいじゃないですか……。もし、道を間違えてしまったら、引き返すのにもひと苦労です。町中を走っていてどこかのお店に入ろうとしても、車で駐車場がなかったら困ってしまいます。

そんなとき、ベストはチャリンコでしょうか。チャリダーは道を間違えてもひょいっと向きを変えればそれで解決するし、店先にチャリンコを止めて怒られることもありません。

日本国内で、僕はその場で勝負していくチャリダーだったりします。チャリンコを降りて、国外を旅をしてもその精神は同じです。その場で勝負、言葉がしゃべれなくても何のその、身振り手振りで乗り越えていくんです。

勝負……自分を大きくするには慎重さと大胆さを兼ね備えていることが大事になると思います。長期の休みだったら、それを充分に生かすことができます。さあ、旅に出ましょう！

で、結局、この車の煙突は一体何のためについてるのでしょうか。

はた織り機



ナスカの地上絵は見終わりました。第二の目的はマチュピチュを自分の足で踏みしめること、さあ移動です。

マチュピチュまではぐるっと回り道をしなければなりません。最初は全然計画していなかった土地を通って行くことになります。とりあえず、アレキパという町を目指すことになりました。移動手段はバスです。

バスターミナルでバスを待つんですが、そこで目にするモノの不思議なことといったらありません。どう考えても日本のバスターミナルだったらないモノがたくさんあるんです。たとえば……日本で機織り機をバスに積み込むとする人は、少数派じゃないでしょうか……。

どうも、バスというのは人間と一緒に様々なモノを運ぶためにものすごく大切な道具のようです。一体どこに乗つけるのか、分らないようなでかいモノも運んでしまえます。屋根の上にもくつつけるのかもしれませんが……。リマで僕は洗濯機まで見てしまいました。

それぞれの土地によって「大切なモノ」は違うと思います。価値観の違いでもあります。僕は僕だけの価値観じゃなくて、たくさんさんの眼をもってモノの見方を工夫しなければなりませんよね。

同じような格好で眠っていますねえ



何かを待っているとき、人は眠たくなるものです。この人たちも有り余る時間を過ごしていたんでしょう。他にすることもないので眠ってバスを待っています。プラスチックのいすで、おしりがすべっていたりするんですが、上手に眠っていますよね。よっぽど疲れていたんでしょうか。

僕は何もしてないとき、とにかく眠たくなってしまいます。電車に乗ったときなど、しばらくは外の景色を見て「ほほう、美しいではないか……」などと思っているんだけど、そのうちに夢の世界の景色を見ることになってしまいます。スムーズに夢の世界へ入ってしまうと、夢の中のことが現実のことがゴチャゴチャになって、パツと目が覚めたときに混乱したりするんです。

特に「居眠り」という状態の時には口クなことがありません。ピクツと動いたりして妙にイヤな感覚になったりします。高校のことだけど、授業中に眠っていた野球部の友達がガン！と机を鳴らして起きたかと思うと、「……ボールが飛んできた……」などと言っているんです。大爆笑でした。

眠っていたのはおばちゃんです。決して僕はおばちゃんが大好きだという種類の人間ではありません。それでも、やっぱり見ていてかわいい姿だと思いました。そりゃ、写真に収めたくもなりますよ……。

放送禁止……



なぜか、妙に頑張っちゃおうと力んでいる人がいたり、そこまでするか、とツツコミを入れたくなることもあります。シヨークエスのおみやげを見て、「おい、「コラー」とツツコミを入れ、ニヤリと笑いました。

インカの文明ってのがどんなモンだったのか、僕は知りません。現代日本に生きる、ごくフツウの人間だから、知らなくて当たり前です。……で、想像をしてみるんです。すぐくおらかな文明だったんじゃないか、と思います。高度の技術を発展させていたみたいだけど、その技術に負けないくらいの人間性を持ち合わせた生活だったんじゃないか、ということです。

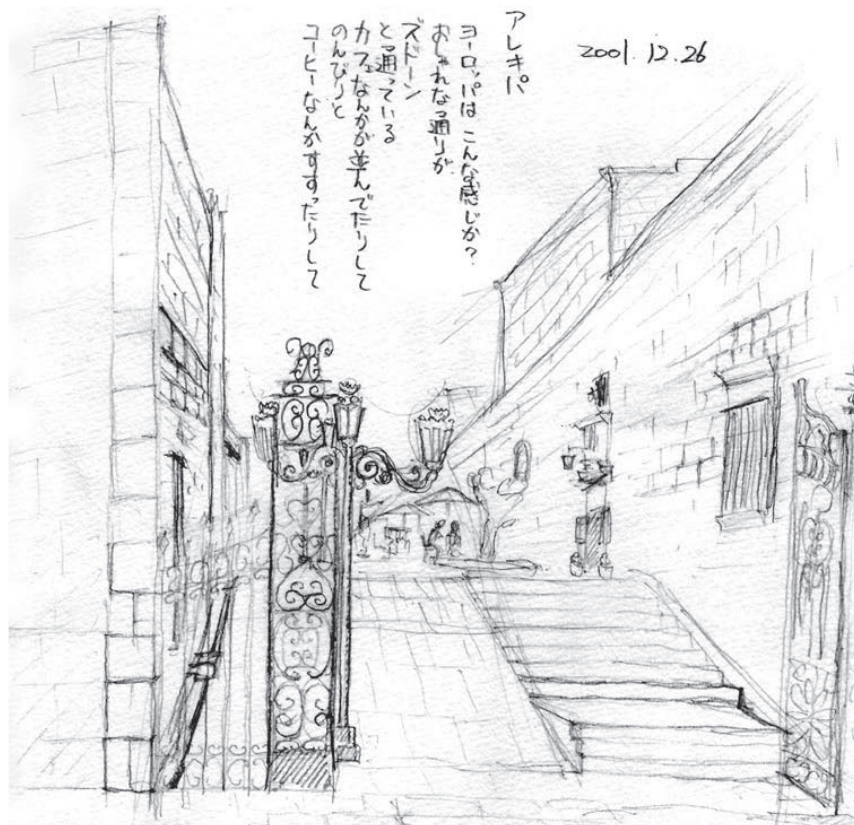
人間のシンボルとっていいのか、よく分からないけど、そりゃ、動物には変なモンがくつついていたりします。それをそのまま土器に表現してしまうんだから、よっぽどそれが明るく公に語られていたかってことじゃないでしょうか。ちょっと顔が赤くなるような会話が白昼堂々行われていた……のかもしれない。

「おい、昨日の晩〇〇××、ピーー！」

「そうね、〇〇でピーで、△△ピー・ピーよね」

ムチャクチャな会話です。

決して僕がいつでもどこでもそんな話をしたいわけじゃありません。そんな場も必要かな……とは思っけけれども……。



ペルーと一口に言っても、そりゃ広い国です。首都のリマから国内潜入を果たしたわけだけど、そこから地上絵のナスカを見ながら移動していきます。最終目的地であるマチュピチュへは、大回りのバス移動をしなければなりません。そのルートの途中でおしゃれな街に出会いました。

ヨーロッパの街に迷い込んだかのような錯覚に陥ります。石造りの街です。カフェで一息入れる人々がいて、ちよつとした飾りのついた門があり、美的センスをそえられる所でした。その昔、ヨーロッパの人々がこんな街を作ったんだと思います。故郷を思い、それと同じような雰囲気の間を作りたいことで自分たちの生活をも作り出していたんでしょう。

でも、僕にとってはたまたま訪れたという街です。ふん、と辺りを見回し、そこら辺へヨイショと座り込みます。汚い汚い格好でスケッチを始めます。通りがかりの人たちが、何じゃコイツってな目でちらちら見ていきます。そんなことを気にしていたらスケッチなんかできません。ウリヤウリヤとペンを走らせ、街を紙の中へと取り込んでいきました。これで、この街も僕のモノです。

かけた時間の分だけ、相手は僕の中に残ります。僕の中にアレキバという街の名前が刻まれました。



手を振っているように見えます……。あのサングラスの向こうに輝くのは、いったいどんな瞳なんでしょう。惚れてしまいです……。ナイスバディの人ですが、この人、どうみても男なんです……。

世の中には、考えられないことが時々起こります。僕の背中には冷や汗が流れ続けました。石造りの町並みを歩き、ヨーロツパの香りを感じている僕の前に、キョーレツなインパクトで現れた人物でした。他の何をおいても、目はそちらへと向かってしまします。どれだけ目を背けようとしても、視線は吸い込まれていくんです。困ってしまいました。そして、カメラまでそちらへと向けてしまったんです。

きっと何かの宣伝だと思います。僕にはこの国の言葉が分からないから、まさに馬の耳に念仏だけど、アピールする力としては最大級の力を発揮していました。これこそ宣伝といった感じですよ。人の目を引くことができる存在、人から認められる存在……。とても大切なことです。

情報は受信だけでなく自分の許容量がパンクしてしまいます。自分から発信することの意義をボォーンと見させてもらいました。別に僕の胸や尻が大きくなくても、何か発信できることがあるはず……。探していこうと思います。



見ただけでゲップが出そうです。炭酸飲料の嵐です。空っぽではない、中身が入ったペットボトルで塔が作られ、華やかに飾り付けられていました。

リサイクルとかいう名目でペットボトルを寄せ集めた芸術作品を見たことがあります。なるほど、そういう使い方もあるのかと納得しました。照明を当てて夜にその作品を見たときには、また、かなり納得の度合いが上がりました。メチャクチャきれいだったんです。芸術作品としてすてきでした。

じゃ、中身が入ったペットボトルだったら……、思いつきり宣伝なんでしょう……。それまで、あんまり見たことのない形態の方法でした。少なくとも僕にとっては新鮮な驚きを与えてくれる方法でした。

パッと見ただけで何者かが分かるというのはすごいことだと思います。色、形、文字……様々な工夫が盛り込まれているけど、どこの国に行っても「これ」と分かるのが世界レベルのすごさです。あの赤い色に独特の文字の形……ホント、見ただけで口の中に炭酸の刺激が走ります。全面降伏です。

でも、もしかしたら国によって微妙に味が違うのかもしれない。日本のカップラーメンでも関西風味とか、少しずつ味を変えているらしいですから……。



木を見て森を見ず……ああ、なんて含蓄のある言葉だろうと思わされます。僕のような視野の狭い人間には耳の痛い言葉でもあります。どうしても一度に二つ以上のことに気を配ることができなくなり、一点集中型・怒濤の一方通行が始まるんです。

舟が出発してから、ふと後ろを見ると……、美しい街の姿が残されていた。細かな家々が独特の淡い土の色を輝かせています。日本だったら屋根瓦の色が並び、キラキラと太陽を映しているのかもしれませんが。

昔ながらの光景が広がるとき、僕らはその空気を懐かしいものと感じます。自分が生まれる遙か昔のことでも、何やら懐かしく感じてしまうんです。もしかしたら全然違う姿なのかもしれないけど、それでも懐かしいと感じさせられてしまうから恐ろしいモンです。人間の潜在意識という部分が僕らの本能を揺さぶっているんじゃないかと思っています。

街の中を歩いていたら、ただ個々の家を眺めて通り過ぎていたはず。その場を遠ざかって湖上から振り返ったからこそ、僕はプーノという街並みを感じ取ることができたわけです。所詮、僕の目は近眼なんです。視力は〇。一もないくらいなんです。仕方ありません。

とにかく……木を見て森を見ず……なんです。



チャプチャプと波をかき分けている……というよりは、適当にその辺に浮いてるだけ、ってな感じです。チチカカ湖にはそんな島がありました。

もちろん、そんなことも事前に知っていたわけじゃありません。目指すマチュピチュまでの途中で、バスを待つ時間がたっぷりあったから、どうせヒマだし湖へ向かったんです。

ヒマつぶしの相手としてまず最初に僕が向き合うのはガイドブックです。何かしら文字が書いてある物を眺めていると、どんな時間は過ぎていきます。どれだけつまらない文章だったとしても……いや、つまらなければつまらないだけ……好都合なことに、眠気が襲ってきます。残念ながら、この時ガイドブックを見て「おおっ」と思っていました。

浮いている島なんて、どんなモンだろうと思うわけです。ずっと同じ場所に浮いているんだろうか、移動してしまうんじゃないか、そしたら地図ができないじゃないか……、なんて全然必要もない悩みを抱えて、その島へ向かう舟の上でぼんやりしてみました。

フワフワと固定してないってことは、ものすごく不安定だけど、逆に考えたらものすごく自由な感じもします。僕にも自由を下さい。これ以上に、もっともっと自由を下さい。……ぜいたく？

かわいい……



強さ、やさしさ、温かさ……、人の性格を表すのにも使う言葉です。この他にもいろんな性格があり、いろんな人が地球の上で生きています。そして、いろんな顔をしてそれぞれの時間を過ごしています。

湖の上にはおもしろさを感じさせる顔が浮かんでいました。どれだけ大きくたって、どれだけ牙が生えていたってその顔には愛嬌があふれています。感じられたのはおもしろさでした。よく考えたら、全部のパーツが葦でできているんだから、かなり独特な舟のはずです。その個性をもって遙か昔から使われている伝統的なものかもしれません。それを見て、まずおもしろさを感じてしまうのは失礼でしょうか。それでも……、こんな顔は好きです。僕自身の顔は……長いです……。そんな僕の顔をチラリと見ただけで笑う人もいます。「ええい、失礼なヤツめ」……困ったモンです。自分はどんな言葉で表現される人間だろうか……と考えてしまいます。怖さだとか冷たさなどを感じさせる人間になりたくないと思って生きているんですけど……。顔を見たとき、人に不快な印象を与えたくありません。できれば幸せになってほしいと思います。何よりも、笑顔……。無理にでも、笑顔……。内側に悲しみがあっても、笑顔……。無理しすぎかな……。

特別おいしくない……



ひよい……誰かが足の下の葦を取り上げました。サラリサラリと外側の部分を剥ぎ取っていきます。中には白い芯がありました。ぱくつ……えっ……ムシャムシャ……おっ……ドキドキ……ぱくつ……ムシャムシャ……。こんなことが起こったか分かりますかねえ。食べてみました。

そのまんま食物繊維って感じの代物です。味も素っ気もない、サクサクとした変なモンです。ものすごく軟弱なセロリだったら、あんな味になるかもしれません。そんなモノでした。

湖に浮いた島……その島を形作っている葦……それを食べる人間……、食べ続けたら溺れてしまうじゃないですか。困ります。うん……そうです。この島の葦は、おいしくはいけないんです。おいしかったら、みんなでムシャムシャ食べ尽くしてしまいます。それはエライことです。

ポテトチップスとか、食べ始めたら止まらなくなるものがあります。僕は「ええ〜い、食べ尽くしてしまえば気にならないはずだ!」と思って怒濤のように食べてしまいます。夜中なんてそのモードに入ってしまうと、「体に悪いぞ〜!」ともう一人の自分がささやきます。

おいしいもの、そうでもないもの……何でもイイです。味は口にしないと分からないんです。世界を食べ尽くしたいです。



受付嬢がいます。僕を待っていてくれる人たちです……ウソです。でも、新しい世界へと踏み出そうとする時に、ゲートがあり、そこに人がいたら、ちよつとうれしくなります。

チチカカ湖ツアーは二つの島巡りが組み込まれていました。何がどのように有名なのか……、見所は何なのか……、全く分かりません。それでも新しい世界は僕の心を揺さぶってくれます。酸素は薄いけどきれいな空気、日焼けはするけど青い空、船酔いにするけどきらめく水……魅力的です。

初めてのことに出会い、それを見たり雰囲気味わったときの思いを言葉にするのがどれほど難しいことか……、と思います。僕にはそれだけの言葉がないことを感じるんです。自分にはできないこと……それを目の当たりにしたとき、何かが変わるのかもしれないかもしれません。走り、跳び、投げ、自己の体の限界と向き合います。「もう無理だ」と思うこと、「自分には無理だ」と思うことが次から次へと展開したら、鳥肌が立ちます。

人間ってのは、自分がないことを上手に自分の中に生かすことができる生物だと思います。ストレートに、あるいは、アレンジを加えて新しい世界を自分のものにしようとしています。じゃ、僕はどうするか……、できる限りのことを自分の言葉に変換して、鳥肌が立つくらいに表現できたら最高だ、と思うんです……。



大工さんってのはすごい人だと常々思っています。何かを作り出す仕事のすごさです。なんていうのか……、プラモデルを作るのとは全然違うわけです。特に木とか石の建物だったら、そのすごさを強く感じます。材料の特質を見極めながら、昔からの構造の良さを受け継ぎながら、自分の想像力も生かしながら、住む人のことも考えながら……建物ができあがっていくんです。

だからといって、大工さんの衣装まで同じように継承されなければいけないことはないと思うけど、みんな同じような服装でした。いわゆる正装っていう姿でしょう。でも、みんなシャツとして、カッコイイ姿でした。

みんなが同じ格好をしている場所で連想するのは学校という場所です。男は学ラン、女はセーラー服だったりするわけです。ビシッと決めていると、実はやっぱりカッコイイんです。でも、妙にズルズルウっとした格好をしている人がいます。ツンツルテンで摩訶不思議な人もいます。僕のセンスからすればカッコイイとは思えません。

全てのことが同じじゃなければいけないと思っているわけでもありません。「みんなちがってみんないい」なんて考えている人だっているし……。でも、「みんな同じでみんないい」って考えたってそれもいいんじゃないかと思うんです。……いいじゃん。



僕は、自分が目指している所から、どのくらい離れているんでしょう。自分は一体どこにいるんでしょう。さっぱり分からなくなってきました。これから先というものが全然見えません。

島の小高い所に世界のあちこちを示す矢印が立っていました。ROMA, MADRID, MEXIC, TOKIO……矢印の行き先はそれぞれです。方角、距離ともにバラバラです。どこにあるのか、さっぱり分かりません。

SHIZUKA ってどこかに書いてないでしょうか……。多分ありません。外国で、SHIZUKAを知っている人は、かなりオタクキーな人だと思います。僕の変するSHIZUKAをもっと宣伝したいモンです。矢印を一つ増やしてくればよかった、と少し後悔しています。そりゃ、Mt. Fuji のある場所だったら有名になってもよさそうな気がします。

有名になるためには……いや、有名にならなくても……。自分の人生は自分で決めていきたいんです。他の人に決められて、そのレールの上をツルツル走っていくだけの人生なんて、おもしろくも何ともありません。四輪駆動車のようになどでも構わず、自分が進む方向へと走り抜けていきたいんです。自分が目を向けたその先へとガンガン進んでいきたいんです。

矢印の先を目指すため……。勝負です。



僕はチャリダーであり、ライダーであったりします。もし四つもタイヤがあつたら、それは邪道なんです。タイヤは二つ以下というのが基本じゃないかと思っているわけです。そう、タイヤは二つ以下……一輪車も二つ以下です。ムムム……乗れません。

同じ一輪車でも、作業用の一輪車なら使うことが出来ます。手で持って押していけばいいから、何とか出来ます。よく、学校の物置などに置いてあるヤツです。あの半分空気が抜けたような、気合いのないタイヤの一輪車をあてがわれ、僕らはよく草取りなんぞをやらされました。

ところが、僕の目に飛び込んできたのは妙に頑固な一輪車でした。空気なんか全く入っていません。ゼロパーセントです。車輪の枠にゴムがバタバタアッっと張り付けてある、無骨な姿のヤツでした。荷物はヒモでくくりつけるみたいです。利用価値が高いのか、高くないのか、使ったことのない僕にはイマイチ分からない代物です。

僕の前に佇んでいました。きつと……おそろく……多分だけど、この場に適した構造なんだと思います。僕には使いこなせないほどの、すばらしい機能が満載の一輪車なんです。たった一つしかないタイヤ、それを生かし切るのがベテランの味です。……誰が使うのか知らないけど……。



空高く昇った所で、密室の中、ロマンチックな空気を感じます。決して急ぎません。ゆっくりゆっくり高まっていき、最高潮を迎えます。ライトアップなんてされていたら、それも格別でしょう。遊園地の観覧車です。

……そんなイメージが僕の中にはあったんです。……ガラガラと崩れ去っていききました。フェンスの向こうに見えたモノを一言で表現するなら「カゴ」だと思います。そこら辺の公園の遊具からいくつカブランコを取ってきて、ゴンゴンとくっつけたら、一応の観覧車の完成です。そんなにお手軽に観覧車ができるのか、それは知らないけど、質素倹約、質実剛健、花より団子……乗ることに意義がある……そんな観覧車が目の前には存在しました。

我が家には小さい頃、足で地面を蹴って進む自動車の乗り物がありました。はつきりは覚えてないけど、妙に燃えて乗り回していたように思います。今となっては本物の自動車に乗ったり、バイクに乗ったりするわけで、何十倍ものスピードで進むことができる人になっていくけど、あの原始自動車は全く別モノの楽しさで僕をパライスに連れていってくれました。ものの感じ方なんて、その時々で変わるし、人によっても違う……どう考えるか、それが大切なんだろうと思います。

でも、観覧車はロマンチックなのがいいです……。



たとえば夏休み明けの学校……、それまでの家での生活から一転してしまい、どうしても体が動かなくなったりします。

家の中にいたなら自分のペースで何とかなるモンです。のどが渴けばそれをいやすのも自分のペースで大丈夫です。冷蔵庫をのぞいたら冷たいジュースなんか入ってることもあるし、かき氷だつて食べられるかもしれないんです。でも、一度学校という場所に入ってしまうと、どうしたって自分勝手にはできません。授業中にのどがカラカラになって、体の中が砂漠状態になってしまします。

本格的にのどが渴いてしまったとき、一番「うまい」と思える物は何だろう……？ って考えました。シンプルに「水」がいいような気がします。他の何かに遠慮することなく心の底から「うまい」と叫べそうな気がするんです。もちろん、いろんなジュースがあるし、それを飲んだらおいしかったりすると思います。でも、もしも、自分が砂漠の真ん中でラクダと一緒にいたとしたら、のどが渴いたときに、「水うゝ」とうめく姿が想像できるんです。

僕は物事をぐちゃぐちゃ複雑に考えすぎるくせがあります。もっとシンプルに考えなきゃいけないんですよね。何をどうすればいいのか、今、自分がしなきゃいけないことは何なのか、頭を整理して考えて、それで、行動に移したいと思います。……決意！



人々の憩いの場、そんな所が街の中にあります。日本の中だったらだいたい公園みたいな所だと思います。ま、人によつては駅前だったり、コンビニの前だったりするんですけど……。

ペルーにはだいたい〇〇広場とかいって、街のど真ん中に何かしら広場があったりしました。何もなくても、また、何かがあつても、人々はそので思い思いの時間を過ごします。僕が訪れた時は年の瀬も押し迫った頃だったから、パレードなんかもあったし、みんな心がウキウキしていたように見えました。全然知らない人たちがその場に出てきて、高揚した時間と空間を共有するんです。

僕が全然知らない人たちと本格的に出会ってしまった、そんな初体験は高校へ入学した時だったかもしれない。それまでは何となく近所のヤツらが肩を寄せ合うように通っていた小学校であつたり中学校であつたりしたのに、遙か遠い世界に住む人たちが一同に集まってしまうんです。オリエンテーションだったか、学用品を買いそろえる機会の、あのフサフサした雰囲気を出します。なぜかサッカーシューズまでみんなお揃いで購入し、三年間を共に過ごすはずの見知らぬ人たちとの出会いでした。

人が集まる場所、そこにはどんなきつかけがあるか分かりません。クスコという街、その広場で、僕は人混みに紛れて新たな世界への期待に胸をふくらませていました。



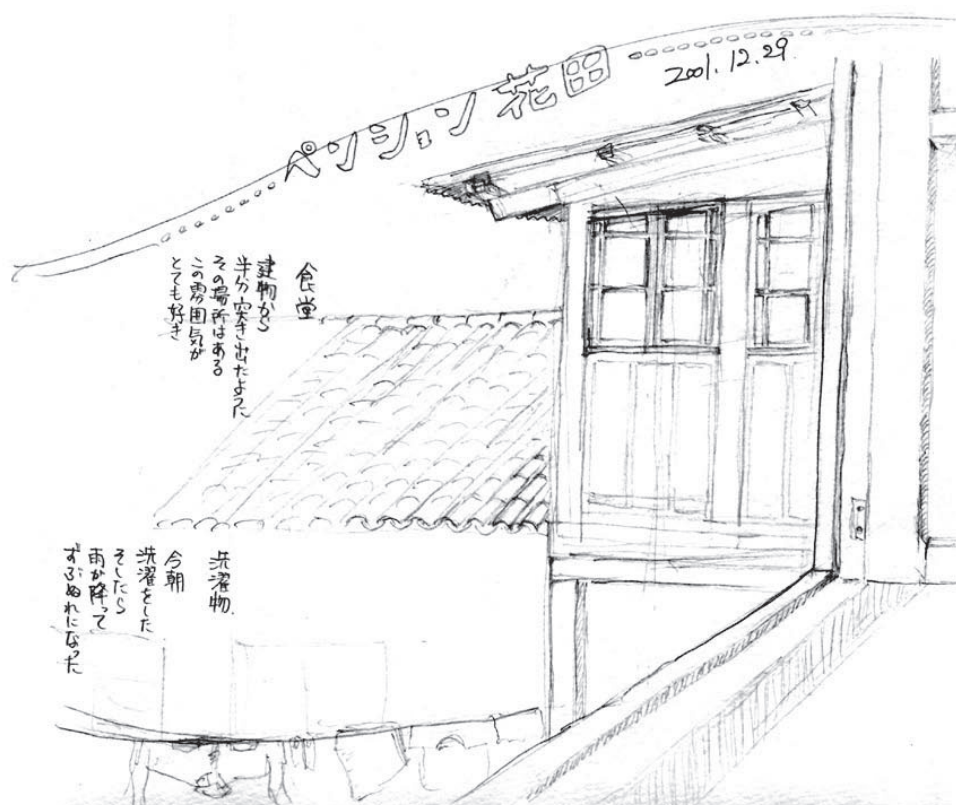
ペルー国内、いたる所にスペイン語が溢れています。でも、日本語が読めないとかどり着けない所がありました。ドアの上の部分に木彫りの看板が掲げられています。……カタカナと漢字でした。

地球上のあちこちに旅人がいます。あちこちの場所で出会うその手の人間の中に、日本人という種類の人間がかなりの割合で含まれています。お金持ちの国・ニッポン……外国旅行をする人が多いということです。そう、「ボクタチハ金持ち」なんです。そうでなければ簡単に国外へ出かけることはできません。

ペルーへもたくさんの日本人が訪れるみたいです。それで、日本人が群れる宿というのがあったりするわけです。木彫りの看板には「ペンション花田」と書かれています。……ズバリ日本語です。僕はこの日本語を目指して細い路地を歩いて行きました。分かりやすい所にあるのかといえば、そんなことはありません。ガイドブックを見て、ドキドキしながら前へ進んでいくんです。初めての場所、スペイン語も話せない、周りの人たちが僕を見ているような気がする……もしかしたら強盗に出会うかもしれない……緊張の宿探しです。

カタカナと漢字の看板は、僕にとってオアシスへの入り口でした。ホッと出来る、癒しの場所へのゲートだったんです。

憩いの場



いつでもどこでも誰にでも、リラックス出来る場所があったら、人間ってもっともつとやさしくなれるような気がします。周りを見渡してもストレスがたまるばかりだったら、嫌になってしまいます。もちろん、リラックスしてるだけじゃダメで、場合によっては緊張感を作り出せるような環境だったら最高です。学校の教室なんか、そんな場所じゃないかと思えます。教室の中には自分の仲間がいて和やかな気持ちになるけど、先生らの力ミナリだつて落ちることもあるわけです。

ペンション花田で、僕が好きだったのは食堂です。と、いっても、僕はここで食事をするのが好きだったわけじゃありません。そこで、他の宿泊者と旅の話なんかをしながらコカ茶をする時間が好きだったんです。そのコカ茶は無料・タダでした。だから、コカの葉っぱをムンズとつかんで、ボンとカップに放り込み、ドバとお湯を注ぎ込んで、ゆるゆると何杯も飲みまくるんです。もちろんコカ茶でコカインのような体験はできないけど、なんか、変な期待をしてみましたりして……。

少しだけ空に飛び出した、この空中の楽園で、僕は今までの旅を心に浮かべ、これからの旅に思いを馳せていました。しっかりと地に足もつけず、かといって糸の切れた凧ではない、ちょうど心地よい空間だったんです。



「ホッ」……なんか温かい雰囲気を感じさせてくれる擬音語です。マンガなんかで□元から「ホッ」とか出ていたら、必要以上に力が抜けてしまいます。

ペンション花田で朝食をとり、ヒマな時間をそこで過ごしたりします。心の洗濯です。目の前に転がった、他の宿泊者のバナナをうらめしそうに眺め、思わず手が伸びそうになるのをこらえ、コカ茶をすすります。

「コカ茶をすすりながら、そこにあつた宿帳をめくってみました。ふふふん♪、と何気なく見ていたんだけど、ふん！ と自分の目がいっもの二割アップくらい開いたように感じられました。たくさんの名前の中に、かつて中国で出会い、ベトナムで再会した人の名前が書かれていたんです。その人は僕よりも早くペルーを訪れて、宿帳の中で僕を待っていてくれたんですね。懐かしさがこみ上げてきました。

世の中の出会いは偶然の連続です。ああしたい、こうしたい、と願ってみても、なかなかその通りになるモンじゃありません。何かの縁で誰かと出会い、話をし、ケンカをし、笑います。それは当たり前のことです。イヤな人と出会うことだってあります。それも何かの縁です。イヤだと思った人ともいろいろ話をしてみ、それが何かのスタートになったら、ラッキーです。



赤というのか茶色というのか、とにかく屋根の色がみんな同一歩調でガシヤガシヤと向こうまで広がっていました。結構、ゴミゴミした街に見えます。玄関を出て足を踏み出したら、整然とした石畳だったり、ビシビシの石壁だったりするのに、食堂の窓から眺めた街並みは、ガシヤガシヤした雰囲気でした。

街の中心にはデカイ聖堂があり、広場があり、そこから人々の営みがスタートしているのはよく分かります。中世ヨーロッパ的な世界なんだと思います。中世などという時代はもちろん、ヨーロッパの街を歩いたこともないのに分かるわけがないけど、何となく断定できそうな気がしていました。

僕が抱いているヨーロッパ人の印象が間違っているのかもしれませんが。人間が全てを熟知して、その周りのものを自分に合わせて、多少強引でも変化させてしまうという印象なんです。軟弱な僕にはあまりない発想だといえます。僕は、周りのものに自分を合わせようとしてしまうんです。大きな衝突を避けて、なんとか上手にその場をごまかしていこうというセコい発想です。それはそれで大切なことだと思っているから、そんな生き方をしているわけですけど……。

日本人が多く泊まる宿の食堂という、限られた空間で考えた、自分勝手な僕の思いです。広い視野がほしいと、心底思います。



「さあ、行くぞ」と思った瞬間、自分の前にある道はなにか別の物に見えてきます。目指す場所へと続く自分の道です。

クスの宿にたどり着くまでの道は、とんでもない坂道でした。空気も薄いから、何倍も疲れるような気がする道です。着いた日にその道を見たときは、かなりびっくりしました。道と家との境目を見てみると、分度器かなんかで測ってみたいと思えるくらいでした。

「え?」……びっくり……、そんなことって……まさか……いや現実です。強烈な坂道でサッカーをしていました。蹴れば普通に転がって戻ってきます。すごすぎます。ものすごいテクニクが必要になるように思えます。とても僕にはできません。なにか「できる」とか「できない」とか、簡単に環境のせいにしちゃいけないですねえ。

場所がない、時間がない、金がない、ルールが厳しい……、いろんなことが目の前に立ちはだかっています。それをどんな風に乗り越えていくのか、ってことが一番大切なことだし、価値のあることなのかもしれません。限られた環境の中で、どれだけ頭を使えるか……そこに何かの秘訣があるはずです。やる時や、やる……そんな人間になりたいです。坂道かもしれません。でも、確かに道は、目の前に広がっているんです。

リヤマがいる……ありやまあ……



道端に毛むくじゃらなモンが座っています。自分がそこにいるのが当たり前のような顔をしています。そして当たり前のようにそこら辺へウンコをしていました。そのウンコを当たり前のように人間が蹴飛ばして片づけていました。

日本では犬の散歩をするとき、片手にロープ、反対の手にビニール袋という姿が定着しています。そしてせつせと犬のウンコを拾って歩きます。「道端にウンコが落ちているなんてとんでもない！」という世の中です。

ペルーでは飼い主と一緒にリヤマがそこら辺をフラフラしていて、時々ウンコをしていました。そしてせつせと……かどうかはよく分かりませんが……リヤマのウンコを蹴飛ばしていました。インカ帝国が築き上げた石組みの上で、たぶん昔から同じような光景が続いているんだと思います。

そこではインカ時代からの時間が現在も並行して流れているように感じました。日本では遙か昔のこととして思ってしまうような時代というものを、ペルーでは身近に感じたんです。

過去のことをどこかへ追いやっている日本と、過去を同時並行して感じているペルー……。どっちが正しいとか間違っているとかじゃないと思うけど、でも、何か大切なものをリヤマのウンコが教えてくれたように思います。



そこに住む人々と同じようなつもりで街を歩きます。でも、なかなか平然として歩き続けることができません。目の前には僕を楽しませて、歩みを遅くするモノたちが待っているからです。そして、ここでも……壁の中に扉が埋まっています。正面から見たら入り口だって分かるけど、ちよつと離れて横から見たら、どこに入り口があるのか分からないと思います。秘密の扉みたいで、ちよつとカッコイイ感じがします。

僕はヒコーキの予約状況の確認をするために旅行会社の支店を探していました。フラフラ歩いてどうやら店の前にたどり着いたものの、本当に入っていい所かと少しだけ悩んでしまいました。壁に埋め込まれたようにくつついて、中の様子もよく分からないような入り口なんです。かなりのドキドキです。

外側から見た、その入り口のイメージは僕に対してかなりの想像力を与えてくれるモノでした。特に珍しいものじゃないのかもしれない。でも、僕にとってはものすごくドキドキするモノだったし、ワクワクする代物でした。ものすごくステキな世界が広がっているかもしれないじゃないですか。サングラスの向こう側に、ウルウルとつぶらな瞳が待っているのと同じくらいの期待です。クスコの街では普通の光景に、これだけ喜べる幸せ者です。



普通の光景かもしれませんが。でも、外側から見たときの衝撃を受けた僕には、それがただの道の姿には見えませんでした。蜂の巣の中に入った気分とでもいうんでしょうか。なんでこんなモンがあるんだろうという感覚です。

入り口は壁に陥没したような状態です。大きな声で僕ら観光旅行客に「いらっしやうい！」とアピールするような窓口じゃありません。「ホントにやる気あんのか？」とツツコミを入れたくなるようなお店たちでした。予約の確認をどうしてもしなければならぬ僕は勇気を持ってその店に突入しました。

違うんです。そう、外見だけで判断しちゃダメなんです。内側ではメチャメチャきれいなオフィスが僕を迎え入れてくれました。とても壁に埋め込まれた店の中には思えません。外側のやる気なさそうな店構えとは全然印象が違いました。

反省です。どうしても見た目だけで判断してしまう情けなさに反省です。人間だって同じです。内に秘めたる闘志はきつと誰にもあるんだと思います。どこで燃えるか、それは違うかもしれませんが、みんな燃えたいんじゃないかと思うんです。心のパワーを何か一つのことにつけていけたら最高です。指揮者の手の動きに集中したらすぐく前向きなものができます。

内側からこみ上げるものを大切にしていきたいです。

出たな！ 机人間！



机が歩いていました……。

歩道をゆつくりゆつくりと、机が歩いていました……。

ビシッと整った石の街を、木でできた机が歩いていました……。

たとえば、ネパールの山の中、ものすごく大きな荷物を背負ったおっちゃん、ゴムズリでひよいひよい歩いていくのを見たこともあります。信じられません。たぶん、自分の体重よりも重いような荷物を背負っていたりするんです。ホント、信じられません。人間の労働力の偉大さを感じます。

クスコの街を歩いていた机には人間の足が生えていました。進化論から考察するに、机に足が生えて二足歩行するような時代にはまだ至っていないと思います。そこまで進化した机がいるなら、霊長類ヒト科の者として僕はもっと進化していてもよさそうなモンです。机の下に見えるものは、確かに人間の足でした。

机の運搬……、日本だったらトラックを使っていることだと思います。エンジン付きの物の手助けを得て、人間は楽をさせてもらうのが当然という世の中でしょう。労働力の貴重さを感じにくい世の中なんです。だからこそ、本当なら自分の体で労働し、その大変さを学ぶべきなのかもしれません。大切なことを学ぶのに、自分から能動的に動かなければチャンスは巡ってこないんです。整然と石に囲まれたクスコの街を、机が歩いていました……。

大地の声を聞け……



母なる大地に抱かれて、僕は安らぎを得ます。何とも説明が
できないような喜びがあるんです。

実際に、地面に顔を、耳を近づけたら何かが聞こえるか……、
聞こえないと思います。せいぜい虫の鳴き声が聞こえるくらいの
モンです。下手をしたら顔を近づけた、その鼻先にかぐわしき香
りが漂い、さらにその先には犬のお尻があたりするかもしれま
せん。あんまりうれしくありません。

街のだ真ん中の公園で、同じような格好をしてうつぶせになっ
ている人たちがいました。妙にかわいらしい姿です。堂々と仰向
きになって寝るのは抵抗があったのかもしれませんが。仕事の途中
かもしれません。見つかったら怒られてしまうのかもしれませんが。
でも、緑のじゅうたんの上で昼寝ができれば、ものすごく気持ち
いいはずです。嫌なことを全部忘れてゆつくりと静かなひと時を
過ごし、平和な心地になれるような気がします。

平和な大地を称えたいと思います。静かな大地を誉め上げたい
と思います。豊かな大地です。僕は普段、そんな毎日のように
大地に感謝しているわけじゃないけど、何かふとした瞬間に、ポツ
とそんな温かい感覚がやってくるわけです。殺伐とした心でそれ
は感じられないと思います。自分の心を安らぎで満たせたらいい
なあ、と思います。



肉は大好きです。僕は雑食性なので、だいたい何でも食べますが、肉はかなり好きです。動物性タンパク質が好きなんだと思います。何というのか、「食べてるぞ〜」という充実感があるような気がします。

動物性タンパク質ということでは、卵も好きです。以前、どうしても、その日のうちに十個の卵を消滅させなければいけなくなつて一気に食べ尽くしたことがあります。何の無理も感じませんでした。ちなみにニワトリの卵でした。

肉にしても、卵にしても、僕は命をいただいています。それも、かなり無造作にムシヤムシヤといただいています。でも、その食べ物が命を持っていたんだと感じる機会が少ないように思えるんです。ま、仕方ないんでしょうけど……。

うわっ、と思いました。市場を歩いていたら、見るからに命を売っている場面に出会ってしまったからです。かごの中にはウズラがいてエサを食べています。それと一緒に卵が移動してきます。「私たちが生みましたあ」と主張しているかのようでした。命を大切にいただくように主張しているかのようでした。

売り手としては新鮮さをアピールするための方法のほうです。……パック入りの卵を見慣れている僕にとっては、ものすごく衝撃的な売り方でした。

JIRO
FRANKLIN

靴磨きの少年による
我輩の顔。
その場のみんなで大笑い。



Jiro

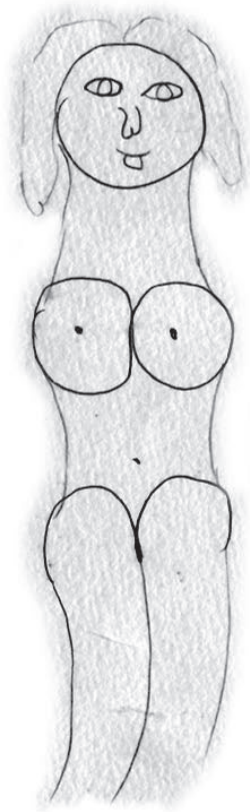
2001.12.28

街角で、たぶん、ぼろっとしていたんだと思います。靴磨きの少年が近づいてきました。靴を磨きに來たんでしようが、僕の靴は磨くような靴じゃありません。ボロ靴です。少年も僕の靴を見て、また、僕の顔を見て納得したようです。それでも、何かしら話をします。なんとなくスペイン語会話集を見ながら、あゝでもないこゝでもないが無駄話をしていました。……「どこから來たの?」……日本。「名前は?」……じろちょう。とか何とかいう会話です。

そこで、僕の秘密兵器、スケッチブックの登場です。自分の顔をマンガ風に描き「ニョ」と文字を書き込みます。靴磨きの少年は、僕のスケッチブックを奪い、さらさらと何かを描き始めます。そしてやっぱり「ニョ」と書き込みました。僕はスケッチブックを自分の顔に近づけます。とたんに大笑いです。周りにいた人たちも「何じゃ?」とのぞき込み、みんなで大笑いでした。日本の中では僕の顔は長い方だと思えます。でも、ペルーの中ではそんなに長い部類じゃなかったようです。ただ、少年が描いた僕の顔は丸顔……、いくらなんでも似ていませんでした。

絵は人の心を描き出すもの……、少年の心に映った僕の顔は穏やかな丸顔だったんですね。ちよっとうれしい気がします。彼にとつて僕は、怪しいけど穏やかな……ボロ靴の男だったわけです。

いつでも、どこでも……



380とヤツは僕のスケッチブックに書き込みました。靴磨きの少年です。

WXYと僕はノートの片隅に書き込みました。子どもの頃の話です。靴磨きの少年は、スケッチブックを九十度回転させ、ふにやふにやと線を描き加えていきます。チョイチョイと点も描き加えます。おまけに目、鼻、口まで描き加えました。神聖な僕のスケッチブックへ……。

子どもの頃の僕らもふにやふにやと線を描き加えていきました。僕らの方がもっとシンプル……、それで完成です。神聖なノートの片隅へ……。

どちらにしても女の人の裸が自動的に描かれることになります。本当にどこにでもある種類の落書きなんですね。びっくりしました。世代を越え、国境を越え、子どもの落書きは全世界で共通のネタを描き出しているようです。これはすごいことです。

子どもの力を甘く見てはいけません。ものすごいパワーを秘めた種類の人たちです。どうも、大人と呼ばれる種類の人になつてから、子どもという人たちを見くびってしまう自分がいます。ダメですねえ。可能性の宝箱たる子どもという人たちの、キラキラ光る原石を見逃さないような大人になりたいものです。



床下浸水とか床上浸水とか、ものすごい世界だと思います。だって、自分が普段暮らしているそのフロアが水で満たされていくんだから、そりゃ、かなり異常な世界です。

クスコの街を歩いていて、僕は、ムムムっと思ってしまいました。石の街・クスコが、水の街・クスコになってしまっていたからです。道を走る車が川の中を泳いでいるように見えてしまうくらいです。ザバザバザバァ、と水をかき分けて進んでいく車が妙にかつこよくます。

いわゆる集中豪雨みたいなモンです。空からドカドカと、本当にバケツをひっくり返したような雨が地面をたたきつけるんだから、たまったモンじゃありません。僕、カサを持っていなかったんです。お店の軒先をチョイチョイと渡り歩き、土産物屋で、何かを探しているフリをして雨宿りをし、何とかぐまかしながら、雨が過ぎ去っていくのを待ちました。

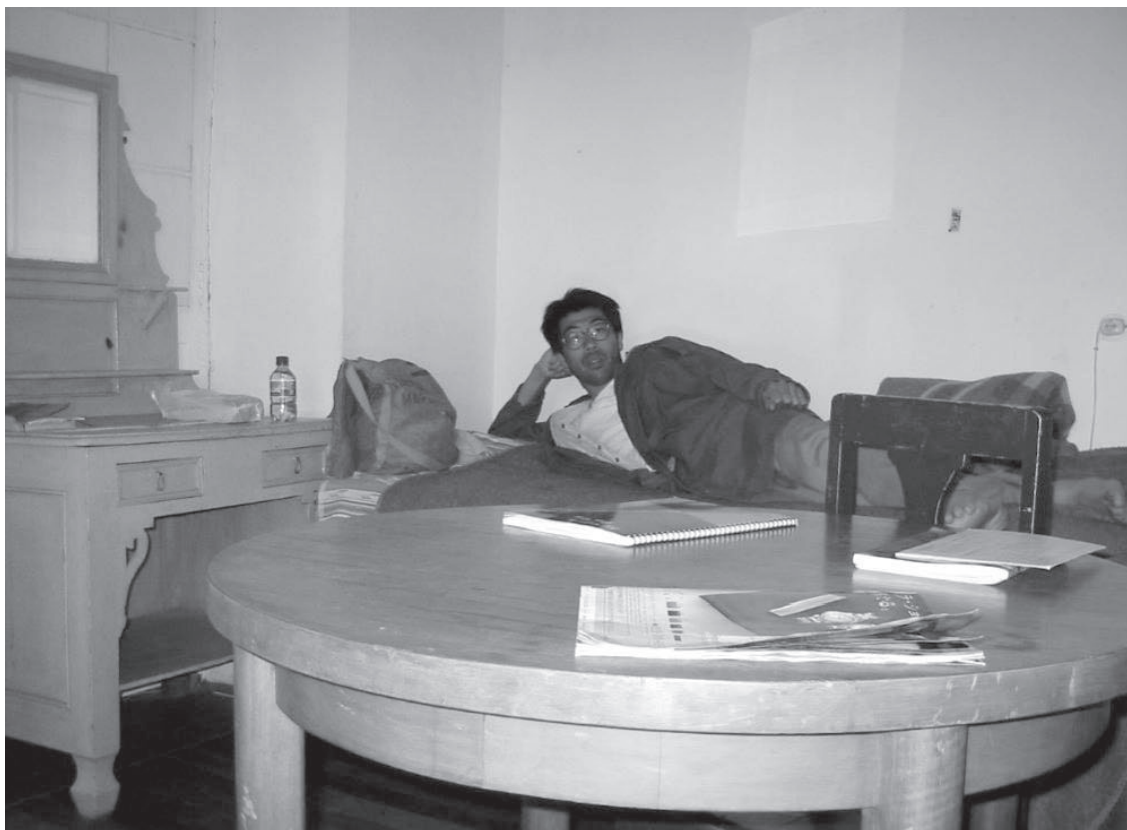
台風とか地震とか、大地の怒りを感じます。僕らの力ではどうにもなりません。普段は平和に……、静かに僕らを包み込んでくれるような大地です。それが、何かの拍子にドカンと何かを起こします。人の力を大自然の中で、どう感じるのか、自分はどう生きていくのか……、もっともっと深く考えたいと思います。母な
る大地のふとこころで……。



今までとは違います。明らかに違います。……何かを境にして一気に変わることがあります。

「あけましておめでとうございます」と言った瞬間に何かが変わるのでしょうか。そんなことないと思います。カウントダウンをしたときに何かが変わるのでしょうか。それも違うと思います。じゃ、何なんだろうと悩んでしまいます。

宿の中にはウキウキとした空気が流れていました。その象徴が杵と臼です。まさか、ペルーで臼にするとは思いませんでしたが、確かに杵と臼です。餅を食べるかもしれない……雑煮も味わえるかもしれない……なんて考えただけでウキウキしてしまいます。日本以外の場所で餅に出会える可能性つてのは低いはずです。ペタンパタン餅つきをするのは誰がなんと言おうと年の瀬を感じる日本の光景です。新年を迎えるために少しずつ準備をし、大掃除をし、だんだん心の中が高ぶっていき、年越しそばを食べ、除夜の鐘を聞き、初日の出を拝んで「あけましておめでとうございます」……となります。その時を目指してクレスシエンドを効かせていくから、何かが変わったように感じられるんだと思います。ものすごいエネルギーが必要になるけど、少しでも今までと違った世界が見えたときは、誰でも大きく変われると思います。



領域侵犯をされないこと、それはとても大切なことです。クスの街の中で、僕が領域として主張できるスペースはほんの少しでした。その部屋の中の、そのベッドだけです。それ以外の場所について僕が強く出られる所はありません。

自分の場所を一時的にでも確保していたことを証明するために、写真を残しておきます。ちよつとだけの間なので、テーブルも自分専用の物のように拝借します。スケッチブックやらガイドブックやらの小道具もそれらしく配置して、カメラの構図を考えます。そして、毎度おなじみのセルフタイマーです。ちよつと偉そうに自分のスペースであるベッドの上で自分の場所であることを強く主張した姿で横になりました。

まるで部屋全体が僕のものであるかのような態度です。本当に偉そうです……。この偉そうという様子が恐ろしくもあります。僕は自分が軟弱者であるがゆえに、先天的に偉そうだったり強そうだったりする人に対して怖さを覚えます。自分に自信たっぷり、人の言うことに耳を貸さないタイプの人からも不快感を覚えます。

僕は、決して強い人間じゃありません。だから、できる限り人からの声を聞こうと思います。弱々しいのにも関わらず頑固なところがあり、殻にこもることも多いけど、それじゃダメだと思つてがんばります。さて、実行できるでしょうか……。



僕らを乗せて列車は走ります。その名も「バックパッカー」です。貧乏人が乗る、安い列車です。もっと高いランクの列車も走っているし、その列車の方がいろいろと旅行者には快適さが準備されています。でも、所詮、僕のような貧乏人は移動さえできたら満足……、その程度です。

クスコの街を出発した頃は街の美しさに目を奪われていたのに、この頃になると、川沿いを走る自然との調和に心を動かされていました。のそのそと走っていく「バックパッカー」は決して超特急なんかじゃありません。少しずつだけど、確実に前へ向かっていくタイプの地道なヤツです。だから、外の景色を見て、その少しずつの変化を十分に楽しみます。いつの間にかスヤスヤと夢の世界へ入り込み、いつの間にか景色が変わっていることに気づき、驚きます。

列車が目指すのはマチュピチュです。高い高い山の上にあるという空中都市です。いっぺんにそこまで行くことはできないような場所です。まあ、もしもドカンといきなりそこに着いたとしても、高山病に悩まされるんだと思うけど……。クスコから高度を下げたりして近づいていくから、いいんです。それに、そこまでの道のりがあるからおもしろいんです。大地の変化を感じながら、ゆっくりと天空を目指します。



下を見れば地面が流れ去っていきます。僕の分身たちも一瞬のうちに大地へと帰り、姿を消していきます。

僕は小さい頃、列車のトイレに入り、少しでも怖いと感じたことがありません。そこには地面へと続く穴があいており、穴からはビミョ〜な風が吹き込んでいました。決してそこから下へと自分が落ちてしまうことはない……分かっていても、なぜか少しだけ怖かったです。

列車からの視点で見たら、ある程度の平和は保てます。が、線路からの視点で見たら、エグイことになってしまいます。走り去る列車の穴から、怪しげなモノが落ちてくるわけです。落ちてきたモノは地面に激突し、その痕跡を残していきます。もしも、踏切の真上での出来事であったなら、多くの人の目に触れることになってしまふんです。……うん、この姿はあまり見たくありません……。

ただネ……、単純にいやがるだけじゃダメだと思うんです。ヤツらのおかげで畑の野菜は大きく育つし、健康になれるんです。そりゃ、きれいな方がいいけど、でも、世の中には汚いモノも絶対存在します。その存在を忘れちゃいけないんじゃないでしょうか。……うん、この存在です……。

汚い話でゴメンナサイ。



大地が激怒することがあります。天が雷雨をもたらすことがあります。大自然とは、いくつもの顔を持っているものです。

マチュピチュへ向かう道、剥離骨折の足で、僕はへこへこ歩いていました。周りの人も、老若男女みんなそろって歩いていました。バスは出ていないのか聞いてみると、「無い」という答えが返ってきました。言葉は上手に使えないので、それが分かる程度にしか話ができませんでした。おかしい、と思いながらもへこへこ歩き続けました。「マチュピチュまでバスで行ける」と書いてあるガイドブックを片手に……。

天が泣いたようです。目の前には崩れ落ちた石が道をふさいでいました。前日の大雨で崩れたみたいでした。バスで一気に登り切ることが不可能だとよく分かりました。

楽をして目的地へ行こうと思えばそれができることもたくさんあります。でも、そればかりじゃないんです。むしろ、一步一步足を前に出していかないとたどり着けないことの方が多いと思います。そして、大きな岩山が現れたときでも、自分の足というのは確実に前へと進めることができます。見た目には大きな進歩はないかもしれないし、何センチという短い距離であっても、確実に前へと進んでいるんです。どんな困難な道でも、張り詰めた緊張感の中、最後までとことん前進です。

見えてきた……



見えた！……その瞬間でした。それまでずっとずっと憧れてきたものが、ほんの少し向こう側に行けば、そこにあるんです。心いっぱい、胸いっぱいです。……でも、まだ見えない……、もどかしいと思います。いつの頃からか憧れていた場所、マチュピチュです。世界中に僕が行ってみたい所が散らばっています。基本的に、行ったことがない所へは、どこへだって行ってみたいと思います。見たこともない不思議な世界が広がっているんです。いや、もしかしたら、全然おもしろくない所かもしれません。でも、行かなければ分らないんです。自分で見なければ分らないんです。肌で感じて、何かを思いたいんです。

場所によって空気が違う、と感ずることがあります。何とも説明ができない感覚です。ホールの中、ものすごい響きの歌が聞こえてきたときに背筋に感じるような何かです。合唱で、いろんなパートの音が一つになって、より大きな作品をつくり出していると、もう、心はブルブルに震えてしまいます。

たまたま僕がマチュピチュへ行くときにはバスが動いていませんでした。自分の足でホントに一歩一歩近づいていったという感覚があります。少しずつ、ゆっくりとそこへたどり着く、その喜びです。やっと見えてきた！……その瞬間でした。



いきなりビロ〜ンと目の前に一つの街が広がりました。山のとっぺんです。どうしても見たかったその街へやっとたどり着いたんです。マチュピチュです。

それまで、何回も写真を見てきていました。解説を読んだりもしました。でも、そんなモン、どあ〜でもいい、と思えるくらいにすごい景色でした。何でも同じだと思うけど、実物に出会えることほど印象的なことはありません。プロの写真家の作品を見てもやっぱり実物の雰囲気を感じ取るには充分じゃなかったわけです。

この感動を文にしたり絵にしたりして伝えようと努力します。努力はするけど、自分の力じゃどうにもならないんです。ものすごい力を持った人たちがやっても無理なことが、僕にできるわけがありません。分かってます、そんなことは……。けど、やっぱり自分の言葉で語りたいんです。これって、自分勝手なことでしょうか……。

他の人に何かを伝えたい、って思うことはたくさんあります。なかなか上手に伝わりません。言葉の限界を感じます。それでも、心はきつと伝わるだろうし、分かり合えるモンだと思っています。何かを伝え、何かを分かるためには、まだまだ修行が必要みたいです。

マチュピチュ

マチュピチュはすごいところ
でも
静けさがあるんだ

「静けさ」

マチュピチュはすごいところ
でも
静けさがあるんだ



筆舌を尽くす……

記録より記憶……、いつまでも残っているのは頭の中のもので
す。どんなにすごい記録であつたとしても、それは機械的な「何か」
でしかありません。人間の心つてのはすごいものだと思います。

自分の中に一つ、とても印象的なものが記憶に残っています。
それは静けさです。「音が無い」ということを記録に残すこと
……、できるのでしょうか。中学生の頃、合唱コンクールの時の
ことです。曲の中に、スツ……、と音がなくなる部分があつたん
です。みんなの声が、伴奏のピアノが……、すべての音がなくな
りました。この静けさを、僕は上手に表現することができません。
耳の中で何かが鳴り響いているような、「うるさいほどの」静けさ
でした。

言葉で表現できないことを絵にすることもあります。もちろん
僕も挑戦しました。でも、ダメです。とうてい僕が自分の眼で見
たものの感動には及びません。絵が下手なだけかもしれないけど、
思いがまったく伝わらないんです。絵を描くにも、それなりに時
間をかけました。マチュピチュの片隅で、長時間スケッチブック
を開く怪しげな日本人がいたことはまぎれもない事実なんです。

形あるモノはいつか壊れます。温かい人の心はきつといつまで
も残り続けます。思うんです……、記録より記憶……。



グラグラッ……、もし地震がきたらどうなるんだろうと思いました。日本という国は地震が多い国だから、多少なりとも慣れている部分があるような気がします。ペルーって地震がよくある国なんでしょう。……知りません。

マチュピチュは世界遺産です。世界的にスゴイといわれるものなんです。人類の財産です。……それがちよつと歪んでいました。シヨックでした。噂で聞いたところによると……、マチュピチュの遺跡はものすごくしっかりしているから滅多なことで崩れることはない……、けど、地盤がだんだん崩れてきてるから一気に崩壊する危険がある……なんて話でした。

崩れない財産ってあるでしょうか。……それは心の中にあります。……カッコつけすぎかもしれないけど、そう思うんです。それも、人それぞれに違う形で存在しているように思っんです。

……リングが好きな人がいます。ミカンが好きな人がいます。メロンが好きな人がいます。……どれも食べ物です。……値段は……違います。多分、メロンが一番高いでしょう。「一番だ！」という事実、高価であるという事実は変わりません。でも、メロンが嫌いな人もいます。自分自身が感じる良さを財産として、自信を持って心の中に温め続けていきたいんです。

でも、……でも……、崩れないで……！……マチュピチュ！

太陽のパワーを吸い取る……



太陽ってキラキラ輝いていて、いいなあ、と思います。夏の暑い時にはかなりイヤになることもあるけど、ジリジリと焦げつくような日差しには憧れを感じるほどの強さだってあります。冬の寒い時にはもつとパワーアップしてくれ、と思うこともあるけど、ポカポカと暖かい日だまりには甘えたいくなるほどの優しさだってあります。

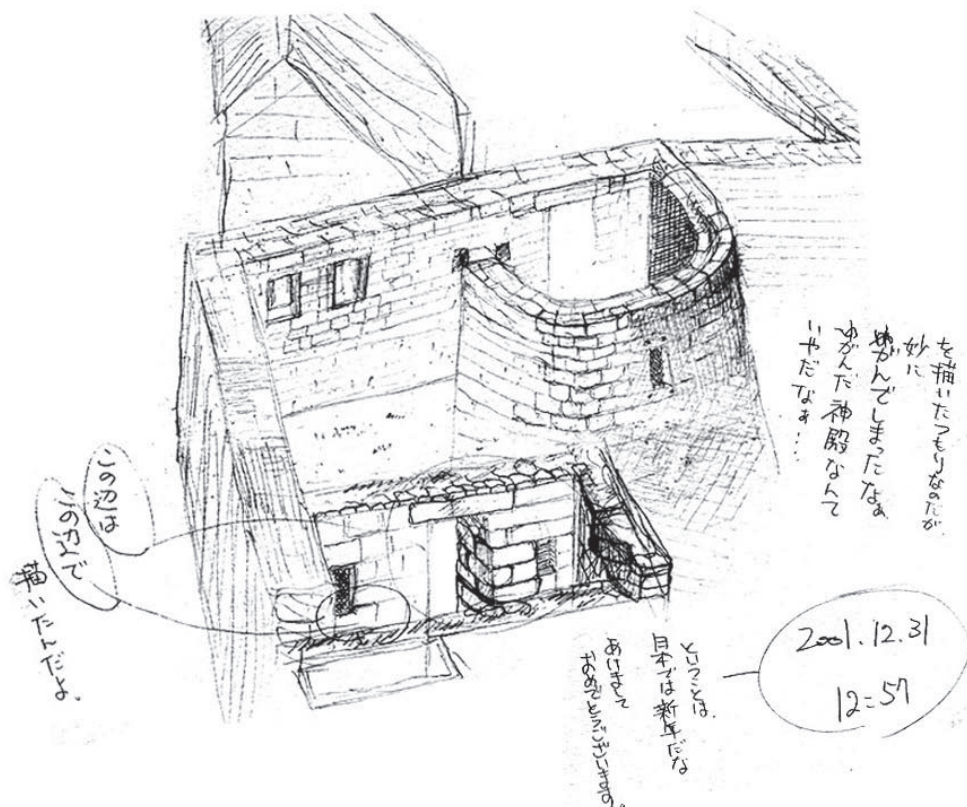
昔から人間は太陽を拜んで生きてきました。インカの人々は太陽に大きな力を得ていると考えていたし、そのためにいろんなことをしていたようです。マチュピチュにもその名残がありました。太陽を留める柱と呼ばれたりします。自分たちのもとから太陽が去ってしまったように、お祈りをするために石の柱を作ったみたいです。実は、その形が、向こう側に見える山の形にも似ていたりして、奥の深さを感じるわけです。

僕はといえば、そこに太陽のパワーがたまっていることを信じ、そこからパワーを吸い取ってやろうと、手をかざすんです。周りの人たちが何を思っているか……そんなことは関係ありません。僕はパワーを吸い取って帰りたいかったです。

自分にパワーがない人間としては、他のパワーにすぐるしか方法がありません。太陽じゃなくても、他にパワーを与えるタイプの人間もいます。……僕は、尊敬します。

カッコイイ造りです

太陽の神殿



よじ登ったり、離れてみたり、角度を変えて見てみたり、いろんなセコイ方法を試します。どうにかして、そのかつこよさを自分の紙の上に写し取りたいと思うんです。……で、そんなことをしている間にも、なぜか形が歪んでいくんです。おかしいことです。太陽を崇める人々は、それ専用の祈りの場を作りました。太陽の神殿と呼ばれるものです。まあ、実際にその場面を見た人がいるわけじゃないから、どんなモンか、そりゃ分かりませんが、遺跡としては貴重なもののようです。僕のセンスからいえば、石造りでありながら、きれいなカーブを描いているところなんか、最高にカッコイイと思います。

価値観の問題なんですけど、もし、インカの人たちが太陽なんてどうでもいい、と思っていたら、こんなカッコイイ建物はできなかったんだよな、なんて考えてしまいました。もし、インカの人たちが大根に価値を見出していたら、大根の神殿ができていたかもしれないわけで……。そんなのかつこよくないです……。なんで大根か……。そんなことはどうでもいいんです。あの、透き通るような白さに神秘を感じることもあるかもしれないじゃないですか。

あの神殿が太陽を祀るものでよかったとしみじみ思います。



登り切ったマチュピチュのてっぺんから下を見下ろします。すると、そこには曲がりくねった道が続いていました。確かに自分の足で登ってきたわけだから「はい、その通りー」と思うんだけど、全容を見ると、ものすごい道だったんだと改めて思うわけです。

歩いている時にはしんどいだけなので、顔は下向き、ひたすら足を前に進めるだけの作業です。時々、足首の剥離骨折の様子を気遣いながらタラタラ歩いていました。……そう、しんどいだけだったんです。

世の中には「木を見て森を見ず」という言葉があります。マチュピチュまでの僕は「地を見て道を見ず」という状態だったんだと思います。僕の性格上、とてもよくあるような現象です。どうも、何か一つのことには目を向けたときには、他のものが見えなくなってしまう傾向が強いんです。なので、たとえば「テレビを見ながら勉強をする」なんていうとんでもないことは、絶対にできません。他にも「二冊の本を同時並行的に読む」ことだって間違いなく不可能です。

この時は後から道を振り返ることができました。振り返ることができたのはラッキーです。でも、できれば振り返らなくてもわかるくらいに「木を見ながら森を見る」人間になりたいです。



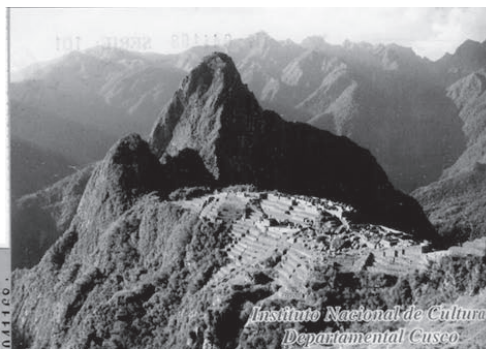
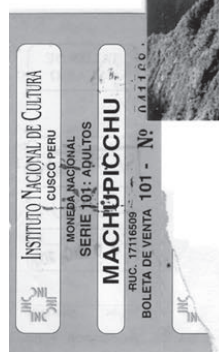
道路交通法第五十五条には「車両の運転者は、当該車両の乗車のために設備された場所以外の場所に乗車させ、又は乗車若しくは積載のために設備された場所以外の場所に積載して車両を運転してはならない。」とあります。簡単にいえば、「座席以外の場所に人を乗せるな！」ってことですよね。

満員御礼でした。トラックの荷台です。山道をマチュピチュの上からグネグネと下ってきます。メチャクチャ危険なような気がするんですが、当たり前のように走るわけです。ま、非常事態ですので……。バス交通が寸断され、これ以外には方法がないから仕方がなかったんだと思います。世界中の旅人がいろんな言葉で話しながら、荷台に乗せられていました。

ヒジョーにありがたかったです。勢いで上まで登ってしまったけど、下りるのには足首への負担が大きすぎました。山道で、僕は登りよりも下りの方がキライなんです。

トラックが、少しずつ坂道を下りながら、歩いている人を収容していきます。一人、また一人と、歩いている人が荷台へ引き上げられていきました。なんか、ちょっとうれしい気分でした。別に僕が何をしたわけでもないんだけど、乗り込んでくる顔に安堵感が満ちていくのがうれしかったです。崖崩れの場所まで、僕は荷台の上で、ガタゴトと幸せを感じていました。

二枚のチケット



この411があれば、翌日半額で入場できると
聞いていたのに、その日は「去年変わったのに」と言われ、
結局72ソル(20ドル)全額を払い直した。

この部分は
ゲートで手渡した。

ということ
↓
もう1枚



馬鹿の一つ覚えという言葉があります。何か一つのことしかでき
ない……そんな人のことなのでしょう。

じゃ、同じ場所にて二日連続で行く人間ってのは、やっぱり馬鹿なんじゃないか。つまり、僕は馬鹿なんじゃないか。

日本からペルーまでは、かなりの時間をかけなければたどり着けません。首都のリマからクスコを経由してマチュピチュまで行くにも、かなりの時間がかかります。一生のうちに何回も行けるような所じゃないんです。そうしたら、あのすごい石造りの街を二日連続でも見たいと思えてくるんです。ホントだったら、泊まり込みでその場にいたいくらいでした。マチュピチュの遺跡の中心で一夜を過ごせたら、なんと幸せなことでしょう……。遙か昔、そこでインカの人々が暮らしていたことに思いを馳せながら眠るんです。ステキです。……やっぱ僕は馬鹿なんじゃないか。

「一つしかできない」と考えるか「二つのことができる」と考えるのかで大きな違いがあるはずですよ。だって、何かの専門家って呼ばれるような人は、それしかできないことが多いと思うんです。それでも、その専門性は他の人に真似できないような超越した何かを発揮します。見てて「すげえ」と思えるわけです。一つ覚えだったとしても、それを極められたらいいなあ、と思います。

……やっぱり僕は馬鹿なんじゃないかな……。

グウウッバアアア〜イ！

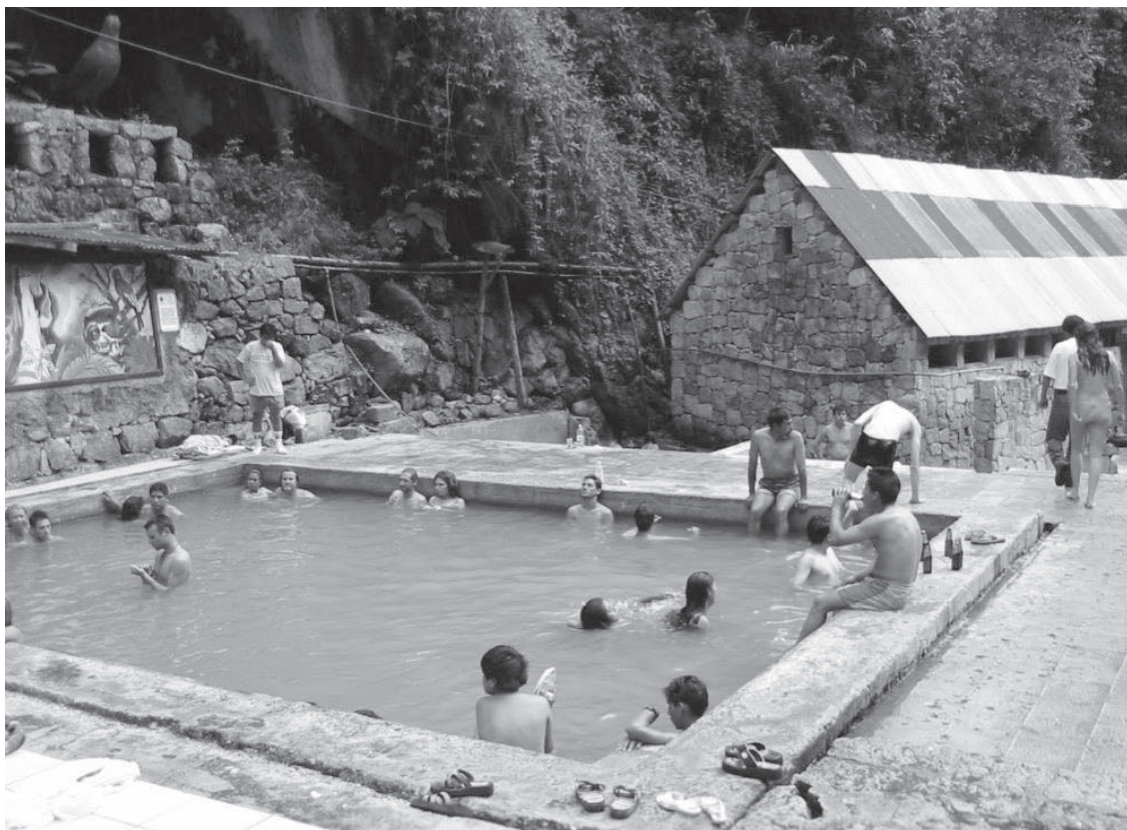


金を稼ぐ……一言で済んでしまうことだけど、強烈に大変なところもあります。アルバイトで時給千円とかいったら、ものすごくうれしい気分になった思い出があります。食品の工場みたいな所で、焼きそばをパックに詰める仕事でした。そこで、五時間働いて、五千円をいただいたわけです。……教訓……、焼きそばを長時間見つめ続けると……目が回ります。

さて、マチュピチュからの帰り道、子どもが金を稼いでいました。体を酷使する仕事でした。

その日は、バスが動いていたので、バスに乗って頂上から下りてきます。道の途中で子どもが「グウウッバアア〜イ！」と、さようならのあいさつを叫んでいました。バスがグネグネ道を曲がると、そこでも「グウウッバアア〜イ！」です。そのまた次も……、何度となく「グウウッバアア〜イ！」が続きました。驚くべきはそれが同じ子どもであることです。つまり、その子はバスがグネグネ進んでいる間に、山の中を直線で走り抜けてバスを待ちかまえていたんです。恐ろしい根性です。

バスがふもとまでたどり着くと、その子は車内に入ってきて、お駄賃をもらいます。どのくらいの稼ぎになるのか、知りません。でも、体力勝負の危険な仕事に充分なお金がもらえるか、疑問です。……貧乏人の僕は……少ししか払うことができませんでした。



マチユピチュから下りてくると、そこには温泉が待っています。幸せな気分です。その街の名前はアグアス・カリエントス、その名もズバリ「温かい水」という意味らしいです。すばらしい！

この温泉は混浴です。混浴、混浴です！……と、いつてもみんな水着を着てたり、Ｔシャツを着てたり、すっぽんぽんの裸じゃありません。日本の温泉だと、「水着着用禁止」なんて所もあるんですけどね……。

湯船も結構な深さがあります。もしも、日本の温泉宿みたいに「ふうふう」なんてお湯の中で座り込んだら、沈みます。僕が立って入って、胸ぐらいの高さまでお湯があるぐらいのレベルです。

要するに、日本でいう温泉の感覚じゃないんだと思います。天然の温水プールだと考えたらぴったりなんじゃないでしょうか。みんなプールサイドでゆるゆると温まっついて、子どもなんかは、大はしゃぎして泳いでたりするんです。

その場所にはその場所なりのマナーがあり、常識があります。僕らはその時々で自分の行動を変えなければいけないんだと思います。今から行く所はどこでしょう。明日行く所はどこでしょう。どんな気持ちで行ったらいいのか、ちょっと想像して……、さあ、突撃です。



真っ暗闇、ヘッドライトの明かりを頼りに前へ進みます。その先に待つマチュピチュでの初日の出を夢見てゆっくりゆっくりと足を前に出していきました。……そう、ゆっくりゆっくりなんです。なぜって……そりゃ、足の様子が不安だったし……、まあ、物理的に速く歩けなかったからです。

宿の中、ゴソゴソと動く者がありました。僕です。荷物からテープピングテープを取り出して、足首にグルグル巻きです。正しいやり方なんて知っているワケがないので、適当です。基本だけはおさえて、とにかく足に負担がかからない巻き方をしました。そして、靴下をはき、サポーターを装着します。ハイカットの靴に足をつっ込んでから、ヒモを固く結べば完成です。ナイトウォークスペシャルです。

僕は夜行性のヒトではありません。目は悪いし、感覚も鈍いし、何より眠くて仕方がない……そんなヤツにとって夜は厳しいものです。それでも、無理して動かなければいけない時があるんです。じゃ、どうするか……ってことです。自分に足りない部分は何かでフォローしなければいけません。本当だったら、自分の中身がそこまで高まるように努力すればいいんだけど……、無理です。じゃ、どうするか……ってことで、その場のぎのフォローです。目的のためには手段は選はないってことも、アリですよね……。

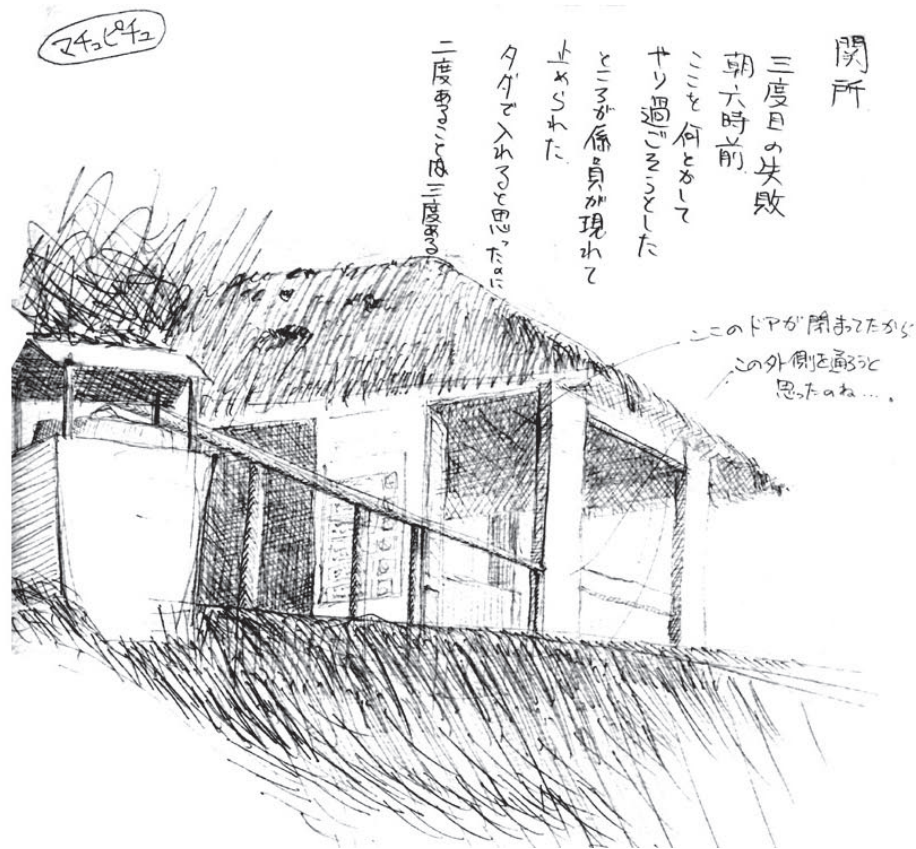


マチユピチュへの道はそんなに甘いモンじゃありません。剥離骨折の足首がどうなっているのか、胸の内に不安を抱きながら一歩ずつ歩みを進めていくわけです。そんな苦境に陥った僕の前にペイントされた岩が何回も訪れます。「CONTINUE」……つまり、まだ続くよ、ってことです。

テレビなんかで「to be continued」なんて出てくると、次の放送が待ち遠しくて、ドキドキわくわくしてきます。楽しく感じられます。同じ「continue」という英語のはずなのに、この時の僕にはものすごくきつい言葉のように思えました。「続ける！」と命令されたような感じがしたんです。この違いは何なのでしょう。

受験勉強なんかで、メチャクチャ嫌気がさしているところに、誰かから「勉強しなさい！」なんて言われた日にゃあ、「もう、やってらんねえよ！」とキレてしまいたいそつです。その気分です。前へ進むのが、グッソリって感じていた。

でも、そのペイントは僕に「がんばれ！」って言いたかったんですよね……きっと。そんな温かい人の気持ち素直に受け入れられない自分って、キライです。ホントに苦しかったんだけど、それでも、そんな自分って、キライです。まだまだこれから、大変な道が続いています。山道だけじゃないけど、いろんな「がんばれ！」を素直に受け入れられる心のゆとりは持っていたいです。



朝早く、僕はマチピチの入り口に辿り着いていました。むしろ朝というよりも夜明け前といった方がいいかもしれません。当然だけど、周りには誰もいません。いざ、入り口の向こう側へ！ 前の日に聞かされていたんです。暗いうちなら係員がいないからタダで入れるという話……。狙うのは元旦です。初日の出です。ちようどいいタイミングじゃないですか。「よし！」と思いました。チャンスは逃しちゃいけません。夜中に僕は宿を抜け出して、ヘコヘコ歩き始めました。ちよつと足が痛かったけど、まあ、いい感じでした。そして、いざ、入り口の向こう側へ！

「ヘイ、ユーー！」ってな感じだったと思います。呼び止められました。「なぜ？」……後ろの方から係員登場でした。僕が歩いていく情報が秘密機関から漏れた……んな訳やないでしょうが、見事に呼び止められてしまいました。結局、僕はまたしても入場料を支払い、「正式に」入場したわけです。

でも、後ろめたさが無い、つてのは大切かもしれません。自分にはそれなりの権利があるんだと正々堂々と主張できます。何かやり遂げたときに感じる、自信と同じようなモンだと思います。誰もが認める、そんな姿で生きていきたいです。目の前に現れた入り口のの向こう側へ向かって胸を張って進むんです。できることをすべてやって……、いざ、入り口の向こう側へ！

一月一日



「初日の出はどこだ?」……はい、雲の向こう側です。残念！
僕はこの年の初日の出を見ることができませんでした。

やっぱりくやしかったです。夜も明けていない暗いうちから痛い足を引きずってマチュピチュを目指し、ゲート付近にいた係員のおっちゃんに呼び止められ、それでも何とか辿り着いたかと思ったら、辺り一面が霧だらけだったんです。

……といって、僕はそのまま砕け散るような人間ではないので、とにかく記念撮影です。せめて、太陽をつなぎ留めているはずの柱をバックに写真を残したいと思いました。一月一日だから、右手も左手も人差し指を天に向け、正月であることをアピールです。

早朝のマチュピチュ、周りには誰もいません。世界遺産であるマチュピチュを独り占めしている気分でした。かつては数々の人たちがそこで暮らしていたはずです。そんな文化的価値の非常に高い場所に一人……、なんて贅沢なんでしょう。しかも一月一日という新年を迎える日です。知らず知らずのうちに、「よし、今年も頑張ろう!」などと考えてしまいました。何を頑張ろうとしていたのか、それはよくわかりません。でも、頑張ろうと思ったわけです。

セルフタイマーで寂しく証拠写真を残しつつ、年の始まりに思いを馳せました。遙か遠く、雲の向こうの太陽に向かって……。

いらっしやい！



何度びつくりさせられたことか……、アグアス・カリエンテスの通りを歩いていて、出会ったヒトです。メニューを広げて、微笑を旅人に投げかけてくれます。かなり無機質なその笑顔を見るたびにギョツとさせられてしまったんです。

何度でも同じようにびつくりする僕は、やっぱり馬鹿なんだろうと思います。でも、気配を消して、いきなり現れるんです。僕が、何の警戒心も持っていないことを知るか知らずか、振り向いたときに、そこにいるんです。もちろん、いつの間にか僕がその場に勝手に近づいてしまっているんだけど、それでもダメでした。馬鹿なんだろうと思います。

マネキンのように「ワタシハ作りモノデスヨ」という顔をしていたら、そんなにびつくりしなかったと思います。妙に人間的な雰囲気を持っていて、変なんです。それで、中途半端なんです。人形なら人形の雰囲気です。人間なら人間の温かさを感じさせてほしいんです。人間の温かい心がないのに、表面だけ人間っぽい姿が、僕には受け入れられなかったんだと思います。

人間には心があります。ドキドキしたりフクフクしたりするすてきな生き物だと思います。人間として生まれてきた、その心を強く、そして温かく持ち続けていきたいモンです。

みんな大好き？



国民的飲み物……とガイドブックには書いてありました。でも、国民的飲み物って何なんですか。分かるようで分からないように、不思議な言葉です。日本で、国民的飲み物っていったら、緑茶になるような気がします。普段、一般的に日本人の飲み物と考えたら必然的にそうなるはずです。

……ペルー人が日常的に飲んでいるのは何なんでしょう。もちろん、僕はペルーに住んでいるわけじゃないから正確に分かるはずがありません。でも、宿には「カ」の葉っぱがゴッソリ置いてあって、みんなで大量に「カ」茶を飲んでいました。じゃ、ペルーの国民的飲み物は「カ」茶になってしまいます。

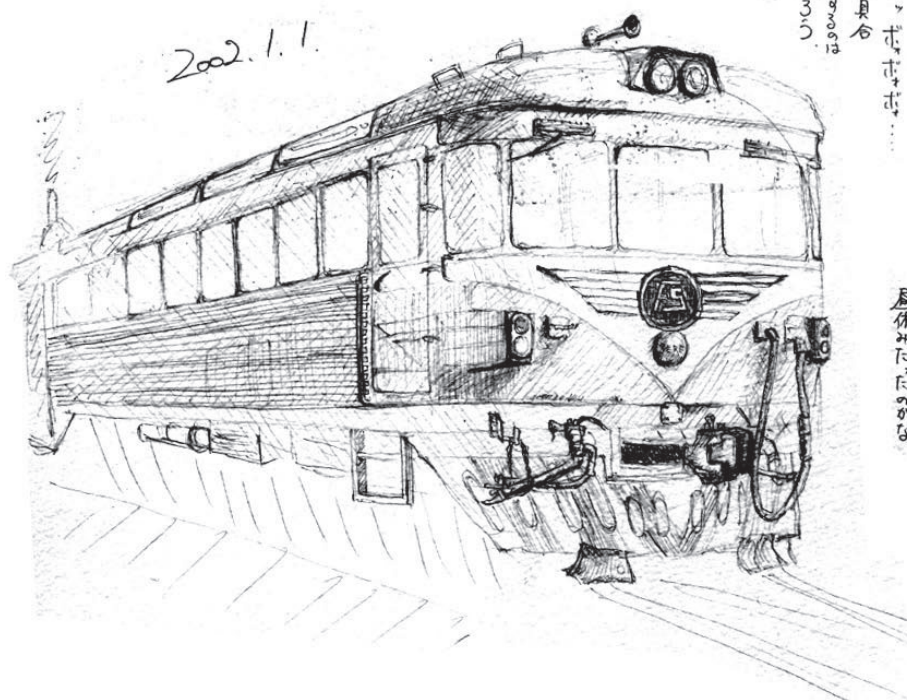
本には「インカコーラ」という飲み物が国民的飲み物として紹介されていました。いわゆる清涼飲料水です。なんとかいうインカの頃から飲まれている成分が含まれているという噂だけど、僕に分かるわけもなく、ゴクゴクと飲み干してしまいました。

ゴクゴク飲み干せる国民的飲み物……日本だったら……ペットボトルのお茶だったりするんでしょうか。なんか違和感があります。静岡県人としては、お茶はやっぱりお湯を注いで、淹れたての温かいものを飲みたいと思います。国民的飲み物という言葉が曲者なのかもしれません。

あ、インカコーラは、かき氷の味……という印象でした……。

列車

風邪？



この絵は修理中のようじゃあ。片方のエンジンからは排気ガスがモロモロと出てくる。もう片方はまだ止まっている。全体的にはいい感じ。

この絵を描いたのは、10分くらい。駅員さん、鉄道関係者にのぞき込まれ続けた。居休めたのがな。

力強く進みたい……いつまでも動き続けたい……そう思います。それは人間だって列車だって同じだと思います。

駅では一つの列車が煙を上げていました。あんまり調子が良くない色でした。もちろん、僕は整備士じゃないし、列車の煙を見ただけで調子が分かるわけじゃないんだけど、それでも、なんとなく「あ、大丈夫かな」と思っていました。直感です。

なんだかよく分からないけど、「ん？」と思う瞬間があります。それが物だったり人だったり、その場の雰囲気だったりします。確かに何かが変わるんだけど、それを客観的に裏付ける理由がはっきりしていなかったりするんです。自分には分からないけど、周りの人には分かっていたり、誰か特定の人には分かっていたりすることもあります。それで、小さい頃には何が何だか分からずに叱られたりしてぐちゃぐちゃに思ったりしたんだと思います。

煙を噴き上げて走る列車はディーゼルエンジン搭載で、あんまり地球にやさしくありません。それも故障していたら余計に煙の濃さがドロドロしてそうです。当然、この列車は自分が悪いことのお手伝いをしてるなんて夢にも思っていないはず。むしろ、山岳地帯を一生懸命に走って、世のため人のために精一杯働いてる実感でいっぱいのはずです。一生懸命に頑張ってるモノたちこそ、正しく評価される結果を出させてあげたいと思います。

この標識は……



悪い人はキライです。だって、イヤじゃないですか……。いい人が好きです。だって、イイじゃないですか……。単純なことです。でも、それってすごく大切なことだし、すごく難しいことだと思います。

初め、ペルーという国への僕の印象はあまりいいものじゃありませんでした。物騒な国で、強盗なんかもたくさんいるような情報もあつたからです。泥棒はイヤです。物を盗るのは悪いことだし、物を盗る人は悪い人です。しかも、無理矢理に人の物を盗ったりしたら、最悪です。

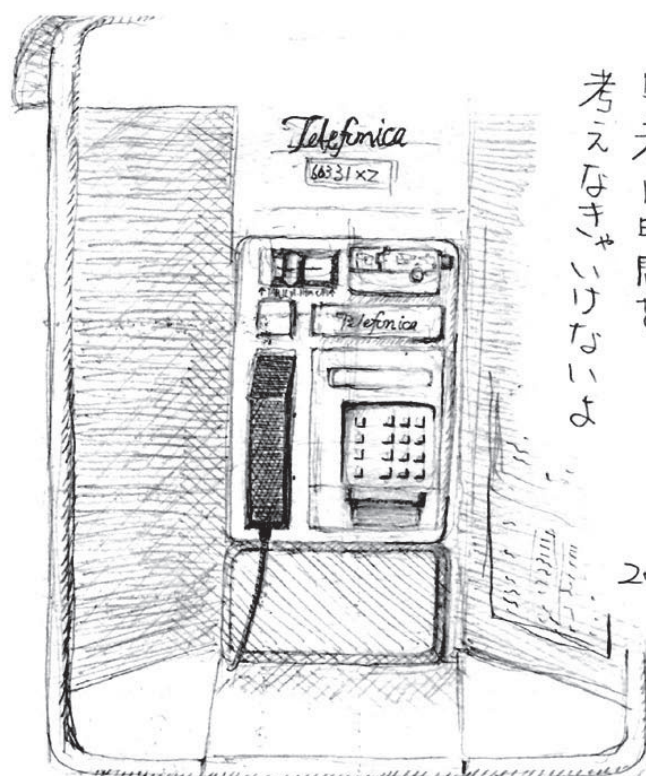
んで、街中を歩いていたら、変な標識が立っていました。解説があるわけでもないし、どんな意味が込められているのか、それは分かりません。でも、なんか、イヤな感じがしたんです。「引つたくり禁止」ってイメージです。そんなにあちこちで多くの泥棒が活躍してるなんて、もう、悲しすぎます。

……じっさいは、僕の周りにそんな悪い人たちは登場しませんでした。これが幸運なことなのか、当たり前のことなのか、どうなんでしょう。ま、いいんです。自分にとってペルーという国がイヤな国に思わずに済んだからです。ただの印象かもしれないけど、イヤな国はキライです。だって、イヤじゃないですか……。イイ国が好きです。だって、イイじゃないですか……。

電話

僕と世界をつなぐ
貴重な道具

でも
時差に時間を
考えなきゃいけないよ



声はすれども姿は見えず……とはいうものの、声だけでも聞こえたらうれしくなることだってあります。話の内容なんてどうでもいいんです。とにかく声が聞こえてきたらそれでいいんです。

どうしても声で伝えたいこともあります。その時、自分がこんな思いでいるんだよ、ってなことを言葉にして届けるんです。いいですよ。

地球の裏側から声が聞こえてきたら、どんな気持ちでしょう。最初はびっくりするはずですよ。「ウソだあ」と疑うかもしれません。そりゃそうです。時差にしたら十二時間の向こうから一瞬のうちに声がするんですから。しかも、姿は見えないわけで、そしたら、家の近所の公衆電話からかけたとしても聞こえてくる声は、まあ結論的には同じなわけです。

それでも、声を聞きたいと思い、声を届けたいと思いました。いくら便利になったといっても国際電話は少しばかり余分にお金が必要です。話ができてホッとする反面で、「もう話すな!」とも思ってしまうました。ついでに「何、何?」と別の人間まで出てくる始末……。なんでこの時間にお前がそこにいるんだ、としっかりツツコミを入れつつ、電話料金が吹っ飛んでいきました。

よし心はつながった、と自己満足にひたりながら、朝ごはんを食べに向かいました。

老若男女、それぞれに……



変身……いや、実際にウルトラマンとか仮面ライダーになれたらすごいけど、そりゃ無理です。僕は一応地球で生まれ、日本という国で育った者ですから……。もしかしたら違うかもしれないけど、少なくとも自分ではそう信じ込まされて生きてきています。

変身……床屋から出てくると、その気分を感じることができたりします。さっきまでのボサボサ頭の自分とは明らかに違う姿で店から出てくるんだから、気分も変わるってモンです。その程度のことでも自分の気持ちが変わるんだから不思議です。

変身……言葉がうまく伝えられない国で髪を切るというのが、この上なく楽しく感じられます。百パーセントに近く店の人に任せるような状態です。自分がどう変わるのか、今までとは違った視点でその変化が現れたらおもしろいじゃないですか。

変身……のためには苦勞を乗り越えなければいけません。固いプラスチックのイスと戦うこともあります。ひげを剃るのにも後ろへ傾かない背もたれで、首が痛いこともあります。髪の毛が服の中に入ってチクチクすることだってあります。No problem です。

変身……できるかできないか、本質的には自分次第です。床屋さんの力を少しだけ借りて、より大きな自分の変化を導き出したわけです。助けは借りるけど、本当に変身するのは自分次第です。



だいたいどこへ行っても犬はいます。ノラ犬で、何もそこまで、と思うほどにやせてみすばらしくなっている犬も多くいます。どうしても、貧相になっていく運命のようです。

ノラ犬は妙な病気をもっていることもあるし、ちょっと怖いので好きじゃありません。飼いだが好きです。どうも、彼らの方でも僕のことを好きになってくれることが多いような気がします。とはいっても、僕自身は犬を飼ったことはありません。どんな風にしたら彼らが喜びのか、ドキドキしながら接します。

僕が彼らに対して最初にすることは、しゃがむことです。彼らと目線の高さをそろえることから始めます。それから少しずつ近づいて、少しずつ手を出してみます。様子を見ながら鼻をクンクンさせてきたら、お互いに緊張感が解けていきます。その後は、親友のように遊ぶだけです。……これは僕の勝手な思いこみ的な流れなので、本当のところは分かりません。是非、彼らに聞いてみてください。

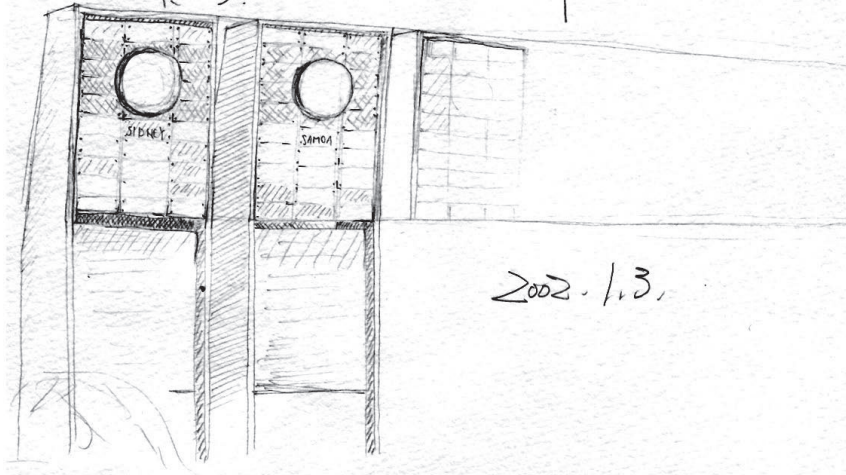
でも、最初の、目線の高さをそろえるところは間違いじゃないと思っています。人間でも、上から見下ろされた時に感じる威圧感は、近寄りたくないイヤさです。本能的に感じ取る部分からスタートして相手と仲良くなるように努力をしています。

ムサシ君、こんな感じで仲良くなりましたよね。

時計

世界の時差を表す
いくつかの時計
シドニー、サモア、デリンパー
東京もあった。
でも何を基準に
選んでるんだろ……

なんて描いていたら
係員がバタバタ寄ってきて
合図のヒコキに乗れと言う
「ヒコキは満員だ」と言ってきたら
どうなってるんだ



時の流れ

二〇〇二年、元旦をマチュピチュで迎えて初日の出を目指しながらも、二が日の間にもうクスコの街をあとにしているというハードな日程でした。

一月三日の朝、クスコの空港に着いてチェックインを済ませそうとしたら、「このヒコキは満席だ！ 次のヒコキに乗るしかない！」と言われてしまいました。そんなアホな……という世界です。しばらくは係員と戦いましたが、どうにもならないので仕方なく次のヒコキに乗れるように手配して、待合室で座っていました。そこにいくつもある時計がそれぞれ、世界各国の時間を表示しています。もちろん時差があり、それぞれの時を刻んでいました。どういう基準でその都市を選んだのか知りませんが、とにかく世界中で時が流れている事を示していました。

今現在、この時でも世界は動いていて、しかも、朝だったり夜だったりするわけです。不思議なことです。理屈ではわかるけど、実感としてわかりません。世の中、わからないことがいっぱいあります。わかるような気がするんですけどね……。

……なんて、絵を描いていたら、血相変えた係員が走ってきて「急げ！」と言います。僕は、予定通りのヒコキへと連れて行かれたのでした。どうなっているのやら……訳ワカメ……。

行っ
てら
っし
ゃい
！



さようなら、それから、行っ
てらっ
っし
ゃい
……この言葉は同じ
時に使えるモンでしようか……。時々僕はそんな機会に出会いま
す。その場を離れていく人に対して、僕はその道の先を思っ
て「行っ
てらっ
っし
ゃい」と口にしてしまっ
たんです。「さようなら」だけじゃ
何か寂しいような気がしてしまうんです。

ペルーの空港に、そんな場面を見ました。もちろん言葉が分か
るわけじゃないけど、そんな感じがしたんです。見送る人たちが、
「行っ
てらっ
っし
ゃい」って言ってるように聞こえてしまったんです。
夕日を正面に見て、しみじみと「行っ
てらっ
っし
ゃい」と言う姿に
見えました。

僕は一人旅……見送りをしてくれる人もいません。見送りを受
けている姿に憧れます。でも、僕がペルーという国を好きになれ
たんだから、きっとペルーという国自体が「行っ
てらっ
っし
ゃい」
と言ってくれるんだと、勝手に思うことにしました。ロマンチス
トなだけかもしれないけど、思いを持っている相手からは、きっ
と思いが返ってくるんだと考えてみたんです。

実際に「行っ
てらっ
っし
ゃい」と言ってくれる人がいることはと
ても幸せなことだと思います。逆に、それを言うことができる人
も幸せなのかもしれません。ひとまず、僕は「行っ
てらっ
っし
ゃい」
と言える人になろうかと思っています。……「行っ
てらっ
っし
ゃい！」



パツと外を見ました。僕が乗る予定のヒコーキ会社のマークが目に見え込んできました。そして、そのヒコーキは煙を上げていました……。目が点……。何じゃこりゃ、という感想です。

ペルーの空港を飛び立ち、日本へ向かう乗り継ぎのための空港でのことです。ペルーと日本とは遠く離れているから、そのまま乗りっぱなしで帰国することはできませんでした。僕が特別にすごい人間だったらチャーター機なんてモノが出ることだってあるかもしれないけど、ま、とりあえずは無理です。で、乗り継ぎのヒコーキが来るまで、ぼあゝと時間を過ごしていました。そして外に見慣れない光景が展開していたというわけです。

空港の中がそんなに騒々しくなかったので、そんなに大きな事故ではなかったんだと思います。よかったと思います。ヒコーキ事故は交通事故に比べたら出会う確率が少ないみたいだけど、一度事故になってしまったら多くの人が犠牲になります。そりゃ、飛んでしまったヒコーキの下には空気しかないし、それが異常な状態になってしまったら大惨事になることは避けられないことです。不幸中の幸い……。この時に僕が目撃した煙には、大惨事のおいひはなかったということです。

あとは、自分が乗る予定のヒコーキが無事に飛んでくれること、日本へ帰り着くことを祈るばかりです。

相棒

紅茶バッグ

インド、カルカッタで
買ったから
約7年

フいに
手提げの部分か
ビリッ
と
破れてしまった
修理可能だろうか



ヤツとの出会いはインドでした。グシャグシャした道のボロボロになった店先に、ガサガサとつるしてあったような気がします。ヤツは、その店に並び僕に出会うまではお茶を運んでいたようです。中にいっぱいのお茶を詰め込み、移動していたはずです。

ヤツとは一緒にいくつもの国を旅しました。ただのボロボロだったヤツに、僕は肩かけのひもを縫いつけました。あんまりたくさんのお物を入れると、ヤツは僕の肩に食い込んで攻撃をしてきました。それでも、一緒に旅を続けました。ある国では米袋と言われ、ある国では油にまみれ……と、たくさん経験もしています。

ペルーの旅を終えようとしているとき、ヤツは余計にボロボロの姿になってしまいました。ビリッと持ち手が破れてしまったんです。なんか、悲しい出来事でした。あちこち行動を共にした相棒が負傷してしまっただんです。荷物をしまうことには問題なかったけど、それでもやっぱり心が痛いような気がしました。

消費社会といわれる世の中では多くの物たちがあつという間に捨て去られていきます。貧乏性だという理由もあるけど、僕はすぐに物を捨てられません。ゴミに近い物たちが周りに増えていきます。でも、自分と時間を一緒に過ごした物たちには愛着がわきます。大切に、丁寧に使ってあげたいと思うんです。人間だつて同じです。やさしく、じんわり付き合っていきたいと思います。



黄金の国か……ジパング。僕が帰ってきた時の日本は冬、くすんだ色をしていました。見るからに寒そうな光景です。黄金色に輝く田んぼが広がる秋もあったはずだけど、季節は移り変わっていました。

四季、そんなすてきな自然の流れを感じられる国、日本が好きです。家族旅行から戻ってきた人が、「ああ、やっぱり家が一番だよなあ」なんて言うのと同じかもしれません。それならずと家にいる！ というツツコミもあります。……それを言っちゃあおしまいです。

逆に、家がいいから旅に出るってことだってあるはずです。家に帰れるという安心感があるからこそ旅を満喫できるってことです。ま、僕の場合は家賃を払って暮らしている身……それでも、一応の帰る場所が確保されています。安心です。

世界中、行ったことのない場所へはどこへでも行ってみたいと思います。幸運なことに、そのチャンスは……たぶん……たくさんあります。僕は日本という国で日常を過ごし、いつでも旅立てるようにしておきます。手帳にはいつも「旅立ち」とメモしておきたいくらいです。

終わってしまうという寂しさを感じながら、美しい国、日本で、次の旅へ思いを馳せ、このペルーへの旅は終了です。

あとがき

『夕凧のキ』第一作が本という形になったとき、とてもうれしい気持ちになりました。自分が感じたことを「物」に変化させることができたこと、それが自分の手の内にあるということに感動しました。さらに、自分の思いが形になったとき、周りの人の中で「おお！」と感じてくれた人もいました。ものすごくありがたいことだと思います。ついでに「もっと読みたい」という感想をもってくれた人もいました。やっぱりありがたいことだと思います。

僕はいつまでたっても自分勝手な人間です。人に頼ってばかりで迷惑をかけて……、それでも自分の思いを表現したいと思ってしまうのです。貧弱な思いかもしれないけど、それでも自分の外へと向けていきたい思いでもあるのです。

今まで自分が体験したことなんて、質、量ともに大したものではありません。そんなことはわかっています。ちっぽけな人間のちっぽけな体験でも、本人にとっては高い価値をもったものです。地球の上をあちこち行ったり来たり、そこでくだらないことを考えて、悩み喜び悲しみ楽しみました。その僕の気持ちを最初に伝えようとした相手は、そのとき目の前にいたクラスの子供でした。多少なりとも彼らの糧となるように願って文章を綴ったわけです。学校という限られた世界の中だけではない、広い世界に眼を向けてくれたらありがたいと思っています。

僕の文章が形になったとき、そこに人の思いがつまっていて、人の温かさにあふれたものになったらいいなあ、と思います。

僕の文章を読んだとき、まだ行ったことのない場所でまだ見たこともないものを見た、そんな感覚になれたらいいなあ、と思います。

《著者紹介》

じろちょう

現住所：静岡県浜松市

学生時代に放浪癖が現れ、今に至る。

放浪歴

チャリダーとしてつなぎつなぎで日本一周を達成。軟弱者であるが故に、一度にたくさんの距離を走ることはできない。チャリンコから降りることに対してほとんど抵抗を感じないため、他の人から見たらチャリダーに思えないこともありそうである。ライダー歴は浅い。毎日、超短距離を乗り回していることの成果か、運転技術は非常に拙い。愛車「赤龍丸」と共に旅にも出るが、毎回のようには台風と仲良くなっている。国外へは身一つに近い形で逃亡を企てる。初めての異国体験・インドにてその魔力にはまり、以後、世界征服を考えるようになった。しかし、言語能力に問題があるため、自分が魔力に蝕まれるばかりで、周囲を自分の思うように動かす「征服」にまで至っていない。今のところ学校という場所で「先生」と呼ばれる生活が続いている。

タビのキ 其の貳

2006 年 10 月 10 日発行

著者 —— じろちょう

発行 —— 株式会社 **かんぼうサービス**

発売 —— 株式会社 **かんぼう**

大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号 (〒550-0002)

電話…… (06)6443-2171 / FAX…… (06)6445-2470

印刷／製本……モリモト印刷株式会社